
スマイル

CC

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

スマイル

【Nコード】

N2605R

【作者名】

CC

【あらすじ】

沙優ゆさが高校の時に出逢った二人の男、安堂あんだうさんと柊木ひいらぎくん。柊木くんが運命の相手だと思っているのは沙優の勘違いだと否定した親友の梨花は、安堂くんが沙優を見ていると言い……。高校時代の苦い思い出が大人になった今、偶然の再会から再び蘇る。

はじまり

「ほら、安堂くんが沙優の事、見てる」

肘で脇腹を突かれて、傍らに並んだ友達の梨花を振り返る。

帰り支度を終えて教室を出て、長い廊下を歩いて階段の隣にある教室の前に差し掛かった時だった。

「ね？安堂くん、いつもああやって沙優の事、見てるんだよ？」

梨花に言われてちらり、と目だけで振り返った先、開け放たれた扉の奥に見えた教室の中に、数人の男子生徒が見えた。

一つの机を囲んで談笑している男子生徒達はこの3年間一度も同じクラスになった事のない生徒ばかりで誰が誰だか分からなかったが、その中に。唯一、1年の時に同じクラスだった石橋くんを見つけて思わず顔ごと振り返ると、その隣で笑っていた男子生徒と目が合った。

パチパチツと音がして目の前で何かが弾けたように眩く煌めき、心臓が大きく跳ねてキュツと締め付けられた。

教室の中の、窓際の近くに立っている彼と廊下を歩いている私とは随分離れている筈なのに、ぶつかりあつた視線から吸い込まれて間近に彼の顔を見ている気がした。

「この前なんて『あの子、可愛いよね』って言ってるのが聞こえたし。安堂くん、沙優の事が好きなんだと思う」

梨花の声を何処か遠くに聞いていた。

窓から差し込む夕日を背にした安堂くんは柔らかかそうな栗色の髪

をさらり、と小さく傾けると、優し気に瞳を細めてニッコリとほほ笑んだ。

*

高校3年の、梅雨にさしかかった頃だった。

1年の秋に廊下で一目惚れした運命の相手をずっと想い続けていた私に、親友の梨花が突然”沙優の事を好きな男の子が居る”と、言い出したのだった。

それがE組の安堂くん、同じクラスになった事が無いので殆ど彼の事は知らなかったが、女の子の間ではそれなりに人気のある”イケメン”の類の男の子だった。

すらりとした長身と、当然のようにそこに添えられた長い手足。小さい頭を覆う栗色の髪はさらりと耳にかかり、女の子のように滑らかな肌をした顔に配置された目、鼻、口は絶妙なバランスで整い、少し大き目の唇はいつも穏やかにほほ笑んでいるようにも見える。そんな、見た目完璧な彼はボールを追いかけて泥塗れになるほど熱中する事は無いがそつ無く部活動をこなし、学業においても他人よりも少し秀でた成績を修めている。更には、誰彼問わず友好的な姿勢からか友達も多く、他から浮いてしまつて他人を拒んでいるような生徒でさえも彼の事は認めているようだった。

知れば知るほど、その彼が私を好きだという話は信じられず、梨花の話がいい加減に聞き流していたが　あの日。

何事も大袈裟に話す梨花の事だからきつと何かの見間違いや聞き違いを大きくして騒いでいるだけだと、話し半分で振り返った、あの日。

ほほ笑む安堂くんを見て、それまでの”運命の相手”に対して抱いていた想いがまるでテレビのチャンネルを変えたみたいにパツと一瞬で消えて無くなつてしまつた。

ずっと胸に秘めていた、秋の日の廊下で出逢った運命の相手への想いが。

ランチタイムに購買へと急ぐ人波に押し出され、廊下で転びそうになった私の背中を支えてくれた”運命の人”。

すみません、と振り返った時にはもう、背中を向けて人混みの中に消えてしまった運命の彼は隣のB組の柊木くんひぎだった。後になつて、一緒に居た梨花があれば柊木くんじゃ無かったと言っただけで、咄嗟に背中に大きな掌を添えて支えてくれたのは確かに、柊木くんだと思った。

ありがとう。

一緒に居た友達を追いかけていく柊木くんの背中を見送りながら心の中で呟いた。

すると、まるで私の声が聞こえたみたいに柊木くんが振り返った。目が合つて。

彼はキュツと口尻を引き上げると白い歯を見せて笑った。

「隣で見てたから断言するけど違うよ、運命の相手は柊木くんじゃないよ」

幾度となく梨花に繰り返されたけれど、それがもし柊木くんじゃなかったとしても、いつしかそんな事はどうでもよくなっていて、運命だと散々言っただけ、単純に柊木くんが好きになっていた。

「それにね、同じ中学だったから言うけど、柊木は目の前で女の子が転びそうになっても助けられないよ、見て笑う様なヤツだから」

好きになつたと言つても声をかける事も出来ずにいつもそつと遠くから見ていただけの柊木くんは子供の頃から野球をしていたらしく、華奢に見えるのに以外とがっちりとした肩をしていて、夏になると白いシャツの袖から浅黒い筋肉質な腕が伸びて男らしい印象を与えた。高校に入つて野球から離れてしまったので髪を伸ばしたらしいが、中学までは球児には定番の坊主頭だつたらしい。それでも意志の強そうな黒い瞳と筋の通つた高い鼻を持つ柊木くんはそれなりに人気があり、梨花の友達にも彼を好きな子が何人か居たらしかった。

「みんなことごとく振られてたなあ。女に興味は無いとか、そんな理由だつたつて言つてたよ」

つまり、見た目だけ大きくなつたけど中身は小学生のまんまだつたつてヤツ？

梨花は言つて苦笑いを浮かべたが、そんな話を聞いたところで彼への気持ち冷めてしまうような事は無かつたのに。

それ所か、時折盗み見るあの、子どものように歯を見せて無邪気に笑う彼の笑顔がどんどん好きになつていったのに。

『安堂くん、沙優の事が好きなんだと思う』

目が合つて。

ふつとほほ笑まれて、梨花の言葉が耳に届いて。

たつたそれだけの事なのに、運命だ何だと騒いだ柊木くんの事など一気に忘れてそれから安堂くんの事ばかりが気になつて仕方なくなつてしまった。それが。

全部梨花の策略だと、気付かずに。

5年後の再会

なぜ、今になってあんな昔の事を思い出したんだろう。

目覚めてもまだ、夢の中で締め付けられた胸は痛んだままだった。

*

眠気覚ましと言う名のコーヒーを飲んで家を出た。

大学へ通う為にか家を出て独り暮らしを始めてから彼は5年、用意された朝食が無くなってからすっかり朝は食べない生活に慣れてしまっていた。

イヤな夢を見てよく眠れなかったせいでまだ眠い目を擦りながら、混み合う電車を3駅我慢して改札を出る。時計を確認しながらバスに乗り込み、10分程でバスを降りると真新しいビルに駆け込んだ。予め計算しておいた時間と若干のズレが出て、出勤にはギリギリの時間だった。

今日が本社から出向後初めての会社なのにギリギリではいけないとエレベーターを降りてから廊下を走っていると、不意に開いたドアから人影が飛び出してくる。

「あっ……！」

ぶつかりそうになって慌てて避け様としたがヒールの高い靴では素直に止まる事が出来ず、どん、とぶつかってしまった。

「す、すみませんっ」

謝りながら頭を下げると、ぶつかった相手も「悪い」と、低い声で小さく返した。

頭を下げたまま足元を見ると、白い大理石調の床の上に立つ、ダ

「クブラウンの革靴が視界に飛び込んでくる。
開いた扉と革靴、黒いスラックスに「悪い」という砕けた台詞を、
ぶつかってしまった事で混乱する頭の中で必死に整理し、高速回転
で分析する。」

このフロアは今日から出向の支社が貸し切っていると聞いている
から、目の前の人物は同じ会社に関係している人で。

少し汚れた革靴は最近流行りの先が尖ったタイプの、年配にはあ
まり好かれないデザインだから多分若い人で。

出入りの業者や営業マンなら「すみません」と言う筈だから、思
わず「悪い」と口から出たのは社内の人間だ。

つまり、相手は同じ会社の若い男性社員に違いない。
我ながら結構な名推理。

そう、答えを導き出して悦に入り、満足しながらゆっくりと顔を
上げると、見慣れた顔が場違いな場所にあつたので再び頭が混乱し
てしまった。

「ひ、柊木くん……?」

口に出してしまつてから、しまったと思つて慌てて手で口を押さ
えたが遅かつた。

「あれ……誰だっけ、えーと、えーと……」

私の言葉を受けて一瞬目を丸く見開いた柊木くんは手で顎を押さ
えながら天井を見上げ、至極真面目な顔で何やら思索し始める。

「あ、ううん、多分知らない、私が知ってるだけ!」

慌ててそれを止めると、柊木くんは蛍光灯が眩しい天井を見上げ
るのを止めて目の前に立つ私を改めて振り返る。

高校の頃も背が高いと思つていた柊木くんは、背伸びをして5セ

ンチもヒールがあるパンプスを履いた私よりも矢張り、背が断然高かった。幾分浅黒い肌はそのままに、高校の時は伸ばしっぱなしだった黒髪をワックスで無造作に散らして少しだけ、お洒落になっていた。

「え、いや、知ってるよ、顔は覚えてるんだけど名前が……ゴメン！」

右手で書類を抱えているので左手だけを顔の前に出して、柊木くんは言った。

「名前なんて最初から知らないから謝らないで下さい」

とても真面目な柊木くんの態度に、私知っている、とばかりに名前を口にしてしまったせいで余計な気を使わせてしまったんだと思ひ、逆に申し訳ない気分になってしまふ。

「いや、でも、本当に知ってるよ、確か……」

「ううん、本当にいいんです、知ってる筈無いですから！」

知らないのだから思ひ出せる筈もないのに、必死に無駄な努力をしてきている柊木くん心底申し訳ない気持ちになり、思わず声を大きくしてしまふ。

すると、余程声が大きかったのか、柊木くんが出てきた扉が再び開いて年配の男性が顔を出した。

「ミーティングに遅れるぞ」

短く言って男性が顔を引っ込め、扉を閉めた。

パタン、と扉が閉じられると共に私たちは走り出し、廊下の一番奥の部屋へと飛び込んだ。

「そっか、同じ高校の」

ミーティングが終わり、それぞれの仕事に入る前に皆でコーヒーを飲んで一息ついていた。

新製品の広報活動の為に出席した支社の入ったビルは新しく、立地は悪いが古い本社よりオフィスは綺麗だった。

「すごい偶然だよな」

一緒に向向してきた主任が、言いながらニヤニヤと下品な笑みを浮かべている。

「運命” ってヤツかもよ？」

じつと机の反対側に座る柘木くんを見つめながら、主任が私にだけ聞こえる様な声で、言う。

柘木くんはコーヒーを飲みながら、数枚のファイルに真剣な面持ちで目を通していた。

「いくらもう自分には色恋沙汰が関係ないからって、からかわないで下さい」

”運命” という言葉が突然耳に飛び込んできたせいで強張る身体を振り解くようにキツと睨んで振り返り言うと、主任は「おお、コワツ」と、ふざけた調子で返し、コーヒーを啜る。

「関係ないって……まだ分からないよ？」

「奥さんに言いつけますよ」

ぴしゃり、と言い捨てると、主任は太い眉をぎゅっと寄せて唇を尖らせる。

「野々原は^{ウツ}厳しいなあ。そんなんじゃ将来誰も貰ってくれなくて困るんじゃないかと心配してたけど、でも……」

丁度一年前の、入社当時から上司と部下という関係になった島崎主任は結婚したばかりで、奥さんの料理が美味しいから太ったんだと言い張るが他の社員の話からすると昔から少しぼっちゃりしていたらしかった。ぼっちゃりしているからかどうかは分からないが、とても気さくで面倒見がよく、上司として島崎を気に入っているが、その面倒見が良過ぎるのが少々玉に瑕だった。

「運命が動きだしたみたいだから、コレはもしかするともしかする

か？」

”運命”という言葉が繰り返される度に、胸が重くなった。その、不快なモヤモヤを跳ね除けるようにギョツと唇を結ぶと、囁くように言った主任を再び強く睨んで振り返る。

「運命じゃないから何も動きませんっ」

言っただけでバツと思わず机を叩いてしまうと、その音に驚いた柊木くんが目を見開いてこちらを振り返る。

「あ、そろそろ行こうか」

何事かと目を何度か瞬かせた後、柊木くんはそう言って立ち上がる。

「あ、はい、すみません」

何故か謝って慌てて立ち上がると、主任が少しだけイスをずらして身体を寄せ、

「再会して一緒に営業回り、やっぱり運命なんじゃないの？」
と、厭らしいしたり顔で囁いた。

「じゃあまず今日は、近くからお願ひします」

ビルから外へ出て一旦立ち止った柊木くんが言ったので、「よろしくお願ひします」と、私も丁寧に返した。

利便性は悪いが隠れ家的な、小さくてお洒落な店が多く出店しているエリアを並んで歩く。

いつも梨花と共に陰から盗み見ていた柊木くんと、話をしたいと思っただけ結局一度も叶わなかったのに。

今こうして、失恋から随分と経ってから、肩を並べて歩きながら話をする事になるとは思ってもみなかった。

「　　なんか、照れ臭いのはオレだけかな」

暫く無言で歩いていると、それまで真面目な顔をしていた柊木く

んが振り向いて白い歯を覗かせる。

小型のブリーフケースを持ったまま右手で頭を搔くと、そう言っ
てまた正面を向いてしまった。

カチツと音がして再生される、古い画像たち。

いつも盗み見ていた柊木くんは沢山の表情を持っていた筈なのに、
残っているのは今と同じ、白い歯を覗かせて無邪気に笑う子供みた
いな顔だ。

顎のラインが少しだけ遅しくなって目も昔より少しつり上がった
印象があり、高校の時よりもずっと大人っぽくなっている筈なのに、
その笑顔だけは昔と全然変わらない。

まるで写真みたいに鮮明に蘇る彼の笑顔は恋焦がれていたあの頃
と少しも変わらないのに、何故か胸は締め付けられるばかりであの
頃と同じ気持ちを再現する事は無い。

安堂くんにした事で一度消えてしまった彼の笑顔が、今と同じ、
突然再生された、あの日から。

5年前の出来事

目が合って、にっこりとほほ笑んだ。

そう、いつも。

彼はいつだって、目が合うとほほ笑んでくれた。

何を思うわけではないけれど、振り返ると彼が居て、目が合うとほほ笑んだ。

『安堂くん、沙優の事が好きなんだと思う』

一度も言葉を交わした事など無いのに。

梨花が繰り返すその暗示にかかるのは至極簡単だった けれど。

「じゃあ、まず1軒目は手慣らし程度の軽めなカンジで」

手書きの看板が置かれた小さな店の前に立ち、柊木くんは言ってみると悪戯っぽく笑った。

そのまま振り向かれて目が合うと、心臓が小さく跳ねる。

「いやでも、いつになっても営業は慣れなくて。フォロー、しっかりお願いしますね、野々原先輩」

先輩って何、同期でしょ！

そう突っ込みつつ、名前を呼ばれた事で少しだけ、舞い上がってしまう。

朝のミーティングで紹介しあったのだから当然なだけなのに何で喜んでるのよ、と心の中で自分を戒めた。

「って言うか、高校の同級生が一緒だと思うと余計に緊張するって言うか、お尻の辺りがむず痒いって言うか、なんか変なカンジだな」
言って柊木くんがああ、子どものような笑顔を作ったので予期せ

ず私の心臓が大きく跳ね上がる。

動揺を悟られまいと慌てて視線を逸らすと、そんな私の気持ちを知ってか知らずか、柊木くんは店のドアに手をかけた。

（変に思われたかな……）

思いながらちらり、と傍らを窺うと、柊木くんは緩んだ顔を引き締めて真面目な顔に戻っている。

一瞬色めき立った心臓が落ち着きを取り戻し始めると、胸の中にどんよりとした黒い淀みが残ってじわじわと広がっていく。

柊木くんと再会した事で、あの、胸の奥底に沈めた人生最悪の日が思い出された。

*

あれは卒業を控えた、まだまだ寒い日が続いた冬の日の放課後。

去年は柊木くんにチョコをあげるかどうかを梨花を巻き込んで散々迷って騒いだのに、今年は安堂くんの事が頭を過ったけれど、でも、彼の事は良く知らないからと諦めた、寂しいバレンタインが終わった後の事だった。

いつも一緒に帰っていた梨花が用事があるとかで早々に帰ってしまい、1人でのんびり図書室に寄ってから私は教室を後にした。

校内はしんと静まり返り、昼間の喧騒を忘れてまるで静かに眠っているようだった。

陽が伸びたとはいえまだまだ陽が沈むのは早く、薄らと夕暮れが校舎を包み始めている。暗くなる前に早く帰ろうと足を急がせて廊下を歩いていると突然、囁き合うような声が耳に届いた。

少し鼻にかかる様な、甘ったるい女の子の声と。
優しく諭すような、低い男の子の声と。

どの教室の扉も閉じられていて何処からその声がするのか分からなかったが、明らかに何処かの教室の中でカップルがいちゃついている声だった。

結局今年もバレンタインというイベントとは程遠かった自分と違い、幸せなバレンタインを過ごしたカップルが教室に残っているのだろう。

そう思い返せば同じクラスの中にも幾つかのカップルが出来上がっていて、幸せオーラを嫌味なほど発しているのを思い出す。

「やだね、色ボケしちゃってさ」

「私たちみたいに、全く縁が無い人に気を使って欲しいよね」

梨花とそう言い合ってお互いを慰めあったが、バレンタインの当日にその梨花が赤いリボンのついた小さな箱を持っていた事を知っていた。

「渡す相手が居ないってのも、何か寂しいね」

「いやいや、沙優は安堂くんにあげたらいいじゃん、絶対待ってるって！」

そんな筈ないよ。

そう返し、互いにチョコとは縁が無いね、と笑いあったのに。バレンタインの当日、梨花がお弁当を取り出す時にバックの底からチラリと小さな箱が覗いたのを、偶然見てしまったのだった。

けれどその時は、渡す相手が居ないと言い張る梨花に尋ねる事が出来なかった。

後で教えてくれればいいや。

結果が出れば教えてくれる筈。

そう思って待っていたが、あれから数日経った今日まで、梨花からは何も聞いていなかった。

「……だめ？」

何故か静かに、息を殺して足音を立てないように気を使っている自分に呆れつつ、見たいわけではないがちらり、と扉のガラス窓から教室内を確認しながら歩く。

もし、知っている誰かだったら明日梨花に報告しよう。

それ位の好奇心でちらちら確認しながら歩いていると、段々と声が大きくなって自分が近づいていくのが分かる。

「学校だから、ここまで」

学校だから、ここまで？

同じ台詞を幾度か頭の中で繰り返し、中で何が行われているのかを下世話な頭で想像して、見てしまったらとても不味いのではないかと勝手に焦り始める。

ここに自分が居る事を知ったら相当ばつが悪い思いをするのではないだろうか。

自分は何も悪くないのにそう思い、足音を立てないようにゆっくりと歩いていた歩みを速め、早々に立ち去ろうとした、その時だった。

「もう、安堂くんてば、ワガママなんだから」

名前を聞いて背筋がビクツと強張った。

反射的に思わず振り返った扉の窓から飛び込んできたのは、机の上に残った腰かけ、髪を長い女の子を胸に抱き込んだ安堂くんだった。

目が合つて、視線が絡み合う。

肩に凭れかかった女の子の髪を撫でる手が一瞬止まり、彼は私を見てにっこりとほほ笑んだ。

「……なに？どうかした？」

言つて、女の子が顔を上げようとしたので、私はその場から逃げるようにして走り出した。

『安堂くん、沙優の事が好きなんだと思つ』

『まさか』

口では否定してきたが、簡単にかかつてしまった暗示は意外に深く絡みついでいて、私の心をポロポロに傷つけた。

何の確証も持たず、友達の言葉だけで勘違いして勝手に舞い上がっていた自分が情けなくなつて泣きながら校舎を飛び出した。

取りあえずバスに乗るまでに涙を拭き、落ち着いたら梨花にメールをしよう。

そつ思いながら震える手で携帯を取り出す。

”安堂くん、彼女が居るみたいだよ？”

震えを止めるように強く携帯を握りしめ、そう梨花にメールしようと思いつながらバス停まで逃げるように小走りに歩いた。

消しても消しても目に焼き付いた二人の姿が何度も蘇ってきて、歩きながら幾度となく頭を振った。

そうして何度か頭を振っていると突然、何処かのスイッチに触れたのか、忘れていた筈の柘木くんの笑顔が思い出される。

教室の中から廊下を歩く柘木くんを見つけると、梨花と盗み見ではしゃいだ。

友達と歩く柘木くんは大袈裟に身体を揺すりながら、白い歯を零し、声を上げて笑っていた。

「何が面白いのかな」

「凄く楽しそうだよね」

梨花と言つて、柘木くんがどんな事で笑っているのかを、分かる筈も無いのにいつまでも彼は想像した。

(柘木くんの笑顔、忘れてたな)

ぼつり、と心の中で呟くと、安堂くんの優しい笑顔が柘木くんの眩しい笑顔に消されていく。

(柘木くんの笑顔が見たい)

突き抜ける青空のような笑顔が見たいと思い、柘木くんから目を逸らした事を後悔する。

(安堂くん、あんなトコを見られても笑ってた……)

少しクセのある柔らかそうな前髪から覗く涼し気な瞳を細め、柔らかにほほ笑む安堂くんの笑顔はいつもと同じものだったけれど。

(もしかして彼は目が合うと、誰にでもああやってほほ笑みかけるのかもしれない)

何を今更と思いつつ、安堂くんが誰彼問わず優しい人なんだという噂を思い出す。

(それを私が勝手に勘違いしたってわけか……)

そう思い、ぎゅっと締めつけられていた胸の痛みから解放されると、逆にそこに大きな穴が空いた様な気持ちになる。

(……バカだな、私)

ぼつり、と胸の中で呟くと途端に再び目頭が熱くなって涙が零れそうになったが、歯を食いしばって必死に堪える。

何かを考えたら泣いてしまいそうなので何も考えないようにしながら、バス停に滑り込んできたバスに乗り込んだ。

(今日は”人生最悪の日”になっちゃったな)

バスに揺られ、泣き腫らした目で窓を流れる景色をぼうつと眺めていた。

通りを歩く人たちの中にもカップルらしき人たちが混ざっていて、どのカップルも幸せそうだと感じる。

自分が辛いからこそそう思うのだろうか。

何処か遠くの方で、まるで他人事のようにそう思いながら眺めていると、見慣れた制服を着たカップルが向こうから歩いてくるのが見えた。

同じ高校の、誰だろう。

ぼんやりとそう思い、遠退いていた意識を引き戻して目を凝らすと、それが見知った人物である事に気がついた。

「柘木くんと……梨花？」

座席から身を乗り出して、思わず声に出して名前を呼んだ。

肩にカバンをかけて歩く柘木くんの傍らに、笑いながら並んで歩く梨花の姿があった。

「柘木くんがどうかした？」

「今、転びそうになったのを助けてくれたんだけど……確か隣のB組の人だよな？柘木くんて言うんだ」

「同じ中学だったから間違いないよ、あれは確かにB組の柘木くんだけ……」

「へえ、中学が一緒だったんだ？」

「クラスは同じじゃ無かったからしゃべったりした事は無いけど……」

「結構カツコイイね、柘木くん、か」

「そうだね、結構モテたから……でも、助けたって？」

『そう、ピンチの私を助けてくれたの。これって……』

『これって？』

『運命の出逢い、来たかも！』

”運命の出逢い”と私が勝手に命名したあの日の梨花との会話を不意に思い出す。

後ろへ転びそうになった私の背中を誰かが支えてくれた後、振り向くと立ち去る柊木くんの背中があつて。

振り返って目が合つて、ニツコリと笑つた柊木くんの背中をずっと見つめていた私の視線を追つた梨花が言つた言葉。

『ちよつと、何、どうかした？運命の出逢いって、違つよ、沙優の後ろに居たのは柊木くんじゃないよ、違つよ？』

背の高い柊木くんを見上げて楽しそうに笑う梨花の横を、バスは静かに通り過ぎる。

天辺で結んだポニーテールを小さく揺らし、小首を傾げて笑う口元にそつと手を添える梨花が真っ直ぐに柊木くんを見つめていた。

動き出した未来

「あれ、君は確か……」
同じ高校の。

安堂くんは言って、何度も見てきたあの柔らかい笑顔を浮かべた。
「そっちの彼も同じ高校だったよね？」

傍らに並んだ柊木くんを確認するように見てから、安堂くんは受け取った名刺に視線を落とす。

安堂くんの視線が離れた事で、何故かホッと胸を撫で下ろす。
懐かしい笑顔に思いがけず再び出会った私の胸はギュッと締め付けられて、そのまま時間を止めてしまっていたからだ。
気がつくとほろつと大きく肩で息をしていて、呼吸さえ止まっていたようだった。

(安堂くんは何も思わないのだろうか……)

もう5年も前の事とはいえ、女の子といちゃついている、あまり他人に見られたくない場面を見られたのは安堂くんの方なのに、そんな事があった事すら忘れてるように　いや。安堂くんは覚えていないような口ぶりで話を始めたけれど、そもそも私の事など覚えていないのかもしれない。

”どこかで見かけた事がある”。
そんな程度の認識だろう、と思いつながら名刺を見ている安堂くんの横顔を見つめていた。

栗色の髪を更に茶色に染め、緩いパーマをあてた安堂くんはどこぞの雑誌から抜け出たように隙が無く洗練されている。元々上がり気味にカーブしていた眉はすっきりと整えられ、髪と同じ色に染め

られている。吹き出物一つ無い肌は相変わらず女の子のようにきめ細かく滑らかで、唇は薄くグロスを塗った様な艶を放っている。名刺を持つ、節だった長い指には大き目のシルバーリングを幾つか嵌めていて、同じシリーズの物らしきシルバーのネックレスを大きく肌蹴た白いシャツから覗かせていた。

「柊木”くんと”野々原”さん　ああ、名前まで知らなかったよね、俺の名前も知らないでしょ？」

当然のように言って視線を戻した安堂くんは、上手く笑い返す事が出来なかった。

チクッと刺すような胸の痛みをやり過ぎ、あの時刺さった棘が今も深く心の奥底に刺さったままなんだと再確認させられる。

『安堂くん、沙優の事が好きなんだと思う』

幾度も呪文のように繰り返された、梨花の言葉が耳に鮮明に蘇る。名前も知らない様な相手を安堂くんが好きだって？
そう思いながら心の中で自嘲気味に笑うと、思わず涙が滲みそうになって奥歯を噛みしめて堪えた。

「何だか懐かしいなあ、ついこの前まで高校生だった気がするのに、
無邪気にそう口にして笑顔を向ける安堂くんに導かれるように、
時間が高速で逆戻りしていくような感覚を覚える。

「ふうん、皆がんばってるんだな。オレも頑張らないと」

封筒に入れられたキャンペーンのチラシをカウンターの上に無造作に置き、その上に2枚の名刺を重ねるように置いて安堂くんは言う。慣れた様子でタバコを唇に乗せ、火を点ける。

(安堂くん、タバコ、吸うんだ)

肺に吸い込んだ空気を長く、白くふうつと薄い唇から吐き出す安堂くんはあの頃とは違うのに、何故か懐かしい思いがこみ上げて来て胸がぎゅっと締め付けられた。

*

「ほら、安堂くんが沙優の事、見てるよ？」

E組の前を通りながら、いつものように言う梨花の言葉を無視した。

普段なら途端に顔を俯かせてちらりと横目で確認した安堂くんを、振り返る事は無い。

目だけで振り返っても安堂くんは気付いてほほ笑んでくれたが、それは私にだけ向けられた行為では無いと知ったからだ。

「なに、どうしたの？安堂くんの事はもういいの？」

不審に思って尋ねる梨花に、あの日偶然目撃してしまった、女の子といちゃついていた安堂くんの話をしていなかった。

「なに、何なの、何かあったの？」

話していないのは安堂くんの事だけじゃない、バスの中から見つけた柗木ちゃんと梨花の事も、だ。

それを口にしたらきつと友達ではなくなってしまう。

何故かそう強く信じていて、梨花と友達で居たかった私はその事には触れないようにしていた。

けれど、問い質したい衝動を無理に胸の中に押し込んだせいで普段通りの態度を示す事が出来ず、生返事ばかりで笑顔を作る事も出来ない私に、ついに梨花の方が痺れを切らしたのだった。

「なんか最近、沙優、変じゃない？」

お弁当を広げても少しも食べる気にはなれず、箸を持ったままウンナーやプチトマトをつまんで下す、を繰り返す。

購買で買ってきたコーヒー牛乳のストローを唇に押し当てたまま黙ってお弁当を見つめていると、不意に身を乗り出した梨花に詰め寄られた。

「ねえ、本当にどうしたの？親友でしょ、何でも話してきたじゃない」

何でも話してきたじゃない。

梨花の言葉が耳朶に引っ掛かって何度もリピートされる。

何でも？

幾度か繰り返されたのち、最後にその部分だけが残ると、箸を持つ手がピクツと跳ねてお弁当の上に箸を落とした。

「梨花は柊木くんが好きなの？」

身体は強張り、喉は締め付けられて上手く口が動かなかった。

あと少し我慢すれば。

あと少しで卒業なのだから言わないようにしよう。
最後まで梨花と友達で居るために。

この学校へ来て初めて出来た友達の梨花をいい思い出のまま、胸の中に置いておきたかったから。

けれど、折角の思いもそれを口にしてしまったからには全部ぶち壊した。

「な、何を言い出すのかと思えば……」

顔を上げて正面から梨花の顔を見る事が出来なかった。

顔を俯かせたまま、梨花の手元をじっと見つめてみると、手にした箸をぎゅっと握りしめて梨花は小さな声で返した。

「見たの、私。柊木さんと並んで歩く梨花の事」

震える声で告げると、箸を握りしめた梨花の手が見る間に白く血の気を失っていくのが分かる。

「そ、そんなの、偶然会ったからちよつと話をしただけで別に……」
「別に、何？何でも無いのなら何で次の日に言ってくれないの？何でも話してきたんでしょ、違う？それに、柊木さんと梨花っていつからそんな仲だったの？私の見てる前で話してるの、見た事ないよ？」

言いながら興奮してしまい、顔を上げて梨花を見据えると、目が合って、梨花は驚いたように目を大きく見開いた。

「な、何だよ、それなら沙優だって『昨日、見たよ』って言うてく

れたら良かったじゃない」

怒っているようで、それでいて泣き出しそう。

ぎゅっと眉根を強く寄せる事でそれを堪えているような梨花が、口元だけ必死に笑みを浮かべようとして変な顔になる。

「……梨花のあんな顔見たら、言えないよ」

肩を寄せ、柊木くんを盗み見ながら囁き合った。

好きなのは私だけの筈なのにいつも、梨花はとても楽しそうに話しに付き合ってくれた。

とても楽しそうに。

自分が想う相手の話ではないのに、どうしてそんなに一緒に盛り上がってくれるのか。

ただ単にそれは、梨花がとても優しい女の子で、親友の私を大切に思ってくれているからだと思っていたけれど

「梨花も柊木くんが好きだったんでしょ？」

だからと言って、梨花が優しく友達思いだという部分が嘘だと思っているわけではないけれど。

梨花も柊木くんが好きだったから、彼の話しをととても楽しそうに付き合ってくれたのだ。

握りしめた箸を置き、梨花はじっと見つめる私の視線から逃れるように顔を俯かせた。

昼休みの教室の中は騒がしかったけれど、喧騒は私たちの耳には届かない。

まるでそこだけ切り抜かれたような静かな空間の中、息を殺して私はじっと梨花の言葉を待った。

柀木くんは沢山のチョコを貰っていたけど、ありがとうって言って受け取ってくれた」

あの、バスの中から二人を偶然見てしまった時から何となく予想していた範囲の話ではあった。

けれど、本人の口から直接聞くのがこれ程辛いとは思ってもいなかった。

「それから少しずつ、廊下ですれ違ったりすると声をかけるようになって……多分、沙優が見た日は偶然を装って声をかけて、一緒に帰った時だと思う」

強い怒りを秘めた梨花の目はけれど、今にも泣き出しそうに震えていた。

「それが全部。何か文句ある？私、何か悪い事した？」

開き直った様に言い切った梨花が、今度は私の言葉を待つて唇をぎゅっと引き結ぶ。

桃色の唇が小さく震えて、嗚咽が漏れるのを必死に堪えているように見えた。

「……安堂くんの事は？」

もう、ここまで来てしまったら私たちの仲を修復するのはムリだと思った。

ならば、最後まできっちり方を付けたい。

柀木くんの話が大方予想通りだったので、多分安堂くんの話も私が想像する範囲の事だろう。

そう思っても、確かめずには居られなかった。

「柀木くんから気を逸らす為に安堂くんの話までつち上げたの？」

心臓は早鐘のように強く打ち付けて身体の中で響き、茹であがった様に熱を帯びた頭はクラクラと回る。

何か悪い夢でも見ているような気がしたけれど、これは現実で取り返しがつかない事をしているのだと、頭の隅の方で冷静に考えている。

「上手い事引つ掛かってくれたよね、流石、タラシのテクは侮れないと思っただわ」

クラスが離れてるし、知らなかったんだよね、沙優は。有名なタラシなんだよ、安堂くん。

口尻を片方だけ引き上げて、今にも泣き出しそうな表情を残しながらも梨花は意地の悪い笑顔を作った。

「あの笑顔には私も思わず好きになっちゃいそうだったもん。ああやって誰にでもほほ笑みかけるんだよ、安堂くん」

根っからのタラシだね、アレは。

吐き捨てるように梨花は言って、込み上げる怒りを吐き出すかのように突然、机を掌でバンツと叩いた。

「……ね、これでもうお終い」

音に驚いて目を見張った私から顔を逸らすように梨花は再び俯き、机に言葉を落としてそれきり顔を上げる事は無かった。

私は黙ってお弁当を仕舞いながら、何度か梨花の顔を振り返ったが梨花はじつと動かずに全く顔を上げる事は無かった。

「ごめん」

怒りと悲しみの両方が身体の中でグルグルと渦を巻いていた。

梨花を許す事は出来ない。

怒りの原因はソレで、悲しみの原因もソレだった。

多分、梨花も同じ気持ちだ、と。

その気持ちが手に取るように分かるからこそ、もう、二度と仲良しに戻れる事は無いと思った。

身体の中の温度は高いまま、少しも冷める気配は感じられなかったけれど、茹だる様にクラクラした頭だけが、まるで風穴でも空いたみたいに冷やされて、気がつくると梨花にそう、言葉をかけていた。

*

「 店長、これでいいですか」

アンティークな間接照明が照らす薄暗い店内の奥から声がして、安堂くんが振り向いた。

今、行く。

そう短く返事をした安堂くんは、再びこちらを振り返ると、

「今、新しいメニューを試作しててちょっと忙しいんだ。今度は夜にでも来てよ、営業時間内に経費でご飯でも食べに来て」

と、完璧な営業スマイルを浮かべてあっさりと店の奥に引っ込んでしまう。

「噂でちょっと聞いたことがあったんだけど、本当だったんだな」

その背中を見送りながら、隣で柀木くんが呟くように言う。

「E組の安堂の実家はこの界限で複数のレストランを持つてゐるって噂、聞いたこと無い？小さくてもあんな若くてもう店を持つてゐるトコを見ると本当だったんだなあ」

つまりは行く行くは安堂が全部の店を継ぐのかな。こりゃ仲良くしとかねーとな。

柀木くんが言うのを、黙って聞いていた。

安堂くんが私を好きだと梨花に言われて勝手に舞い上がっていたけれど、安堂くんの実家が複数のレストランを經營していて 彼が相当の”タラシ”だったなんて全然知らなかった。

あの頃は自分なりに真剣に恋していたと思つていたけれど そもそも。

真剣に誰かに恋するってどういふ事なのだろう。

もしかしたら結局、相手の事どころか恋と言つもの自体、知らなかったのかもしれない。

それは5年経つた今でも、分ならず仕舞いだった。

柊木くんとワイン

『“運命”ってヤツかもよ?』

下がり気味の眦を更に下げて主任が言った言葉が、頭の中に蘇って幾度もリピートされる。

そんな筈はない。

ある筈が無い。

その度に否定し、少し酸味の効いた、フレッシュなワインを喉に流し込むことで一緒にその言葉を飲み込んでしまおうとした。

「結構、ペース、速いんだね」

ごくり、と喉を鳴らしてワインを飲み下し、ふーっと息を吐き出すと、笑いながら柊木くんが空いたグラスにワインを注いでくれる。

「このワインは甘みが少ないから飲みやすいんだけど……」

言いながら柊木くんは私が酔っていないか確認するように顔を覗きこみ、

「自分の限度、知らないって事はないよね?」

と、心配するように尋ねてじっと見つめてくる。

「……2杯目だけ……もう、酔ってきた?大丈夫か?」

照明を控えめに押さえた店内の、小さなカフェテーブルを挟んだだけの距離は向かい合っているとはいえ意外に近く、間近で顔を見つめられて思わず心臓が暴れ出す。

その動揺が目に見えたのか、柊木くんは言うど、折角注いでくれたグラスをすっと自分の方へ引き寄せた。

*

『景気のせいにしたくは無いかどやっぱ難しいよなあ……クソッ。もう、こうなったら自棄酒、行くしかないよな!』

一緒に営業回りをして半月ほどが過ぎていた。

他の人たちも同様に成績は上がらないのだから仕方が無いとは思ったけれど、発破をかけ続ける上司と反応が冷たい営業先との間に挟まれて、根が真面目な柘木くんは徐々にストレスを溜め込んでいたらしかった。

『まさかこの会社に入ったのに飲めないとか言わないよな?』

そう言われて会社帰りにそのまま、顧客の一つである近所の小さなビストロに二人で入った。

主任ともこうして、仕事の役に立つし、と言われて何度か顧客の店に会社帰りに入った事はあったが、相手が柘木くんとなると気持ち全然違ってしまふ。

一緒に仕事をするようになって半月が経ったとはいえ、時折見せるあの、子供の様に無邪気な笑顔を平然と流す事は出来なかった。

*

「うーん……」

小さく唸って柘木くんは、まだ半分ほど中身が残るワインのボトルを眺めている。

「ワインは開けたら一気に呑んじゃうのが一番なんだけど、オレ、こう見えてワインをぐいぐい飲むタイプじゃないから、オレがこれを空けるまで野々原さんを待たせたら遅くなっちゃうし……そうか

と言つて一人で先に帰つてつて言うのもアレだよな……」

柀木くんは低い声でブツブツと独り言を呟き、自分のグラスのワインを口に含む。

「あ、まだまだ飲めますよ、酔つてないですから」

困つた様子でボトルを眺めている柀木くんに言つて自分のグラスに手を伸ばすと、グラスを避け様とした柀木くんの手とぶつかつてしまつ。

「え、いや、無理して呑まないでいいつて。大丈夫、オレ、頑張つてちゃつちゃと呑んで空けちゃうから」

ピリツと跳ねた指先を引っ込めると、自分のグラスと私のグラスの二つをそれぞれ両手に持つて、柀木くんが笑つ。

そうしてぐいっぐいっつと二つのグラスを交互に呷ると、反らした喉を上下させてワインを一気に飲み干した。

「……だ、大丈夫？」

「……うん、やっぱりワインはゆっくりと味わいながら飲むのが好きだな」

一瞬ぎゅつと目を閉じて、再び瞼を開いた柀木くんは言つて苦笑いを浮かべる。

そうして再び、空いたグラスにワインを注ごうとする柀木くんを手で制すると、ボトルと自分のグラスを奪つてワインを注いだ。

「まだ時間も早いから、のんびり飲みましょう。酔つてるから私もゆっくり飲みます」

まるで血の色の様なワインをグラスに注ぎ、柀木くんのグラスにも同様にボトルを傾ける。

「明日も仕事だし、無理すんなよ？」

「それはお互いさまです」

言つて返すと、互いのグラスを傾けて、来た時と同じ、乾杯をした。

柊木さんと偶然再会した、この小さなワインの輸入商社に入ったのは就職難の時代、どこでも入れる会社があるのなら……という粗末な理由でしかなかったけれど、話をしているうちに、柊木くんは女の私とは全く違った高い志を持って入社していたことがわかった。

大学の頃に偶然ワインを取り扱うイタリアンの店でバイトをした事が切欠でワインに興味を持つようになり、飲めば飲むだけ、どのワインにもそれぞれ違った個性がある事を知って食費を削ってまでもワインを飲みあさり、ついには就職活動の忙しいさ中なけなしの貯金を叩いてヨーロッパまで行ってワインを飲み歩いた柊木くんは帰国後、勉強してソムリエの資格を取り、ワインの知識をもっと増やしたいとワインの輸入商社へ就職したとの事だった。

「オレはね、じつくりと寝かせて甘みと渋みが重たく絡まり合って本来なら落ち着いた味の中に酸味っていうちょっと強めのパンチが少しだけ残った、往年のちよいワル親父、アル・パチーノみたいなワインが好きなんだよね」

少し酔ってきたのだろうか。
そう楽しそうに話す柊木さんに、理解が追いつかず思わず目が丸くなる。

「飲んでみたらきつと分かるよ、次はそういうのを飲ませてあげる」
何でも無い事のようにさらりと言って柊木くんは笑い、グラスを傾ける。

つられる様にしてワインを口に含むと、平然を装って笑い返した。

「ワインが好きでソムリエの資格まで取るなんて、凄いな、柊木くん」

チビチビと舐めているせいで温まってきたワインは少しも美味し
くなかった。

飲みにくくなってしまったワインを手持無沙汰に弄りながら、柀
木くんに尋ねる。

「な、自分でもビックリ。二十歳になって初めて出会ったものに此
処まで夢中になるなんて想像つかなかった」

黒目がちな目を細め、ニツと悪戯っぽい笑顔を浮かべて柀木くん
がワインを飲む。

「きつとこれからももっと色々な物を知って、夢中になれるものが
出てくるんだろうな」

最後の方はまるで独り言のように言って、柀木くんは手にしたグ
ラスに残ったワインを柔らかく照らす照明に翳す。

ワックスで散らした黒髪をさらりと揺らして首を小さく傾げ、瞼
を幾分伏せてうつとりとした面持ちでグラスを愛おしそうに眺め
ると、ほう、と肩で息をついた。

思わず目が釘付けになっていた。

瞬きするのも忘れて柀木くんを見てみると、突然、我に返った柀
木くんが振り向いて視線がぶつかる。

驚いて大きく跳ね上がった心臓を誤魔化す様に、弄んでいたグラ
スをぐつと握って口元へ運ぶ。

その勢いのままグラスを唇に押し当てると、まだ半分以上残って
いる生温かいワインを口に含んだ。

「うは、まず……」

じっと目を見開いてこちらを見ている柀木くんの視線から逃れた
くて、どうしたものかと動揺して飲み込んだワインの温さに思わず
本音が口から零れてしまう。

「あ、いや、違うの、これはあの、そういう意味じゃ無くて……！」

そのワインは自社で輸入したもので、ワインがあまり得意でない
私の為に柀木くんを選んでくれたものだと思いついて慌てて言い訳

をする。

柊木くんはそんな、慌てふためく滑稽な私をじつと観察するように眺めた後、「すみませーん」と言っつて店の人を呼んだ。

(まさか、今の私の失言で怒っつてお会計っつて事!?)

そう思い、

「ごめん、柊木くん、別に文句を言っつたりしたわけじゃ……!」

と、必死に謝る私を他所に、柊木くんは奥から出てきた店員を振り返ると、

「氷、貰っつてもいいですか」

と、尋ねた。

「……え、氷?」

氷っつて何の話?

再び店員が奥に引っつ込むのを見やっつて振り向いた柊木くんは、訳が分からないとばかりに私は目を瞬かせて尋ねた。

柊木くんは少し大き目の唇を引き上げてほほ笑んでいる。

怒っつてるわけでは無いらしい、と思ひ、けれど、なら氷は何の意味があるのだろうと考へていると、店員が氷の入ったサーバーを持っつてきて柊木くんに手渡した。

「邪道なんだろうけど」

そう言っつて柊木くんが、氷を私のグラスにぽとんと落とす。

「ホットワインなんてのもあるけど中途半端な温度のワインほど不味いものは無いから、ね」

氷を二つ、私のグラスに落として柊木くんは笑った。

「……あ、ありがとう」

柊木くんの笑顔を呆気にとられてただ、黙っつて見つめ返した。

「オレもさ、沢山飲んだけどペースがのんびりだから同じ思ひを結構したんだよね。そう言っつう時に、この作戦を思ひついたので」

言っつて、柊木くんは白い歯を見せてニカッつと笑った。

「氷が沢山溶ける前に飲んでね」

と、柊木くんに促され、グラスを傾ける。

「あ、冷たくて美味しくなってる」

言って返すと、柊木くんは得意そうに「でしょ？」と言って笑った。

「 沢山飲んだって、どれ位飲んだの？」

ボトルの最後を柊木くんのグラスに注ぎながら尋ねる。

「もう、山ほど！数え切れない位」

「それ位飲まないとソムリエには成れないのか」

「どうだろうね。オレの場合は好きだから飲んでるってのも多かったです」

終電の時間が迫り、話しながら私は氷で冷やしたワインの最後を飲み干す。

時計を確認したのが分かったのか、柊木くんも最後のワインを一気に飲むと「よし、終了！」と、言ってグラスをテーブルの上に置く。

「なんか、きつと私の想像以上に飲んでそう」

「多分そうだと思うよ、凄い数だから」

「でも、覚えてないんでしょ？数えようがないね」

言って笑いかけると、それまで一緒に笑っていた柊木くんが何かを考える様な表情を見せる。

「 ウチに来れば分かるよ？」

ちらつと暗い天井を見上げるように視線を上げ、一呼吸置いた後に振り向いて言った。

「流石に瓶はムリだけど、飲んだワインのコルク栓は全部取ってるんだ」

ドキツと大きく胸が跳ねて、それ程酔っていない筈なのに顔が燃えるように熱くなつていくのが分かった。

(どういふ意味なのだろう)

そう必死に考えても全く答えが出てくる気配は無く、ただ、目を見開いて柊木くんを見つめ返す事しか出来ない。

そういうのは相手に特定の人が居るとか確認して、家に招いてもいい相手なのか気持ちを確かめて、もし、万が一そういう事になつてもいい覚悟があるのかとかを決めてからでないといけないのでは、等と、柊木くんがどんなつもりで言ったのかも分からないまま、勝手な妄想に近い考えだけがどんどん突つ走つていく先に 梨花が居た。

梨花とは結局、あれ以来何も話す事は無く、卒業を機に別れたきりだった。

チョコを渡して話をするようになった柊木くと梨花が、その後どうなつたのかを私は知らないし、こうして偶然再会した柊木くんを確認できる勇気もない。

(どういふ意味なの?)

けれど、そんな私の気持など全く知らない様子で柊木くんは相変わらずの屈託のない笑顔を浮かべ、テーブルの端に置かれた伝票を手に取りと腰を上げる。

「狭い部屋に山積みになつてんの。一度ちゃんと数えてから捨てようと思つてるんだけど数が数だけに面倒臭くて……」

一緒に営業に回りながら、柊木くんが私と同じ、実家を離れて一

人暮らしをしている事を聞いていた。

もう、社会人になった大人の男が一人暮らしの部屋に女の子を誘うのには、それなりの意味があるのではないか。

そう一瞬暴走したけれど、無邪気な柊木くんの笑顔を見てみると全然そんなつもりは無い様にも思えて、自分が恥ずかしい勘違いをしているような気持ちになってくる。

店の入り口まで話しながら歩く。

顔は相変わらず熱いままだったけれど、酔ったせいだと自分に言い聞かせた。

「なら、折角だから協力しようか？」

狭い店内の前を歩く柊木くんの背中に返した。

きっと彼は深い意味を持って言ってるわけじゃない。

だから私も気軽に返せばいいんだと、そう思って返事をした。

「お、協力してもらえたら随分片付くな、スゲー助かる」

矢張り、柊木くんは何とも思っていないらしい。

振り返った柊木くんは言って、いつものあの、無邪気な笑顔を浮かべた。

古傷と臆病風

「コーヒーをどうぞ」

「あ、おはようございます、ありがとうございます」

出社してデスクに座り一息ついていると、アルバイトの女の子がコーヒーを持ってきてくれる。

「コーヒー、どうぞ」

事務仕事のアルバイトをしている女の子は机を回りながらコーヒーを配り、声をかける度にニッコリとほほ笑む。

「お、サンキュー麻穂ちゃん」

斜め前から声がして、柊木くんがアルバイトの麻穂ちゃんに笑い返した。

「柊木さん、後ろの寝癖、スゴイですよ」

「え、マジで!？」

麻穂ちゃんが笑いながら言うと、受け取ったコーヒーカップを手にしたまま、柊木くんが首を左右に振る。

「まあ後ろだから見えないですよ」

必死に後ろを振り返って確認しようとする柊木くんは、麻穂ちゃんに細い肩を小さく揺らしてクスクスと笑った。

一つ年下の麻穂ちゃんはアルバイトとして半年ほど前に入社した、この支社のアイドル的存在で皆に可愛がられていた。

ブラウンに染めた髪に大き目のウェーブをつけた髪を左肩で緩く一つに束ね、長めの前髪がふわりと円らかな瞳の上にかかっている。長くて濃い付け睫毛は下がり気味の丸い瞳を更に愛らしく演出し、ピンクのリップグロスが塗られた唇の口角はいつもほほ笑んでいるかのようにキュッと上がっていた。

髪質が固いせいでパーマがかかり難く髪型と言えばストレートロングの一点張り、雑誌を見ながら色んな化粧法を試したけれどどれも結局、オカマにしか見えない様な仕上がり具合の”濃い顔”なので化粧映えもせず、控えめで最小限の化粧しか出来ない私とは真逆の存在のような女の子だ。

「ちょっとトイレで見てくるか」

柊木くんが少しだけ困った様子でコーヒーを机の上に置いて言うと、その隣に手にしたお盆を置いて麻穂ちゃんが柊木くんの髪に手を伸ばす。

「ここが少し跳ねてます」

場所を教えるようにツンツンと引つ張ると、柊木くんは目だけで麻穂ちゃんを振り返り、「サンキュ」と短く言っただけで席を立った。

支社に出向になって1カ月が過ぎようとしていた。

柊木くんと飲みに行ったのは結局あの1回きりでそれ以上の進展は何も無かったけれど、今現在、交際している女性は居ない、という情報を会話の中で掴んでいた。

一緒に居る時間が長ければ長いだけ、彼の真面目で裏表のない真っ直ぐな性格に惹かれていったけれど。高校の時についた傷は”臆病風”という名前で深く私の中に刻まれていた。

「柊木さんて何か子供みたいでカワイイですよね」

麻穂ちゃんは言っただけ、まるで私の視線をずっと前から知っていたかのように真っ直ぐに振り返る。

「……高校の頃からなんですか？」

探りを入れるような麻穂ちゃんの視線に、思わず目を逸らしそう

になる。

動揺を悟られるのが怖くて、精一杯平静を装って笑顔を作った。
「同級生って言っても学年が一緒ってだけでクラスは違うし、接点が無かったから」

そう返事をする、麻穂ちゃんは納得がいったのか「そうですかと、言っただけでニツコリと笑い、給湯室に戻って行く。

若くて可愛いのに意外とやり手なのかもしれない。
黙っていてもモテるだろうに。

麻穂ちゃんの小さな背中を見送りながらそう思い、自分は相当心が卑しい人間に違いない、と思う。

好きな相手に素直に好意を示し、相手に振り向いて貰おうと頑張る姿は誰でも健気で可愛いはずだ。

自分だって高校の頃までは同じだったくせに　今では全く逆の側に立っている気がする。

大学時代の合コンにしても、サークルの仲間にしても、友達の誰かが同じ人を気に入っているかもしれないと少しでも感じたら、それきり気になる誰かを追う事を止めるようになっていた。

梨花と同じように　また、友達や仲間を失くすのが怖かった。

*

「急なんだけど本社から呼び出しかかって約束していた店に行けないから、代わりに行って納品、お願い出来るかな」

コーヒーを飲み終わり、給湯室でカップを水に浸していると島崎

主任から電話が入った。

朝一で本社に寄って来ると聞いていたが、思いの外大きなトラブルで今週いっぱい支社には出社出来ない、と主任は告げた。

「すぐ近くの店だから分かると思うんだけど……先週入荷したワインのサンプルを2、3本、朝のうちに届ける約束をしてたもんだから」

横文字の店の名前をメモし、復唱すると、

「ただ渡すだけでいいんだけど、朝一で行くって約束してたから出来るだけ早くでヨロシク」

と、言って主任は電話を切った。

「じゃあ、営業に出たら最初に寄るか」

斜め前の席で電話の内容を聞いていたらしき柗木くんが言ってくれたが、

「すみません。でも、何か急いでるみたいなので、今行ってきたもいいですか？」

と、席を立ちながら返す。

壁にかけられた時計を確認し、約束の朝一って何時だったのだろう、と思いつつ部屋を出た。

「朝一って言ったよね？」

閉店、の看板を横目に指示された店に入るなり、年配の店主は顔を顰めて睨みつけた。

「深夜営業終わって店の片づけしてるから、朝一の時間なら居るって言ったけどさ。今、何時？眠くて早く帰りたいのに我慢して待ってたんだよ？」

すみません。

鋭い視線を受けながら頭を下げ取りあえず、抱えたワインをカウターの上に置く。

「片づけなんて2時間も前に終わってたんだよ。あんたらはまだ早い

時間だと思ってるかもしれないけど、俺たちはあんたらが寝てる間も夜通し働いてんだよ？」

言いながら不機嫌そうな顔をした店主がカウンターの奥から回り込んでホールに出てくる。

「要らないよ、持って帰って」

白髪混じりの髪をぷいっと振り、カウンターの上のワインを一瞥して顎で指図する。

「申し訳ございませんでした」

深々と頭を下げ、謝罪する。

しかし、店主の怒りが治まる気配は無く、視線を合わせようとせず、チツとわざとらしく大きな音を立てて舌打ちをした。

主任ー！ーっ！！

頭を下げながら心の中で主任を呪ったが、だからどうなるというわけでもない。

どうしよう。

主任の失態に巻き込まれたただだが、このままワインを持ち帰るわけにもいかなかった。

「島崎さんが是非とも使ってほしい、一度飲んでみて下さいって何度も言うから持ってきていいよって言ったけど、でももういいよ、何か熱意に絆された俺の方がバカみたいだもん、折角待っててやったのに」

言いながら店主は広いホールを照らす灯りを一つ、二つ、と消していく。

「もう帰るからそれ持って帰って。島崎さんにももう来ないでいい

って言つといて」

じゃらり、と音がして、店主がストラップが沢山ついた鍵を手にする。

「申し訳ございません！」

少しだけ声を大きくして、大袈裟に頭を下げる。

「持って帰るわけにはいきません。飲んで頂きたくて持って来たんです、是非、一口だけでもいいんで飲んで頂けないでしょうか」

頭を下げたまま、お願いする。

店主がどんな顔をしているのか分からないが、帰り支度の手を止めてじつと立ち止まっているのが分かった。

「だからもういいって……」

しわがれた声がして、店主が困っているのが分かる。

困っているのが分かったけれど、私もワインを引き取って帰るわけにはいかなかった。

互いに一步も引かないまま、頭を下げ続ける私と困り果てた店主の間に気まずい空気が流れる。

どう収まりを付けよう。

頭を下げたまま考え、けれど何一つ得策が思い浮かばないまま、店主が諦めて「じゃあもういいよ」と、ワインを受け取ってくれる事を必死に願った　が。

「あんたもシツコイねえ」

店主は全く折れる気配を見せず、このまま長期戦に突入だろうか……と、下げた頭を戻した、その時だった。

「この度は大変申し訳ございませんでした」

カラン、と乾いた鈴の音が響いて扉が開き、声と共に柊木くんが

店に入ってきて来る。

「島崎が急な会議で朝一で本社に呼ばれていたもので……しかし、お客様には関係のない話で大変ご迷惑をおかけいたしました、申し訳ございませんでした」

私の隣にすつと並ぶと、柘木くんが深々と頭を下げた。

「……どうしてもお怒りが静まらないようでしたら捨てて頂いても構いません。急な会議で約束を破った島崎を出入り禁止にするならそれでもいいです　でも」

きちつと折った腰を戻し、柘木くんは背筋を伸ばすと店主を真っ直ぐに見据える。

「でしたら今日から私が担当で回らせて頂きます、私が島崎に負けない位の熱意を持って口説かせて頂きます。それでもし……」

突然現れた柘木くんは店主は一瞬、驚いた様な表情を見せたが、直ぐに唇をへの字に戻すと不満そうな顔を作る。

「何力月かかってもいいです、もし、私を気に入って頂けましたら、そのワインを飲んで頂けないでしょうか」

「　ふん」

柘木くんの言葉に、店主が鼻で返して不満を表す。

けれど、あれ程私に文句を言った口はそれ以上続かず、まるで柘木くんを値踏みするかのように黙って見つめ返している。

「それまでお店に置いておいて頂けないでしょうか」

言いながら柘木くんはスーツの内ポケットから名刺を取り出し、

無言のまま突っ立っている店主にす、と差し出す。

「柘木と申します」

頭を軽く下げながら差し出された名刺を一瞥し、店主は受け取らずにカウンターのの上に置くとばかりに顎で指図する。

「私はすぐその支社に居るのでマメに通わせて頂きますし、呼ばれたら直ぐに伺います」

ワインの横にそつと名刺を置き、柘木くんが言うてにこつと笑い

かけた。

「……まあ、島崎にはもう来ないでいいって言っとけ」

吐き捨てるように言っただけで踵を返すと、店主が店の奥へと歩いていく。

「もう本当に閉めるから帰ってくれないかな」

奥からその声があると、店内の全ての灯りが消されて真っ暗になった。

「……ありがとう」

店を出て支社に戻りながら、傍らに並んで歩く柊木くんと言った。

「頑張ってたね、野々原さん」

柊木くんは返して、ニツコリと笑った。

「でも、どうしてあの店に？」

不思議に思っただけで尋ねると、柊木くんは笑顔を保ったまま口を開く。「野々原さんが出ていった後、また直ぐに島崎主任から電話があったんだ。野々原さんが今届けに行きましたよって教えてたら、『怒鳴られてないといいけど』って、小さい声で言っただけ。だから、これは何かあるなと思って聞いたら案の定ってわけ」

「もう、ちゃんと教えてくれてたらもつと違う対応が出来たのに！」エレベーターのボタンを力任せに強く押し、湧き上がる怒りを堪える。

「とぼつちりで散々怒られたんだから」

「そんなに？」

「もう、散々。ひたすら頭を下げるので精一杯で」

ポン、と軽い電子音がしてエレベーターの扉が開く。

さり気なくドアを手で押さえて先に私を乗せてくれると、柊木く

んは”6”のボタンを押して扉を閉めた。

「……でも、やっぱり女はダメなんだなあって思い知らされたな」
動きだすエレベーターの中でぼつり、と呟く。

「いくら私が頭を下げててもワインを持って帰れの一点張りだったのに。柊木くんが来た途端、あんまり文句を言わなくなって。ワインだつて受け取ってくれたし」

「違うよ、野々原さんが先にお店の人の憤りを受けてくれてたからだよ。ある程度怒りを吐きだしたから、後から来たオレの話の聞いてくれたんだと思うよ」

軽い電子音がして、6階に着いた事を教えた。

「……そうかな」

柊木くんは愚痴を零せば零すだけ本当に自信が無くなって気分が落ち込んでくる。

エレベーターを下りて廊下を歩きながら俯いていると、

「そんなに気にすんなって！」
と言って、柊木くんが私の肩を叩いた。

ぼんぼん、と軽く2回。

節だつた指を持つ大きな手が私の肩を叩き、そのままそこに留まる。

ビクツと跳ね上がった肩に置かれた大きな手を思わず凝視していると、私の肩を軽く掴んだまま柊木くんがふ、と足を止める。

「大丈夫だつたんですか？」

廊下の向こうに麻穂ちゃんが居て、心配そうにこちらを見ていた。
「うん、取りあえず、だけど」

言つて柊木くんがもう一度、私の肩を叩く。

「な？」

「……はい」

柊木くんに戻しながら、麻穂ちゃんの視線が怖くて思わず顔を俯かせる。

「何、まだ落ち込んでる？」

その、俯かせた顔を覗きこむように、柊木くんが私の肩に手をおいたまま腰を屈めた。

(!!)

ちらり、と柊木くんの様子を窺う様に視線を送ると、忽ち間近で視線がぶつかる。

ドキッと跳ね上がる心臓の鼓動を悟られないように押さえつつ、正面に立つ麻穂ちゃんの気配を必死で探った。

「だ、大丈夫、もう気にしてないから！」

慌てて返すと、声の上擦って妙に甲高くなってしまう。

(きつと変に思われた)

そう、心の中で焦ったが、

「あれ、何か楽しそうですね」

と、麻穂ちゃんは言っていて愛らしい声をたてて笑った。

安堂くんのワイン

「いやあ、悪かったねえ」

言葉とは裏腹に、どこか間延びした口調で主任は言つと手にしたボトルを傾ける。

「本当に悪いと思つてます？」

手にしたグラスにワインが注がれるのを確認しながら返すと、

「思つてるよお」

と、主任は笑顔を浮かべながら返事をした。

「じゃ、今日はオレの奢りだから遠慮せずに飲んで」

言つて自分のグラスにワインを注ごうとした主任の手からボトルを取り上げる。

「いくらお詫びだからつて手酌しないでもいいですよ」

隣に並んだ主任のグラスにワインを注ぐと、正面に座った柘木くんが「そうですよ」と言つて笑つた。

多少の残業をした後帰り支度をしていると、慌てた様子の主任が事務所に飛び込んできた。

どうしたのかと驚きながら「お疲れ様です」と言いかけた私に、

主任は開口一番に謝罪の言葉を述べると頭を下げた。

「別にもういいですよ」

柘木くんに愚痴を聞いてもらった事で幾分気が済んでいた私はそう返したが、主任はお詫びにこの後飲みに行こうと誘つてくれたのだつた。

「柘木も頑張つてくれたんだから奢るよ」

そう言つて3人で連れ立つて会社を出ようとした時、綺麗に化粧を直した麻穂ちゃんがロッカールームから顔を出した。

「3人で何処かへ行かれるんですか？」

言って麻穂ちゃんが小さく首を傾げながら浮かべた愛らしい笑顔は、私に向けられる事は無かった。

「そっか、麻穂ちゃんも誘えば2対2で丁度だったな」

不意に思い出したように主任は言いながら厭らしい笑みを浮かべ、小さくカットされたチーズを2、3個一気に口の中に放り込んだ。

「何が丁度なんですか」

突然の事に思わず口に含んだワインを吹き出しそうになるのを慌てて飲み込んで返事をする、帰り際に見た麻穂ちゃん笑顔が思い出されて少々暗い気持ちになる。

(どう思われただろう)

私の視線を無視して真っ直ぐ柊木くんだけに向けられたほほ笑み。「オレと麻穂ちゃん、野々原と柊木、で丁度だろ？」

からかうように主任は続けて笑ったけれど、一緒に笑う気分にはなれなかった。

彼女の気持ちを聞いたわけではないけれど、柊木くんを好きな事はきつと確かだと思った。だから。

「麻穂ちゃんが可哀そうです、そこは柊木くんですよ」

努めて落ち着いた声で指摘すると、今度は柊木くんが「え？」と、反応する。

「オレと麻穂ちゃん？じゃあ、野々原さんは島崎主任？」

呟くように柊木くんは言つと、並んで座る主任と私とを交互に見つめる。

「いや、野々原は柊木なんだよ。なんたって二人はうんめ……」

すると、ワインのグラスを傾けながら説明するような口調で主任があらぬ話を始めようとしたので、慌ててそれを遮ろうとした、その時だった。

「え、なに、二人はそういう関係なの？」

天井から下がる淡い照明の光を柔らかそうな髪に受け、安堂くんが顔を出す。

「社内恋愛ってヤツ？いいなー、何かドラマみたいで羨ましいなあ」
小さなテーブルに所狭しと手にした皿を並べ、安堂くんがニッコリと笑いかける。

「ご注文の品は以上でよろしいですか？あ、こっちのスイーツは野々原さんにオレからのサービスね」

襟元を少し崩した白いシャツに黒のギャルソンエプロンを巻いた安堂くんは言つて、私の目の前に置いた皿を指し示す。

「え、オレも甘いのが好きなんですけど男にはサービス無しですか？
すかさず主任が冗談めかして安堂くんを見上げて言つと、

「つていうか、野々原さんにだけ、サービス」

と、安堂くんは事もなげに言い切つて店の奥へと戻つていった。

「かなりのやり手になりそうだな、オーナーとしても、男としても」

奥に消えた安堂くんの背中を見送り、主任が呟く。

「御曹司なんだろ、しつかり口説けよ」

言つて主任は柘木くんを目だけで振り返ると、にやつと笑つた。

「つていうか、安堂くんの店にしたのつて、『奢る』とか言つただけ
ど経費で落とすつもりじゃないですよね？」

持ち上げたグラスを主任の鼻先に突きつけ尋ねると、主任は少し
だけ身体を引いて「まさか」と、短く返す。

「今回はちゃんとオレが払うけど、でも、これから長いお付き合い
を望むならこうやって飲み顔を出して馴染みになるのも大切だから
らな」

主任は言つてフリットを頬張ると、「うまい」と、大きく頷いた。

「どう？美味しい？」

それから暫く、主任の仕事に関する話に付き合わされた。

隣に並んだ私はいい加減に聞き流したりしていたが、正面に座る

柘木くんは上手く誤魔化す事が出来ずにワインをチビチビと舐めながら只管小さく相槌を打っていた。

(どうやって話題を変えようか?)

少しは付き合ったのだからもういいだろう。そう思って話題を変えようと考えていた時、再び安堂くんがテーブルに顔を出した。

「このフリット、凄く美味しいですね」

横に立った安堂くん主任は言って、一人で殆ど平らげてしまった皿を指差す。

「ありがとうございます」

主任の言葉に安堂くんはほほ笑むと、恭しく頭を下げた。

「で、これなんだけど」

下げた頭を戻し、安堂くんは言いながら手にしたボトルをテーブルの真ん中に置いた。

「海外のお土産ってお客さんから何本か貰ったワインなんだけど」
安堂くんの説明を聞きながら、深い緑に縁取られたボトルのラベルを柘木くんがじっと見つめている。

「……これは」

言いながら首を捻り、キリツと上がった眉根を寄せた。

「珍しいワインですね……うちの取り扱いは無いな」

うーん、と低く唸りながら主任もボトルを見つめていたが、ワインに詳しくない私がどうしたものかと二人を交互に窺っていると、二人の反応を見ていた安堂くんと目が合った。

淡い照明を受けたダークブラウンの瞳が瞬間、色を放つかのように瞬く。途端、心臓が小さく跳ねてあっと思う間もなく、安堂くんは私の動揺を弄ぶかのように何でも無い素振りであつと笑った。

(あ……っ)

思いがけずあの、好きだった笑顔に再び間近で出会い、戸惑う。

その笑顔に吸い込まれる様に目を反らせないと、不意に柘

木くんが口を開いた。

「確かコレ、前にも飲んだ事あるような……」

独り言のように呟いて、大袈裟に腕を組んだ柊木くんを反射的に振り返る。

視線がぶつかりと、柊木くんは更に眉間に皺を深く刻んで「うん」と、唸った。

「良かったら飲んで。ウチが求めるワインの傾向を知るのも大切ですよ？」

安堂くんは言って、手慣れた様子でワインを開ける。

店員に新しいグラスを持ってこさせると、それぞれにワインを注いで奥へと戻っていった。

「あ、でも、こういう香りのワインで多いですよね……？」

「いや、飲み込んだ後の香りの中に独特の渋みが……」

「口に含んだ瞬間の香りの立ち方は絶妙ですね」

「色の出かたがいいね、使ってる葡萄は多分……」

「これ絶対前に飲んだ事があると思うんだよなあ……」

グラスを回して色を見たり、匂いを嗅いだり口に含んだりしてワインを吟味する二人を横目に濃い赤い色をしたワインを飲む。

「ソムリエでも分からない事があるんだ」

すっかり蚊帳の外状態で気楽な気分からつい、難しい顔をしてワインを飲んでいる二人に思った事を零してしまうと、

「世界中のワインを飲んだわけじゃないからね」

と、柊木くんがラベルを見つめたまま、言う。

「でもこれ、見た事あるような……多分、あれだと思っただけ……」

柊木くんは言いながら、ボトルの脇に置かれたコルク栓を手にとってじっと見つめた。

「じゃあ、違うワインに1万ペソ」

私に分かるのはこのワインが美味しいって事だけだな、と思ってワインを飲み干し、グラスをテーブルに置いて尚も難しい顔で考え込んでいる柊木くんに言う。

「なんだよ、それ。ならオレは同じワインに2万ペソ」

「あ、結構自信あるんだ？」

「いや、無いけどでも勝負事で負けたくない。オレ、負けず嫌いだから」

手にしたコルク栓をきゅっと握りしめ、柊木くんが振り返って言う。

「じゃあオレも野々原と一緒に違うワインに1万ドル」

「ドルは無いです」と、柊木くんは主任に突っ込みつつ、宣言通り、負けず嫌いの血がかき立てられたのか、ムツとした様子で唇を尖らせた。

「いや、いくら柊木が優秀なソムリエでも相当な数を飲んでるだろ？似たような味のワインは多いし、有名じゃないものなら尚更難しいって　って事で更に倍率ドンの2万ペソで」

「そりゃそうかもしれないですけど、でも絶対譲れません　って事でオレも倍率ドンで4万ペソです」

「悪いけど負ける気はしないよ、きつと違う、有名じゃないかもしれないけど早々手に入らないワインだと思うね、コレは　って事で3万ペソ」

「円って何ですか、あくまでペソです、って言うか、オレも負ける気全く無しです、つか野々原さんは1万ペソのままでもいいの？って言うか、オレの方へ鞍替えするなら今のうちだよ」

「え、私!？」

「いいんだよ、野々原は柊木の負けにオレと同じ3万ペソなの、だから明日6万ペソだからな」

あたふたする事しか出来ない私を余所に、徐々に白熱していく二

人がテーブルを挟んで睨みあっている。

どうしよう？

この場合は取りあえず定番だけど「まあまあ、二人とも落ち付いて」だな、と思って口を開きかけた、その時だった。

「コルク栓は取ってあるから確認しに……帰る」

「へ！？」

言って突然席を立った柘木くんは、思わず間の抜けた声をあげてしまう。

「別に今すぐじゃなくても……」

と、慌てて押し留めようとしたけれど、柘木くんは脱いで背もたれにかけておいたジャケットを羽織ると帰り支度を始める。

「主任も止めてくださいよ」

全く聞く耳を持たない様子の柘木くんがブリーフケースを手にしたので傍らを振り向いて助けを求めると、主任は落ち着いた仕草でグラスにワインを注いでいる所だった。

「ちよつと、主任！」

まるで頼りにならない主任の背中を思わず叩くと、主任はちらりと私を振り返ってワインを口に含む。

「ほら、公正を期す為に一緒に確認して来い」

「オレはこの美味しいワインを責任もって飲んで帰るから」と、続けて、ごくり、と喉を鳴らす。

「……ええ！？」

「だって柘木が一人で確認するだけじゃ不正されても分からないだろ？」

静かだけれど挑発するような発言に、柘木くんの吊り上がった目がすっと細められる。

「不正なんてしませんが後で変な言いがかりをつけられても困るんで 行くぞ、野々原」

「へ!？」

急に呼び捨てにされた事で動揺を隠しきれず、再び妙な声が出てしまう。

「ちよ、なら主任も一緒に……!」

言うだけ言って行ってしまった柊木くんの背中を見つめながら主任の背中を揺すったけれど、主任はグラグラと身体を揺すられながらも手にしたグラスを離す素振りを全く見せないでいる。

「ほら、早く行かないと見失うぞ　それとも、柊木の家が何処だか知ってるのか？」

言うてにやり、と厭らしい笑みを浮かべた主任に愛想を尽かし、「知るわけないじゃないですかっ」

と、言い捨ててカバンを持つと柊木くんの後を慌て追いかけた。

「ちよっと待って、柊木くんっ」

お店に迷惑がかからないように控え目に名前を呼び、狭い店内のテーブルとテーブルの間をすり抜けるように走ると、カウンターの中に居た安堂くんと目が合った。

目が合って、安堂くんは慌てて走る私にっこりとほほ笑んだ。

二人きりの夜

支社からほど近い、裏道にひっそりと佇む安堂くんの店から表通りに出た。

柘木くんは怒っているからなのか、普段よりも少し早足で振り向きもせずに私の少し先を歩いている。グレーのスーツの肩がピリピリと尖っているような気がして、声をかけ難かった。

柘木くんの家があまり遠くないといいけれど。

終電の時間を思い返しながら時計を確認して小さくため息をついた。

それにしても。

本当にこのまま、柘木くんの家に行ってしまった方がいいのだろうか、と考える。

時計の針は9時を回ったところでそれ程遅い時間では無かったけれど”夜”という括りである事は間違い無かつたし、しかも互いにアルコールを飲んでいる。

夜にアルコールが入った男女が部屋に二人きり。

柘木くんの家がどんな所だか知りもしなくせに、既に手に入れている”一人暮らし”という情報から勝手に狭い部屋を想像して、思わず顔が赤くなる。

「狭いから座るとこないけど取りあえずベットにでも座って」なんて言われて、それでもつて「取りあえず酔い覚ましにコーヒードも飲む？」なんて聞かれたらどうしよう？そう言う時はやっぱり素直にベットに座るべきなんだろうか、いや、でもベットに座るなんてはしたないのではないだろうか、コーヒードだって、飲むとトイレ

に行きたくなるからこの場合は遠慮した方がいいかもしれない、などと暴走し始めた時、不意に柊木くんが足を止めた。

「ここなんだけど」

言いながらゴソゴソとポケットに手を突っ込む柊木くんの向こうに、3階建ての小ぢんまりとしたマンションが建っていた。

「ち、近いんだね」

まだまだ歩くと思っていたので、面を食らってしまふ。

「入社して近くに越したから」

目を瞬かせてマンションを見上げた私に、柊木くんは言って鍵を取り出すとエントランスを潜った。

「散らかってるけど」

まだ怒っているのだろうか。

先に部屋の中に入った柊木くんは相変わらず背中を向けたまま言っ
つて、私を全く振り返る事無くさっさと奥へ行ってしまう。

(本当にお邪魔していいのかな?)

全く表情が見えない柊木くんの態度に不安になる。

ワインのコルク栓を確認する為。

その為に来ただけで決して他の意味など無いのに、“夜” 飲酒” というワードと共に柊木くんの態度が引っ掛かって自ずと足を強張らせた。

そうしてヒールを脱ぐ事無く玄関先でぼうっと突っ立っていると、不意に麻穂ちゃんの顔が浮かんで気分が重く沈む。

(……ダメだ、帰ろう)

でも、なんて言っ
て帰ろう?

言葉に困って奥に消えた柊木くんを窺うと、部屋の灯りがついてワンルームの狭い部屋に配置された、シングル
のベットと小さなテーブルが見えた。

濃いグレーのカバーがかけられたベットに白いテーブル、奥の窓には薄いブルーのカーテンがかけられており、いかにも男の部屋のらしい配色だ。足元には雑誌が数冊落ちていて、テーブルの上には黒いマグカップと空のグラスが無造作に置かれていた。

（ここが柘木くんの家、か……）

ふと足元を見ると、今柘木くんが脱いだ靴の他に、靴が何足か出っ放しになっている。入って直ぐのキッチンには鍋とフライパンがコンロの上に置かれていて、流しには皿や茶碗が水に浸されていた。

（ちゃんと一人暮らし、なんだなあ）

当然の事なのに、柘木くんのプライベートな部分に少しだけ触れた気がして嬉しくなる。

（……って、でも、これ以上はダメだよ、帰るって言おう）

きゅつと唇を結んで息を整える。

低いベットの向こうでしゃがみ込んだ柘木くんの大きな背中に向かって声をかけようとした、その時だった。

「おわっ……！」

短い声がして、次にバラバラと何かが床の上にはら撒かれる音がした。

「ど、どうかした!？」

何事かと驚いて慌ててヒールを脱ぎ中へ入ると、膝を立てて座る柘木くんの足元にコルク栓が沢山落ちていた。

「崩れた……」

見ると、柘木くんの正面に3段のカラーボックスが置かれていて、どの段にも無造作に大量のコルク栓が山積みになっていた。

「……崩れたって、何処が……？」

どの段にもまだ大量のコルク栓が残っているのを確認しながら、柘木くんに尋ねる。

「……一番上の段にあったヤツ」

茫然としたままの柀木くんが言うのを聞きながら、どれだけ大量に積んでおいたのかを想像して少々呆れる。

「本当にスゴイ量だね」

言って傍らに膝をつき、柀木くんの周りを埋めるコルク栓を拾い上げる。

ちらり、と横目で窺うと、柀木くんは目の前のカラーボックスを見ているはずなのにもっと向こうを見ているような、遠い目をしていた。

「あ、悪い」

何個か掌に集めて今度は何処へ仕舞おうかと思案して部屋の中を見回していると、我に返った柀木くんが言っコルク栓を拾い始める。

「……って言うか、この中から探すの、大変だよね？」

手にした数個のコルク栓に視線を落とし、それからカラーボックスの中を見やって尋ねる。

なんの秩序も持たずに山積みされたコルク栓を全部確認していたら夜が終わってしまうのではないだろうか、と思い柀木くんを振り返ると、思いがけずこちらを見ていた柀木くんと目が合った。

(あっ……)

傍らに膝をついていたので思いの外距離が近く、真っ直ぐに向けられた視線のあまりの近さに戸惑う。

どきつと跳ね上がってそのまま突っ走る心臓を必死に堪えながら、ぶつかった視線を逸らす事も出来ずにただ、見つめ返す事しか出来なかった。

(……ど、どうしよう)

顔が火照るのが分かったけれど、何をどうしたらいいのか、頭が混乱して全く考える事が出来ない。

それよりも何よりも、真剣な顔をした柀木くんが何を考えているのか、この後にどんな展開が待っているのかを必死に考えようとして益々混乱を極めた私が緊張に耐え切れずにぎゅっと唇を噛みしめた時、逆にふっと目から力を抜いて柀木くんは微笑むと口を開いた。

「……ついだから片づけながら探すつので、どう?」

何を言われたのか、直ぐには理解出来ないでいる私を置いて立ち上がる。

柀木くんはそのままキッチンに向かうと、ガサガサと音を立ててごみ袋を持ってきた。

「二人ならそれ程かからないと思うんだけど……っっていうか、前に片づけを手伝ってくれるって言ったよね?」

「……言っただけ」

でも、その時はまさかこれ程とは思わなかったし。

やっとの事で理解が追いついた私がそう続けようとする前に、了承を得たと思った柀木くんが白い歯を見せて嬉しそうな笑顔を浮かべたのでそれ以上何も言えなくなってしまふ。

(さっきの妙な緊張は何だったんだろう……)

普段通りに戻った柀木くんの笑顔を前に、何か白昼夢でも見ているような気持ちになる。

(まあ、何でも無かったって事で)

それでも、一旦高鳴った胸はまだ少しだけドキキしていてさっきの柀木くんが夢で無いことを教えていたけれど、考えても分かんない上に柀木くんに聞けるはずもなく、だから無駄な事は止めようと思ひ、気持ちを切り替えた。

「……じゃあ、終電まで」

言つて、手にしたコルク栓をごみ袋に投げ入れる。

「あ、確認した?って言うか、どうやって数を数える?」

途端、柀木くんが言つてごみ袋の中からコルク栓を取り出し、キョロキョロと室内を見回すと紙とペンを出してテーブルの上に置く。

た。

そうしてどれ位時間が経ったのだろう。

棚から柀木くんが一個一個焼印を確認して渡してくれるコルク栓を、流れ作業で私が受け取ると紙に数を書いていった。

酔いは醒めていった筈なのに、単純作業のせいも手伝ってか時間が経つにつれてどんどん眠くなっていった。

手元も怪しくなっていていつて柀木くんから受け取るコルク栓を幾度か床に落とし、紙に記す数字も枠から外れてバラバラになって解読不明になっていった所から後の記憶が失われていた　気がつくとき見慣れないグレーの布団を被って眠っていた。

半分顔にかかる布団は私が使っているアロマ系の柔軟剤とは違った香りがして、まだ眠たい頭を一気に冷やして混乱させる。

「えええ!？」

驚きに声を上げ、ドラマの演出であるような、ガバツと勢いよく身を起こすと煌々と点いたままの部屋の灯りの中、ベットの脇で身体を横たえた柀木くんを見つけたのだった。

ドラマみたいに起きる事ってあるんだ……等と、一瞬余計な事を思いつつ、眠る柀木くんから目が離せないでいる。

テーブルと向き合うように横向きで眠っている柀木くんの顔は見えないが、私が上げた声に気づく事無くすうすうと寝息を立てている。

傍らにはパンパンに膨れ上がったごみ袋が口を閉じて置かれていて、カラーボックスの中は見事空っぽになっていた。

(……いつの間に寝ちゃったんだろう?)

テーブルの上には数字が羅列された紙が置かれていて、その横に同じコルク栓が2つ、無造作に並べられている。

(あつたんだ)

そう思ったが、見つけた記憶が無いのでその前に眠ってしまったらしい。

(……どうしよう?)

冷静にそこまで観察したものの、いつ眠ってしまったてどうしてベツトに入っているのか、全く記憶が無い事に自ずと焦りが募っていく。

(って言うか、何時?仕事は!?)

慌てて腕にはめた時計を確認し、スーツを着たまま寝ていた事に気づく。

柘木くんもジャケットを脱いでいるもののしっかりとシャツとズボンを着込んだままなのを確認して、何故か少しだけほっと胸を撫で下ろしている自分がいた。

(6時か……って事は!?)

薄いブルーのカーテンから漏れる朝日を見やり、入社時間にはまだ余裕がある事に気づく。

(このまま入社するわけにはいかないし、急がないと!)

そう思って柘木くんを踏まないようにベツトからそつと抜け出すと、乱れて皺になったスカートを直して立ち上がる。

ボサボサになった頭を手櫛で整え、すっかり崩れ切ったであろう化粧を想像する。

どんなに髪と化粧を直したところで、昨日と同じ服のまま、しかも妙な皺がついたスーツで出社したら、実際には何も無いのに主任や麻穂ちゃんにきつと勘ぐられてしまっただろうと安易に想像がつくと益々気持ちが悪った。

(……って言うか、柘木くんに何か声をかけた方がいいかな?)

ぐっすりと寝ている柘木くんを見下ろし、考える。

終電で帰ると言いながら勝手に寝てしまい、しかもベツトまで占領してしまったのだから起こして謝らなければいけないと、分かっているのに何故か恥ずかしさが先に立って起こす事を躊躇してしま

う。

何も無かったのだから恥ずかしい事など何もない筈なのに。

そう思うのに声をかける事が出来ず、そうして居る間にも早く帰って支度を整えないと出社に間に合わない焦り、ただ無駄にアタフタしていると、そんな気配を感じたのか、うーんと小さく唸って柀木くんが身体を起こした。

「ご、ごめん、起こしちゃった？」

咄嗟に掌で顔を隠し、目だけを出して尋ねる。

最初に化粧を直しておくべきだったと心底後悔したが遅かった。

けれど、私が気にするほど柀木くんは何も思わないのか、大きな欠伸をしてから「おはよう」と、言っただけでつこりと笑った。

「で、あの、いつの間に寝ちゃったのかとか、ベット借りちゃってごめんとか、何か色々あるんだけど今日は休みじゃないから家に帰って支度したいんで本当にごめん、帰るね！」

寝起きなのにどうしてそんなに爽やかなのだろう。

よくよく見れば髪だって変な所で跳ねていたりするのに、白い歯を零す柀木くんが化粧を崩した自分と比べてやけに眩しく感じて、慌てて目を逸らして口早に捲し立てると逃げるように玄関へと小走りに向かう。

「ご、ごめん、ありがとう」

振り返らずに言い、ヒールに足を突っ込んで玄関を飛び出す。

随分と失礼だったかもしれないと気付いたのは、自分の家に着いてからだった。

I · n o t i n l o v e

シャワーを浴びて支度をし直し、時間に終われるようにして慌ただしく家を出た。

会社に着く頃にはすっかり日常を取り戻していたけれど、事務所に顔を出して直ぐに柘木くんを見つけた時はびっくり、と心臓が跳ねあがった。

「おはよう」

大きく深呼吸してから挨拶する。

誰が見ているか分からないから普段通りに、と思ったのに、寝起きで挨拶してくれた柘木くんの笑顔が不意に思い出されてつい、目を逸らしてしまう。

必死に堪えるのに心臓のドキドキは治まるどころか高まるばかりで、柘木くんがこつちを見ているのを分かっているも俯かせた顔を上げる事は出来なかった。

(後で、二人きりになったら謝ろう)

昨日の事と、挙動不審な態度と。

麻穂ちゃんが淹れてくれたコーヒーを啜りながらそう思い、机をぐるりと回って柘木くんの所へ歩み寄る麻穂ちゃんを横目で盗み見る。

「今日の寝癖、また一段とスゴイですよ？」

広げたファイルに視線を落とした柘木くんの背後からコーヒーを差し出し、麻穂ちゃんが愛らしい声で笑う。

「昨日、遅くまで飲んでたんですか？」

声は軽いのにどこか探る様な、はつきりとした口調で麻穂ちゃんが尋ねると、

「そんなに遅くまでは飲んでないよ」

と、柘木くんは答えて寝癖がついていると指摘された後頭部を手で撫でた。

「そこじゃないですよ、こっちです」

片方の手に盆を持ち、もう片方の手で柊木くんの髪に麻穂ちゃんが手を伸ばす。

「……この辺がいつぱい跳ねてます」

言いながら柊木くんの頭に掌を当てて　こつそりと横目で盗み見ていた私を目だけで振り返った。

(!?)

反射的に目を逸らしてしまい、それが返って麻穂ちゃんに不審に思われてしまったかもしれないと思ったけれど、今更視線を戻すわけにもいかない。

窺うような麻穂ちゃんの視線を感じつつ、机の引き出しを開けて薄いファイルを取り出すと、わざとらしく「ああ、そうだこれこれ」等と呟いてファイルを開いた。

「……昨日、楽しかったですか？」

ペラペラとファイルを捲り始めると、耳を澄ませているわけではなかったけれど、少しだけ声のトーンを下げて柊木くんに尋ねる麻穂ちゃんの声が聞こえた。

「結局3人で最後まで飲んでたんですか？」

「え、あ、うん、そうそう」

麻穂ちゃんの問いかけに、何処か上の空のような声で柊木くんが返事をしている。

「柊木さんと野々原さんの同級生のお店に行っただんですよね？」

「あ、うん、そうだね、高校の時の」

珍しく歯切れの悪い柊木くんの言葉に、どんな顔をして話をしているのか見たかったけれど、麻穂ちゃんと目が合ってしまうのを恐れて顔を上げる事は出来ない。

「^{メント}ment o”って新しいのに結構有名ですよ、私も前から行きたいなって思ってた」

「え、でも、麻穂ちゃんてお酒飲めないんじゃないかなかったっけ？あそ

こは飲む店だから……」

「飲めなくても雰囲気を楽しむのが好きなんです、だから今度わたしも連れてって下さい」

麻穂ちゃんの真っ直ぐな言葉が胸に刺さる。

その、真っ直ぐな思いはちゃんと届いたのだろうか？

麻穂ちゃんの言葉に対する柊木くんの返事は聞こえない。

ファイルの上に目を落としながら二人の様子を必死に窺おうとして、でも顔を上げる事は出来なくて。

どうにもならなくてきゅっと奥歯を噛みしめると意味も無く立ち上がる。

立ってしまったからどうしたものかと思案し、誤魔化すようにトイレにでも行こうかと思った所で電話が鳴った。

*

そんな金曜日が明けて一晩ゆっくりと休んだ後、大学からの友達の礼奈れなと向かい合って座り、遅めのランチを取っていた。

「なにになになに〜、”男の一人暮らしの家に初めてのお泊り”が初恋の人んち”って、大事件じゃない？」

ぐるりと黒いラインで縁取った目を細め、礼奈はからかうように言ってテーブルに身を乗り出す。

ピークを過ぎた店内は人影もまばらで気にする事は無い筈なのに、礼奈はわざとらしく声を響めて囁いた。

「で、どうだったの？」

にやり、と片方の口尻だけ持ち上げてじつと返事を待つ礼奈の勢いに押されて、思わず口籠ってしまふ。

「そこまで話しておいて勿体つけるなんてズルイよ」

礼奈は身体を引いてイスに座り直すと、水滴が浮かんだグラスを取ってアイステイーを一口、飲む。

「いや、別に勿体ぶってるわけではないし、それに柊木くんは初恋の人っていうのもちょっと違うし……」

言いながら手にしたフォークでパスタをグルグルと巻き続ける。

一口で入れるには多すぎる量を巻き取ってしまったのでもう一度巻き直し、上手に巻きなかつたので更にもう一度巻き直す、を無意識のうちに繰り返し返していた。

「もう、早く食べなよ、グチャグチャになるよ」

目に余った礼奈に指摘され、多めに巻き取ってしまったパスタを頬張る。

「で、だからどうだったの、それでそれで？」

口を開くと溢れてしまいそうなパスタを必死に噛む私に、礼奈は待ちきれない様子で食べるのも忘れて尋ねた。

「どつって……何も」

礼奈の視線が痛くて、まだ少しパスタが残っている口で小さく答える。

「……」何も」？」

「そう、何も」

「何もってどういう事？」

「何もって、だから何も無かつたって事」

言っパスタを飲み込むと、苦労した口の中をミネラルウォーターで潤した。

「……他に誰か居たってわけじゃないよね？」

礼奈はマスカラがたっぷり盛られた睫毛をバサバサと上下させて

「じゃあ何、私が期待したようなドラマは何も無しって事？」

少しがっかりしたように礼奈は言って、すっかり忘れ去られていたパスタの皿に手を伸ばす。

「超が付くほど奥手の沙優がついに一步を踏み出したのかと思って期待してたのになあ」

言いながら礼奈はフォークでパスタを巻くと一気に頬張って「冷めちゃった」と、呟く。

「もう、人の話を面白がるから冷めちゃうんだよ」

言って私も食事を続けていると、不意に礼奈の手の動きが止まった。

「……まさか、また誰かに遠慮してたりするんじゃないよね？」

言われて顔を上げると、先ほどまで冗談を言っていた時とは違う、真剣な目で礼奈が真っ直ぐこちらを見ている。

「あんた、スタート切る前から棄権するクセ、早く直した方がいいっていつも言ってるよね？」

礼奈は言いながら小さく首を傾げる。

あまりに真剣に見つめられて、どう答えたらいいのか分からなくなってしまうって返答に困っていると。

「彼氏が出るチャンスなんていくらでもあったのに。いい雰囲気になって向こうから好きだって言ってくれた高嶋くんの事だってそうだよ、後輩の美久みくが高嶋君を好きみたいだからって、そんな理由でふられた高嶋君が可哀想だったよ？」

痛い所を突かれて、益々何も言い返せなくなってしまう。

いいなって言ってなかった？なのにごうして？

あの後散々、礼奈に責められたのを思い出した。

「いいなと思った男が既に誰かのものだったって事だって別に普通

にあるんだし。取った取られたって話ならまだしも、始まる前から諦めてたら、いつまで経っても彼氏なんて出来ないよ?」

あまりに私が落ち込んでいる事に気づいたのか、礼奈は話をそこで一旦終わらせると再びパスタを食べ始めた。

しかし、それでもまだ言い足りないのか、口をモゴモゴさせながら、

「そのままオバサンになっちゃうよ?」とか、「のんびりしてる場合じゃないよ?」などと、まるで独り言のように言い続けた。

「……別に遠慮してるわけじゃないよ」

少し重くなつた気分を落ち着かせ、チラチラと脳裏をよぎる麻穂ちゃんの顔を遠くに押し退けて気分を切り替えた。

「柘木くんの事を高校の時にいいなって思ってたのは確かだけど彼の事だけそう思ってたわけじゃないし、今はただの同僚っただけでいい人だとは思いつけど好きとかそういうんじゃないし……それに、誰かに遠慮してるとか、無いよ」

言って笑顔を作ると、礼奈がふうん、と気の無い返事をする。

「ちよつと、折角話してるのにその返事は無いんじゃない?」

「自分に都合のいいようにこじつけてるだけでしょ、本当の気持ちから目を逸らして」

「本当の気持ちって……私が話してるのが本当の気持ちだよ、何でそうなるの?」

少し身を乗り出して尋ねる私を礼奈は無視するようにアイスティーを口に含むと、窓の外に視線を投げた。

「ただの同僚だから、男とか意識しないで泊れたんだ?」

窓から見下ろす大通りを、沢山の人が歩いている。

誰を見るでもなくその様子を見下ろしながら、静かに礼奈は言った。

「朝までベットで寝ちゃっても平気だったんだ?」

穏やかなのに何処か棘を感じたような気がして、胸がちくり、と痛む。

「いつの間にか寝ちゃってたんだから不可抗力だよ、別にそうしたくてしたわけじゃないし」

早口で言う私とは対照的に、礼奈はゆっくりとした口調で返す。

「……でも、向こうはまだ起きてたんでしょ？何かされてても分からないよね？」

手にしたストローで礼奈がグラスの中身を混ぜると、氷がアイスティーの中を泳いでカラカラと音を立てた。

「 柊木くんはそんな人じゃないよ」

「高校の時は見てるだけだったんだし、同僚として再会したって言ったってまだ1カ月。ただの同僚のどこまで知ってんの？」

低い声で礼奈は言っつて、窓の外に投げた視線を私に戻す。

「まだ彼氏の一人も出来た事の無い、男に対して免疫ゼロみたいな沙優が、酔って夜に男の一人暮らしの部屋に上がったんだよ？嫌いじゃ上がらなし、警戒してれば寝たりしないでしょ」

言いながらじつと見つめられると、その迫力に押されて背筋が強張っつてしまふ。

喉もぐつと締め付けられたように詰まっつてしまつたけれど、黙っつていたのでは認めてしまふ事になつてしまふと思つた。

「で、でも待つて。なら百歩譲つて私がそう思つてたとしても、だよ？服はちゃんと着てたし、柊木くんだつてそのままだつたし。柊木くんは何もしてないよ、何もしないつてのはつまり……」

どうにかして否定しなくては。

そう焦る私の頭の隅に、麻穂ちゃんの顔がちらつている。

「……つまり？」

「つまり、柊木くんの方は私を何とも思つてないつて事だよ」

そこまで言い切つてから、勢いで言つてしまつた割には出た結論が自分でも尤に思えた。

「 そう言われれば……そうかもね 」

先ほどまでの迫力を失って、礼奈がぼつり、と呟くように言うときアイスティーを口に含む。

「 でしょ？ 」

ほっとして私も、乾いた口の中を潤すようにミネラルウォーターを呷った。

「 据膳食わぬはなんとかって言う言葉があるくらいだからね、多少気がある相手なら何かしらのアクションがあつたはずだし……あ、でも、今時の草食系男子ならアレかな？ 」

「 いやいやいや、私に興味が無いだけでしょ、大学時代とかには普通に彼女が居たみたいだし 」

「 ……そう言われちゃうと 」

「 酔って寝ちゃった女が居るのに何もしないって、まあ、自分で言つてて哀しいけど興味が無いとしか言いようがないじゃない？ 」

言いながら自分で自分が少し可哀想に思えてきたけれど、それが事実だと思い始める。

「 ……まあ、そうかもね 」

礼奈が同情するような目で言つて、運ばれてきたデザートに手を伸ばした。

「 ……でも本当に、好きとか気になつてたり、しない？ 」

疑いは晴れたけれど、今度はすっかり同情されてしまったようだった。

「 してないよ。それに、柊木くんには社内のアイドル的存在の麻穂ちゃんが居るし 」

「 あ、なんだ、付き合ってる子が居るの！？ 」

固めに焼かれたガトーショコラにフォークを刺すと、一口頬張つて返事をする。

「 まだ付き合つてはいないみたいだけど、麻穂ちゃんはきつと柊木

くんが好きだと思う、うん、絶対」

言って控えめな甘さを楽しんだ喉にコーヒーを流し込むと、ケーキにフォークを刺したまま動きを止めた礼奈と目が合った。

「……ほら。また無意識に避けてるでしょ、気付かないの？」

呆れたように礼奈は言って、ケーキからフォークを抜くとその先を私に向ける。

「え、いや、でも、ほら、肝心の柗木くんが私には全く興味がないわけだし」

物騒だから止めてよ、と掌で防御しつつ、返事をする。

「そんなの分かんないじゃない、泊って何もしなかったって、彼も飲んでたんだから眠気に負けただけかもしれないし」

「そんな筈無いよ、多分本当に私に興味が無かったってだけだよ」

「それにもしかしたら、単に紳士的なのだけかもしれないじゃない？付き合ってもいないのにいきなりそういうのはダメっていう」

「だから違っつてば」

「そうだよ、単に真面目なだけなんだよ。据膳云々と一緒に考えたらダメなのよ、そう、真面目なの。真面目でしょ、彼？」

「そ、そりゃあ真面目だけど違っつよ、私に興味が無いだけなんだつてば！」

あまりに礼奈が食い下がるので、つい、声が大きくなってしまふ。そんな私の様子に礼奈は呆れたようにため息をつくど、

「まあ、別にいいんだけどね、そこまで否定するなら。でも本当にスタートする前から逃げ出すの、止めなよね」

と言って、苛立ちを紛らすように食べかけのケーキにフォークを強く突き立てた。

5年前の真実

「こ、この前はごめんね、何か色々と迷惑かけちゃって」
気まずい空気を払拭しようと、思い切って口を開いて傍らに並んだ柘木くんを見上げる。

予め笑顔を作ってから顔を上げると、柘木くんは正面を向いたまま、何処か遠くを眺めているような目をしていた。

何となく、朝から浮かない顔をしている柘木くんに話しかけ難かった。

目が合ってもふい、と逸らされてしまう。

営業先では普段通りの柘木くんなのに、店を出て二人きりになると途端に素っ気ない様な……今になつて思い返せば元々それ程饒舌な方では無かつたにしても柘木くんからも話をしてくれたのに、話しかけ難いと感じている私があるまま黙っていればいつまでも沈黙が続いてしまう様な状態だった。

「謝るのがちよつと遅かつたよね、ゴメン」

あの、木曜の夜から週末を挟んでの月曜日。

今更謝つて蒸し返すのもなんだと昨日は思っていたけれど、普段と違う柘木くんの態度の意味を考えるとそれしか原因が思い浮かばなかつた。

もしかしたら。

あの夜、眠ってしまったただけでは無くて何か、柘木くんを怒らせるような事をしたのではないだろうか 例えば。オナラをしたとか、涎を垂らした、とか。けれど、恥ずかしいのに違いはないけど、不可抗力の生理現象で柘木くんが怒るとはあまり思えない もし

かしたら。酔って迫ったりしてたらどうしよう!? 迫るってどんな風にと考え、昔読んだ少女マンガによくあるような、上目使いにしながらかかる女の子を想像し、その顔を自分と挿げ替えてゾツとする。

昔好きだったと言うのは事実だし、礼奈には散々否定したけれどもしかしたら本当は柊木くんの事が気になって……潜在意識に”好き”という気持ちがあって無意識のうちに迫ってたりしたら……

(どうしよう!?)

考えれば考えるだけ恐ろしくなり、キヤーと叫び出しそうになるのを必死に堪える。

私の言葉に返事をする事無くずっと黙って遠くを見つめている柊木くんから目を逸らし、顔を伏せると自ずと上がった心拍数を押さえようと深呼吸する。

(だから返事に困ってる、とか……? もしかして私、謝っても済まない様な事をやらかしたの!?)

しかし、考えれば考えるだけ混乱は深まり、心拍数は鰻登りに上がっていく。

何をやらかしたのだろう。

服はちゃんと着ていたのだから肌を露出した色仕掛けでは無いだろうし……などと、一人顔を熱くさせながら必死に考えていると突然、柊木くんが静かな声をぼつり、と落とした。

「初めて会った時、名前を思い出そうとしたら『知ってる筈ないからいいです』って、言ったよね?」

何の事かと思いながら静かな声で話す柀木くんを見上げると、柀木くんは相変わらず正面を見据えたまま、まるで独り言のように何の感情も見せないで続ける。

「ぶつかった事で驚いて咄嗟に思い出せなかっただけで、本当に知ってたんだ……野々原さんの名前」

大きな交差点に差し掛かり、赤いランプと向かい合って足を止める。

柀木くんが私の名前を知っていたと知り、心臓が小さく跳ね上がる。

どうして、という思いの中に、彼と何か接点があったらどうかと必死に考えた。

「卒業式の後、制服のボタンを女の子たちから記念に欲しいって言われてあげてたんだ」

ゆっくりと思い出すように話す柀木くんの言葉に導かれる様にして、その日の記憶が蘇る。

仲の良かった梨花と、最後の日にも結局何も話す事無くすれ違った卒業式の後。

女の子たちに囲まれている安堂くんを遠くに見ながら学校には何の名残も無いと返事をして、卒業式に出席した母の車に乗り込んだのだった。

「バレンタインにチョコをくれたA組の野崎ノザキさんもその中に居て……」

柀木くんの口から出た、「野崎」という名前にどきり、とする。「野崎さんにもボタンをあげただけだ」

柀木くんの話を聞きながら、梨花の顔がまるで今ここに居るかのように鮮明に思い出された。

「思い出し、とか、記念に、とか。中には男も混じって、野崎さ

んにあげたのを最後に全部無くなっちゃったんだ　それを見て
信号は青色に輝いていたけれど見据える柊木くんの目には映って
いないのか、足を止めて立ち止ったまま、続ける。

「一旦は受け取ったボタンをオレに返してこう言っただ」
そこでゆっくりと振り返ると、表情を変えないまま静かに言った。

「『このボタン、後で欲しいってA組の野々原さんが来たらあげて
って」

ぎゅっと一旦は強く握ったボタンを、白い掌を開いて柊木くんに
差し出す梨花を想像していた。

「何の事か分からずに返されたボタンをポケットにしまって、家に
帰ってからアルバムを開いたんだ」

目の周りが急に熱くなつて、痛みを堪えるように眉根を強く寄せ
た。

梨花。

心の中で名前を呼ぶと、視界が滲んで泪が一筋、頬を伝った。

「え、ごめん、オレ、何か悪い話してるか!？」

すると、突然泪を零した私に驚いた柊木くんが慌てて腰を屈め、
顔を覗きこんで尋ねる。

「あ、ううん、そうじゃないの、ごめんね」

嬉しいような、けれど辛くて重たい気分になる。

ずっと喧嘩したままの梨花の思いもかけない行動と発言に、どう
してちゃんと仲直りが出来なかったのだらう、と今更ながら激しく
後悔した。

「……ごめん、この話はもういいや」

ハンカチで涙を拭い、それでも尚もジワジワと滲む涙を拭い続ける私に、柊木くんは困った顔をして言うと頭を掻いた。

「本当に話したいのはこの話じゃなかったのに、変に遠まわしにして逃げたりするから……ごめん」

信号が2度目の青になり、柊木くんは言うと私の肘のあたりを掴んで歩きだす。

「この話にも何か理由があったんだな……何も知らなくてごめんな」
何度も謝る柊木くんは、昼のさ中の往来でこれ以上泣いているわけにはいかないと、私は奥歯を噛みしめると必死に涙を堪えた。

「少し早いけどお昼にするか」

そうして暫く黙って歩いていると、急に柊木くんがキョロキョロと周りを見回し、人影もまばらな裏路地へと入る。

「この辺でお勧めの蕎麦屋があるんだけど……蕎麦でもいい？それとも……」

泣いている顔をあまり見ないように気を使ってくれていた柊木くんが、返事を確認するために言いながら振り返る。

目が合って、はっとしたように目を見開くと、「ごめん」と、小さく謝った。

狭い裏通りは大きい通りからほんの少し入っただけなのにまるで別世界の様にしんと静まり返っている。

遠くに喧騒を聞きながら向かい合う。

心配そうに見開いた柊木くんの臉が優しく伏せられると、穏やかな目で私を見つめた。

「だから知ってたんだ、野々原のこと」

言いながら、そつと私の頬へと手を伸ばす。

触れるか触れないかの所で柊木くんの大きな掌は止まり、何かを思案するように節だった長い指が小さく震えた。

「知らない子がオレのボタンを欲しがってるって事の意味をいいよ

うに受け取って、アルバムを眺めた。何度か見た事のある隣のクラスの子のその時初めて知ったその子の名前をずっと覚えてたんだ」

瞳の中を覗きこむ様な柗木くんの視線の近さに戸惑い、睫毛を伏せた。

自ずと目に飛び込んできた柗木くんの指が、泪の痕に吸い寄せられるかのようにして頬にそっと触れた。

「最初から知ってたんだ。咄嗟に名前が出てこなかったけど、あの子だって」

瞬間、体中の神経が柗木くんの指先に向けられる。

そっと添えられる程度に触れた指先が、とても熱く感じた。

「あの子だって分かったから、一緒に営業回りをする事になってスゴク照れ臭かった」

多分ほんの1、2秒、触れただけの指先を、言っただけ柗木くんは引っ込めた。

「成り行き上オレの家に来る事になった時も、家まで歩きながら頭の中で色々考えた、コルク栓を確認するだけなのにどうしよう、どうするんだって」

狭い裏通りの両端に立ち並ぶ家々の影が、私たちの影を隠していた。

昼なのにうつすらと暗い通りで向かい合いながら、怒ったように黙って背を向けて歩く柗木くんを思い出していた。

「テーブルに突っ伏して座ったまま眠った野々原さんを起こさないようにそっと抱き上げてベットに寝かせて……」

説明するように話す柗木君を目だけで見上げると、顔を覗き込んで間近に迫る真っ直ぐな視線とぶつかる。

「起きて欲しいような、でも、このまま眠っていて欲しいような気もして……柔らかそうな頬に触れたいと思った」

梨花の事で一瞬、冷えたように冴えた頭が熱を帯びながら徐々にスピードを緩めてぼうつと白く塗りつぶされていく。

「でも、寝てるのにそんな事したらいけないと思って、野々原さんの顔が見えなくなるように、悪いと思っただけ顔まで布団をバサツとかけたんだ」

まるで夢をみているかのように思い出される、あの日の出来事。

目が覚めた時、顔の半分まで布団を被っていた事をぼんやりと思い出した。

「 だから、その……」

突然、柊木くんは言い淀み、視線を逸らす。

けれど、意を決したように再び視線を戻すと、真っ直ぐに私の目を捉えてはつきりとした口調で言った。

「 寝てたのにその顔を見るなんて卑怯な真似してゴメン」

はつきりとしてはいたけれど少しだけ早口に柊木くんは言って、小さく頭を下げた。

「金曜日の朝、顔を隠して慌てて帰ったし、会社で会っても目を逸らされたりしたから……もしかしたら気付いて怒ってるんじゃないかって……」

申し訳なさそうに話す柊木くんは、どこから返事したらいいのか、考える。

けれど、頭は驚きと嬉しさでかつて無いほどに混乱して何から返事したらいいのか分からない。

「私はずきり柊木くんの方が怒ってるんだと思って……」

取りあえず、謝ってはかりの柊木くんを止めなくてはと思い、その口に出した、その時だった。

突然、私の背中ではたん、と音がして人の気配がした。

話の途中だった柊木くんが「あ」と、小さく声を漏らしたので反射的に振り返る。

「え？ちよつとまだ昼間だよ？いくらこの道が狭くて暗いからってダメだよ、夜まで我慢しなきゃ」

聞き覚えのある声がして、見ると軽い口調で話す安堂くんが店の扉に鍵をかけている。

その少し先に蕎麦屋の看板が見え、スーツを着たサラリーマンが中に入っていく所だった。

「なんだ、やっぱり二人は付き合ってたの？って言うかさ、この前のワインみたいなヤツ、あったらサンプルで持ってきてよ」

「もう帰るから、今日ならこの前みたいに夜にしてね」と、安堂くんは言ってニツと笑い、狭い路地の、更に狭い方へと歩いて行ってしまう。

角を曲がって向こうへ消える瞬間、腕に嵌めたシルバーのアクセサリーが陽の光を受けて鈍く瞬いた。

「……なら、早速今晚、届けるか」

そんな安堂くんの背中を見送って、柊木くんがぼつり、と呟くように言う。

「この続き、話せるかな」

言っただけのまま振り返り、私の返事を待つように見つめてくる柊木くん小さく頷き返した。

3つのグラス

夜、もう一度話の続きをしようと思ったので、お昼を食べてからは通常通りに業務をこなした。

もちろん、その間も柘木くんの言葉の意味をふとした瞬間について考えてしまったけれど、もう少しの我慢だとうにか集中力を高める。

一緒に並んで歩きながら、どちらともなく目が合うと緩んでしまいそうになる頬を必死に堪えた。

あと少し。

仕事が終わったらまた話が出るのだから、と。

「じゃあ、サンプルのワインを3種届けて、そのまま直帰します」

ホワイトボードの、自分と私の欄に安堂くんの店の名前を書き入れながら、係長を振り返ると柘木くんは言った。

月も始めなのでまだそれ程忙しい時期では無く、事務所内に残っている人数は少ない。

パラパラと社員が残る事務所内を何を思うわけでもなく見渡し、いつの間にか麻穂ちゃんが上がっていた事に気がついた。

『今度私も連れて行って下さい』

矢庭に麻穂ちゃんという言葉が耳に蘇ってキュツと胸が締め付けられる。

柘木くんとこれから、仕事という口実を作って安堂くんの店に行く事に少し、罪悪感を覚える。と、同時に、今この場に麻穂ちゃんが居たら、可愛らしい笑顔を浮かべて私も行きたいと言うのだろうか、等と考えた。

(仕事で行くんだから麻穂ちゃんだってそこまでは……)

そう思いながら席を立ち、帰り支度をしにロツカールームへ向かう。

いつもなら殆ど何もせず帰るのに髪を梳かし、化粧を直してロツカーを閉める。

柊木くんと待ち合わせたビルの入り口に急ぎながら、これからまたどんな話が始まるのかと思つて自ずと胸が高鳴った。

エレベーターを降り、直ぐに柊木君を見つけて小走りに駆け寄った。

柊木くんは私を見つけるとワインを持っていない方の手を軽く上げたけれど、その表情が少し困っているように見えて足を止める。

「あ、野々原さん。私も一緒にいいですか？」
見ると、柊木くんの影にすっぽりと隠れるようにして、小柄な麻穂ちゃんが立っていた。

柊木くんの背中から麻穂ちゃんは顔を出すと、私に言つてにっこりとはほ笑んだ。

「『memento』に行くつて聞いたんで……あのお店、私も前から行きたいなつて思つてて」

シユシユを解き、緩くカールされた長い髪を揺らして麻穂ちゃんが小首を傾げる。

少し鼻にかかった声で語尾を伸ばし、甘えるように尋ねた。

「柊木さんは仕事だからつて言うんですけど、でも、ワインを届けたらその後はプライベートですよね？」

逆の方向にまた小首を傾げて言う麻穂ちゃんが、丸い顎に白い指を押し当てて柊木くんを上目使いに見上げる。

「だから、ワインを届けて仕事が終わつたら、その後一緒に飲みましようつて言つたら野々原さんと約束してるからつて言われて……」

言いながらちらり、と向けられる視線がその甘ったるい口調とは裏腹に鋭く冷たい気がして、一瞬どきり、とする。

「……私も一緒に行っちゃダメですか？」

甘えるように向けられた言葉はけれど、有無を言わせない力を孕んで突き付けられる。

「ダメって言われてもでも、行っちゃいますけどね？」

悪戯っぽく笑う真帆ちゃんから視線を逸らし、柊木くんの方をちらりと窺うと、柊木くんは苦笑いを浮かべ、返事を私に一存するかのようになんとも黙って見つめ返してくる。

「……だ、ダメってことは無いよ」

この状況でどうしてダメと言えよう。

ダメと言われても来ると言うのだからダメと言っただけ無駄だと思いい、笑顔を作って返事をした。

「やった！」

薄いピンクのスカートの裾をはためかせ、嬉しそうに麻穂ちゃんにはピョンピョンと小さく跳ねると柊木くんの腕に細い腕を絡める。

「じゃ、早く行きましょう」

そう言っただけ柊木くんの腕を引くと、安堂くんの店に向かって歩き出した。

*

「なんだ、てっきり沙優と出来てると思ったら可愛い彼女が居ただ」

笑顔のまま安堂くんは言っただけ、小さなテーブルの上にグラスを並べた。

いつの間にか下の名前で、しかも呼び捨てになったのだらうと思いつつながら安堂くんを見つめる。

そんな私の視線など全く気付かない様子で安堂くんはグラスにワインを注ぎ、柊木くんと並んで座った麻穂ちゃんに笑顔を向けた。「で、やっぱり社内恋愛なの？いいなあ、こんな可愛い子が居る会社、オレも雇ってもらおうかな？」

安堂くんが言つと、麻穂ちゃんは満面の笑みを浮かべて「そんな事ないですよ」と、小さく返事をする。

「フーか何、柊木は両手に花なの、今日？だとしたら黙ってられないな、オレも今日はもう仕事終わりにして客側に回ろうかな？」

低い声なのにどこまでも軽い口調で安堂くんは言つて、私を振り返る。

クスクスと笑う麻穂ちゃんの声を聞きながら、

「冗談はそれ位にして、注文お願いします」

と返すと、

「え、冗談じゃないよ、本気だよ？」

と、安堂くんは言いながらギャルソンエプロンのポケットを探つて注文書を取り出した。

それから暫く、3人で会社の話などをしながらワインを飲んだ。

とは言え、麻穂ちゃんも殆ど飲めないのが最初の一杯がいつまでもグラスに残っていたし、私も前ほどワインが美味しく感じずあまり飲んでいなかった。

「そう言えば先週3人で飲んだ時はどんな話をしたんですか？」
会話が途切れると、麻穂ちゃんは向かい合つて座る私を見て尋ねた。

「殆どが主任の、ちよつと説教染みた話しかな？」

答えて同意を求めるように柊木くんを見ると、柊木くんはテーブルの上に視線を落としてぼうつと何かを考えている。

「……柊木さん？」

それに麻穂ちゃんが気がついて名前を呼ぶと、

「え、あ、なに、ごめん、聞いてなかった」

と、柊木くんは言っただけで目を何度か瞬かせる。

「もしかして眠いんですか？」

呆れたように言いながら、けれど楽しそうに麻穂ちゃんが尋ねると、

「うん……どうかな」

と、柊木くんは曖昧に返事をした。

そんな事が何度か繰り返された後、麻穂ちゃんが『ちょっと』と言っただけでトイレに席を立った。

すると、それまで眠そうにしていた柊木くんが、麻穂ちゃんが奥に消えるのを確認してから挟んだテーブルに身を乗り出して、

「もうそろそろお開きにしてもいいかな」と、尋ねた。

一度開けてしまったワインは最後まで一度で飲んでしまいたいと、言っていたはずなのに、ボトルの中身はまだ半分も残っている。

「でも、まだ、ワインが大量に……」

「残っている」と私が言い切る前に、柊木くんは口を開くと、

「このままだと遅くなりそうだから」

と言っただけだ。

そうして何かを続けようとして、そのまま口籠る。

彼が何を言いかけたのか、全く分からずに見つめ返していると、ぐっと一度唇を結び直してから意を決したように口を開いた。

「この前のワインのコルク、同じのがあったんだ」

まるで内緒話でもするかのように、声のトーンを押さえて言った。

「あ、テーブルの上にあったのってやっぱり？」

「そう、あれ」

「なら、主任から4万ペソ、貰わないと」

と、言っただけで「あれ、でも、2万ペソだったっけ？3万ペソだっ

たっけ？」と、少し回転が鈍くなった頭で考えていると。

「でももしかすると間違ってるかもしれないから……この後、良かったらちゃんと確認して欲しいんだ」

柊木くんは更に身を乗り出すと、ゆっくりと、しかし確かな声で囁いた。

どきん、と心臓が跳ねるとともにハッと息をのんだ。

驚きに見開いた目を瞬かせると、目の前にある柊木くんの顔をじっと見つめ返す。

真剣な目をした柊木くんが少しだけ頬を染めているような気がして、思わず私も顔が赤くなるのが分かる。

うん。

小さく頷き返すと、白い歯を零して柊木くんが照れ臭そうに笑った。けれど。

その夜、柊木くんの家でコルク栓を確認する事は無かった。

「なんか酔っちゃって……」

麻穂ちゃんの気配に気がついて柊木くんが身体を戻し、何事も無かったかのように生温かくなってしまったワインのグラスを傾けていると、トイレから戻るなり麻穂ちゃんはそう言って、具合が悪そうに白いハンカチで口元を覆った。

いつも仄かに桃色に染まっている頬も幾分青白くなっていて、愛らしい丸い目を苦しそうに歪めていた。

「飲めないのに飲んだりするから……」

座るなり肩にしなだれかかった麻穂ちゃんを横目で見やりながら、
柊木くんが溜息をついて言う。

「取りあえずお水、どうぞ」

フラフラとトイレから出てきた麻穂ちゃんに安堂くんが水を持ってきてくれたけれど、麻穂ちゃんは柊木くんに寄りかかったまま動かない。

「気分が悪くて　　柊木さん、家まで送ってくれませんか？」

柊木くんの肩に寄りかかったまま、囁く様な小さい声で麻穂ちゃんが尋ねる。

柊木くんは一瞬驚いたように目を見開いたけれど、直ぐに麻穂ちゃんを見下ろすと様子を観察するようにじっと見つめた。

「……そうだね、帰った方がいいね」

言いながら、柊木くんが顔を上げて私を振り返る。

「タクシーとかじゃダメかな」

真っ直ぐに私を見据えながら、柊木くんが麻穂ちゃんに尋ねた。

「……一人じゃ不安だから、柊木さんに送ってもらいたいんです」
少し震えているような、弱々しい声。

けれど、真っ直ぐで強い意志がそこにあった。

「……ダメ、ですか？」

心なしか、口元を覆うハンカチも震えている気がした。

俯かせた顔はよく見えないけれど、もしかしたら泣いているのではないかと思った。

そんな麻穂ちゃんに、返す言葉がないとでも言う様に柊木くんがきゅっと唇を結ぶ。

そうして困惑の色が浮かんだ目を私から逸らすと眉根を寄せ、肩に乗った麻穂ちゃんの小さな頭をもう一度見下ろした。

「ダメだよ柗木、具合が悪い女の子を一人でタクシーに乗せるなんて冷たいなあ、送ってくのが当たり前だろ？」

そのまま柗木くんが返事に困って黙ってしまつと、それまで近くで見ていた安堂くんが口を挟む。

「家まで送つたらまた来ればいいじゃん。それまで沙優はここで飲んで待つてればいいし」

「な？」と、安堂くんは言いながら私を振り返つたので、「そ、そうだね」と、あまり深く考えもしないで返事をする。

「ほら、沙優もこう言つてるし、そうしなよ」

ニコツと笑いながら言う安堂くんに柗木くんは苦笑いを返すと、今度は私を振り返る。

「ゴメン、直ぐ戻るから」

言つて麻穂ちゃんの肩を軽く叩くと、「送つて行くよ」と、静かに声をかけた。

二人が消えたドアを振り返つていつまでもぼうつと眺めていた。

麻穂ちゃんの家はどこだろう。

どれ位したら戻つて来るのだろうかと思ひながら、何故かそれきり、柗木くんが戻つて来る事はないような気がした　麻穂ちゃんの。

席を立つときに垣間見えた、苦しみを堪えるように伏せられた長い睫毛の奥から私に向けられた視線がとても冷たく感じていた。

あれがもし、演技だとして　そして私が麻穂ちゃんだとしたら。

そう考えると答えは一つしか無いと思つた途端、何故か胸に大きな穴が空いた気がした。

「　じゃあ待つてる間、沙優にはオレの特製カクテル、奢っちゃ

うね」

そうして暫くぼうつとしていると、二人を見送ってそのままカウンターに消えた安堂くんがいつの間にか近くに戻って、にっこりと優しい笑顔を向ける。

「ありがとう」

笑顔を作つて返すと、安堂くんは手にした足の高いグラスをついとテーブルの上に置いた。

「キレイ……」

オレンジから黄色を挟んで淡いブルーへと滲むグラデーションが刻まれたカクテルに顔を近づける。

カクテルはあまり得意ではないのでどんな物なのか分からなかったが、飲むのが勿体ないほど美しい作品だと言う事は分かった。

「そう？そう言われると嬉しいから今日からこのカクテルの名前は”沙優”にしようかな？」

軽くポンポンと投げてる安堂くんの言葉に少し、重たい気持ち救われる気がした。

「さ、奢りだから遠慮なく飲んで。柘木が戻るまでなら何杯でもお代りOKだよ」

柘木くんと同じ、安堂くんとも高校の頃は一度も話をした事が無かった。

だから彼の事は噂でしか知らないけれど、安堂くんはとても気さくで誰からも好かれていたという話を思い出す。

「優しいんだね、安堂くん」

言つと不意に梨花が言った、『誰にでもほほ笑みかける、タラシの安堂くん』と、言う言葉が脳裏に浮かぶ。

けれど、こうして皆に気遣いと笑顔を向ける安堂くんが悪い人には思えない。

「特に女性にはね。オレ、フェミニストだから」

カウンターへと戻りながら、安堂くんが慣れた口調で言う。

これは自覚のあるタラシだ、と思いながらカクテルに恐る恐る口をつけた。

(タラシだと分かっていても、あの笑顔でこんなに親切にされたら好きになっちゃうかもね)

甘いと感じる口当たりを爽やかに払拭する柑橘系の香りが鼻孔をくすぐる。

「美味しい」

思わず小さく呟くと、聞こえる筈もないのにカウンターの中の安堂くんが私を見てニッコリと微笑んだ。

優しい男

「このままじゃ取られちゃうんじゃない？」

気がつくのと、店内の客は私以外に1グループしか残っていないなかった。

サービスで貰ったカクテルを少しずつ舐めるように飲んでいたのに、それも3杯目に入っている。

きつと柗木くんは戻ってこないだろう。

何とはなしにそう思い、けれど同時に、少し遅くなったただけできっと戻って来るとも思っている。

頭の中で諦めのいい自分は今も帰ろうと言い、諦めの悪い自分は今も少し待てと言っている。そうして結局、どちらの意見も飲む事が出来ずにただダラダラとカクテルを舐めている私に、客が引いた事で手が空いた安堂くんが隣に座りながら言った。

「かなり積極的だったもんね、前から？」

麻穂ちゃんの事を言っているのだと分かったけれど、酔って思考回路が鈍ったせいもあるって、直ぐに言葉が出てこなかった。

「前から……なのかな？」

安堂くんの言葉を繰り返しながら考える。

麻穂ちゃんは私よりもずっと前から支社に居たのだから、柗木くんにアプローチしようと思えばもっと前から出来たはずだ。そう考えて思い返せば、私が支社に来た時から、麻穂ちゃんと柗木くんは他の社員よりも少しだけ、仲が良かった気がした。

「それともアレかな、ライバルが出来たことで焦ったのかな？」

言葉を追うように傍らを振り返ると、身体ごとこちらを向いて座る安堂くんの、何かを探るような視線とぶつかる。

「……ライバル？」

顎を引いて少し上目使いに見つめてくる安堂くんを見つめ返しながら、尋ねる。

「ずっと狙ってた獲物を後から来たヤツに横取りされそうになったら、誰だって焦るよな　まあ、恋愛に後先なんて関係ないとオレは思うけど」

軽い口調で安堂くんは言っ、小さく笑う。

もしかして私を慰めてくれているのだろうか。

目の前に差し出された、柔らかい笑顔を見ながらそう思う。

「先に好きだったからって、自分のものって事じゃないでしょ？」

心の深い場所に沁みていくような安堂くんの言葉を聞きながら、ぼんやりと梨花の事を思い出す。

自分のものだと決して思った事は無かったけれど、その通りだと思つと重たい気分がもつと沈み込む気がした。

「　　って言う事で」

いつの間にか視線を落として安堂くんの膝の辺りを眺めていると、その視線を戻すように安堂くんの声がする。

顔をあげて正面の安堂くんを見つめ返す。

目が合うと、安堂くん少しだけ身体を寄せ、顔を近づけて囁いた。

「柊木はあの子に任せて……沙優はオレと付き合おうよ」

明るい声で言われ、一瞬、何の事だか分からずにただ、見つめ返した。

「え、な、なに……??」

突拍子もない言葉に鈍った思考回路がグルグルと暴走するけれど、それはそれで何一つ情報を正常に処理出来ない。

「柊木は優しいからきつとあの子を拒めない。だからオレと付き合おう？」

暴走した拳句に答えを見いだせないままフリーズした思考回路と同じ、固まってしまった私の身体に手を伸ばし、気がつくくと安堂く

んの温かな手が私の手を包んでいた。

「……もう、彼女に怒られるよ？」

軽く窘めるように言って手を引つ込めた。

脳裏にはあの、放課後の教室で安堂くんと抱き合っていた、髪の毛の長い女の子が浮かんでいる。

もう何年も前の話だからその子とは別れてしまったかもしれないけれど、“タラシ”の異名を取った安堂くんなので、彼女が居ない筈がないと思った。

「え？ああ、彼女？居ると言えば居る気もするし、居ないと言えば居ないような……？」

どこまでが冗談で、どこからが本当なのか いや、安堂くんの言葉は最初から最後まで冗談なのかもしれないと、目を逸らして少しだけ考えるような素振りで惚ける安堂くんを見ながら思う。

「そういうの、彼女に失礼だよ」

今度は本当に咎めるように言って、軽く睨みつけた。

安堂くんの認識はその程度だったとしても、相手も同じとは限らない。

だとしたら彼女が可哀そうだと思った。

「 沙優は真面目なんだね」

睨みつける私の視線を柔らかく見つめ返し、ふっと肩で小さく息を吐くと安堂くんは言った。

「だからこそ余計に、柊木は止めた方がいいと思う」

ゆっくりと言い含めるような安堂くんの言葉がいつまでも耳に残っている。

安堂くんが背中を押され、柊木くんを待つことを止めて店を出た。

「昨日はすみませんでした」

背後から差し出されたコーヒーと共に声がして、振り返ると麻穂ちゃんがにっこりとほほ笑んでいる。

昨晚見せた、今にも倒れてしまいそうな顔色とは違い、どこか艶めいているような、生き生きとした表情を浮かべていた。

「あ、ううん、大丈夫だった？」

目が合つて途端にキュツと締め付けられた胸の痛みを悟られないように、精一杯の笑顔を作りながら返す。

安堂くんの店を出てから一睡も出来なかったせいで疲れ切った自分と違い、麻穂ちゃんは普段よりも一層輝いているように見える。

勝負はついたのだ、と思った。

「大丈夫じゃなかったんですけど……柊木さんに優しくして貰ったんで」

言つて白い掌で頬を押さえる麻穂ちゃんに、勝者の余裕が見える。何もかも全て分かつていて私に話しているのだと理解しているからこそ、かき乱される胸の内を悟られなくなつたけれど、奥歯を噛みしめて笑顔を返すのが精一杯で気の効いた言葉など何一つ、出てこなかった。

「……もしかして野々原さん、まだお酒が残ってるんじゃないですか？」

その、精一杯の笑顔が不自然だったのが、麻穂ちゃんが愛らしく首を小さく傾けて言う。

「あ、うん、そうかもしれない、ごめんね」

じつと顔を覗かれると見つめ返す自信がなく、言いながら身体を正面に戻してコーヒーカップを口元に押し付ける。

「大丈夫ですか？」

顔を逸らしてしまえば途端に、背中にかけられる麻穂ちゃんの甘つたるい声が妙に白々しく感じた。

「おはようございます」

問いかけに私が何も返事をしなかったので、麻穂ちゃんが再びコーヒーを配り始める。

デスクを回る麻穂ちゃんから時折、私の様子を窺う様な視線を感じて、動揺を悟られないようにファイルを見ているふりをして顔を俯かせた。

そうして麻穂ちゃんの何度目かの「おはようございます」が済んだ後、少しだけトーンが高めの挨拶が耳に飛び込んでくる。

「今日の寝癖、普段よりもスゴイですよ」

言いながらクスクスと笑う声がある。

柊木くんのデスクに辿り着いた麻穂ちゃんが楽し気に笑う声だった。

「え、ああ、そう？」

決して顔を上げまいと、下げた頭を一層俯かせる。

二人の会話を聞きたくないと思いつつ、けれど必死に耳を凝らしていた。

「だって前髪も跳ねてますよ？朝、鏡を見なかったんですか？」

小さく笑いながら麻穂ちゃんが話している。

何でもないと話だけけれど、柊木くんが何と返すのかと耳を澄ませた、その時だった。

「玄関のトコにも鏡があるのに」

麻穂ちゃんという言葉を受けて、一度だけお邪魔した事がある柊木くんの家を思い出していた。

シンプルな、コルク栓以外は必要最小限な物しか置かれていなかった柊木くんの家の玄関に鏡など無かった事に気が付いた。

「え、ああ、そうだったけ？いや、うん……」

曖昧に返事をする柊木くんの声が聞こえる。

昨晚一睡も出来なかった私が想像した、最悪の展開があったのだ

と気付き、ある程度予想していた筈なのにショックは計りきれない。まさか。

そう、予想はしていてもまさか本当にそんな事になるとは思っていなかった、楽観的な自分を思い知らされた。

バリバリと音を立てて張り裂ける胸を抱え、いたたまれずに何処に行くでも無いのに何処かに逃げたいという思いだけで席を立つ。

天井から煌々と明かりが点いているのにどこか目の前はぼんやりと暗くぼやけ、アルコールは殆ど抜けた筈なのに足元がフラフラとふらつくような気がした。

(取りあえずトイレにでも行って気分を落ち着かせよう)

二人を見ないようにしてそう思い、歩き出した、その時だった。

「あ、それで昨日の飲み代なんですけど！」

少し声を大きくして麻穂ちゃんが言うと、タタッと私の所へ小走りに駆け戻って来る。

「払ってなかったんで私と柗木さんの分、野々原さんにお支払いすればいいですか？」

最後まで残った私が立て替えて支払った事を前提で麻穂ちゃんは言っただけ、本当は次回でいいと安堂くんが言ってくれたので払っていないかった。

けれど、それを説明するだけの気力もなく、麻穂ちゃんの笑顔を見つめ返すのが精一杯で「あ、うん、そうだね」と、曖昧に返す事しか出来なかった。

「それで、いくらですか？」

ぐっと迫る麻穂ちゃんに言われ、安堂くんから貰ったメモにいくらと書いてあったのか、思い出そうとしたけれど全く思い出せなかった。

「あれ、いくらだったっけ……メモに書いてもらったんだけどな……」

ゴソゴソとポケットを探る真似をして、入ってもいないメモ紙を

探す。

安堂くんが書いてくれたメモ紙はロッカーに仕舞ったバックの中だと気付いたけれど、それを説明するのも面倒だった。

「……なら思い出したらでいいんで、柊木さんに言っておいて下さい」

「私、そうしたら柊木さんにお金を渡しておくので」と、麻穂ちゃんは続けると私の視線を誘う様に柊木くんを振り返る。

「いいですよ、柊木さん？」

麻穂ちゃんに言われ、柊木くんが顔を上げる。

名前を呼ばれて反射的に振り返った柊木くんと視線がぶつかる。

目が合って、柊木くんは一瞬目を大きく見開くと直ぐに視線を俯かせた。

温かな掌

その日は終日会議という事もあり、柗木くんとは特に何の話をする事無く一日を過ごした。

かえって良かったと胸を撫で下ろしつつ、けれどだからと言って二人の事を忘れて会議に集中できる筈も無かった。

黙って資料を眺めているとその後の二人がどうしたのか、昨晚散々考えたくせにまだ、考えてしまう。

そうして新たに得た”玄関の鏡”というワードを何度も引つ張り出しては、昨晚のように否定できない事態になったのだと思い知らされる。

玄関の鏡は麻穂ちゃんの家のもので。

朝、それを見なかったのかという問いかけは、柗木くんが泊ったのだという事実を私に突き付ける。

単に”泊った”という事だけを考えれば私にも同じ事があっただれど、相手が麻穂ちゃんという部分が大きく違う。

私とは何も無くても、積極的な麻穂ちゃんが相手なら何も無かったと、思いたくても思えなかった。

黙っていたってモテそうな、可愛い顔をしているその反面、麻穂ちゃんは意外と強かで強い女だと思う。

ライバルが居ることで逆に火が点いたようだ。

そう思い至れば、そもそも、麻穂ちゃんが酔ったふりなどして柗木くんに迫らなくても、私は勝手に自滅していたかもしれない、と思う。

麻穂ちゃんが柗木くんを好きだと気付いた時点で。

今までの私なら柗木くんを即、諦めてしまうのだから……。

「で？柀木からは弁解とか、何も無かったの？」
ワインを注いだグラスをすつと私の前に差し出し、安堂くんが少しだけ首を傾げて尋ねる。

ダークブラウンのテーブルに置かれたグラスが控えめな間接照明の光を受けて小さく瞬いた。

「うん……」

曖昧に返事を濁しながらグラスに手を伸ばす。

ひんやりと冷たいワインを口に含み、ぼんやりと考えた。

定時を見計らって早々に帰ろうとした私を追うように、エレベーターからエントランスへ飛び出してきた柀木くんの目。

話など何も聞きたくない、逃げ出したかった私の足は柀木くんの真剣な目に強く射抜かれて動かなくなってしまった。

「昨日はごめんっ」

息を切らせながら駆け寄った柀木くんはそう言って頭を下げた。

ううん。

そう言わなければいけないのに、身体が震えて何も言えない私に、
「戻るって言ったのに……ずっと待ってた？」

と、柀木くんは申し訳なさそうに尋ねた。

その、必死に謝ってくれる様子に胸が少し痛くなり、ううん、と小さく頭を振ると、

「帰ったから大丈夫、あの後すぐ、帰ったから」

と、精一杯笑顔を作って返事をした。

「……そっか」

すると、彼を安心させようとしてそう言ったのに、ホッとするどころか何故か少し、残念そうに肩を落として、

「待ってたわけじゃないなら……よかった」

と、呟いた。

「じゃ」

そう、小さく言つて足を踏み出した。

あ、うん、お疲れさま。

背中に柗木くんの声が小さく届く。

私は大丈夫だし、麻穂ちゃんと柗木くんがあの後どうなったかなんて気にしてないよ。

心の中で何度も何度もそう思い、けれど柗木くんに直接言つ勇氣は無かった。

「本当に一步の差だったんだけどね」

帰りに飲み代を払いに安堂くんの店に寄ろうと思つていたのに、柗木くん呼びとめられた事で動揺して一旦家に戻つてしまった。

家に戻つてから気がついて安堂くんの店に来ただけけれど、入れ違いに帰つた柗木くんが既に代金を全額支払つた後らしかつた。

「まあ、無駄足になつてもアレだから飲んできなよ。沙優一人なら奢るし」

そう言つて差し出されたワインのグラスを眺める。

昨日の今日で飲む気はあまりしなかつたけれど、注がれてしまつたワインを無駄にするのも悪いと思つて手に取つた。

「しかし、可愛い顔してやっぱり策士だったか」

その、赤いワインを口に含むと、安堂くんが関心したように呟く。開店したばかりの店内はアルバイトの男の子が厨房に二人居るだけで、フロアには私と安堂くんだけだった。

「オレもね、一応聞いたんだ、昨日は戻つてこなかつたけどどうしたんだって」

カウンターの上に並べるグラスを一つ一つ布巾で磨きながら、安堂くんが言つた。

そんな安堂くんの手慣れた手付きをぼうつと眺めながら、耳を傾けた。

「そしたら『別に』とか、『何も』とか。まあ、女の子とどうなったのかって話をペラペラ話すヤツはキライだけど、何か隠してるっていうか齒切れが悪くてさ」

コト、とグラスがカウンターのの上に置かれ、磨く手を一旦止めて、安堂くんが私を振り返る。

「あの子とくっ付いたならくっ付いたって言うてくれればオレは沙優に迫れるのに」
な？

安堂くんは言っつて、私の反応を見るようにじっと目を凝らした。

「もう、そういう冗談は要らないよ」

薄いブラウンの瞳を見つめ返すと、急激に安堂くんの心の中に引きこまれてしまう気がした。

慌てて目を逸らし、口早に言っつてワインを飲み込む。

「そういうの、彼女に失礼だよって言っつてるでしょ」

続けてぐいぐいっつとワインを煽り、席を立つ。

昨日あまり眠れなかったのもあってアルコールが回るのが早く、たった一杯なのに随分飲んだ後のように頭がふらふらとふらつく気がする。

早く帰っつて寝てしまおう。

そう思っつてバックを手に取っつた　けれど。

「　彼女が居なかつたらいいの？」

すると、空いたグラスを引き取りながら、安堂くんがぼつり、と
眩く。

何を言い出すのだろうと振り返ると、安堂くんはグラスを見つめたまま続ける。

「彼女なんて居ないよ」

引き取っつたグラスにワインを注ぎ、安堂くんは再び私に差し出して、言っつ。

「　注いじゃったからもう一杯だけ、飲んでっつてよ」

そう言っつて顔を上げた安堂くんと視線がぶつかる。

いつになく真剣な表情で正面から見つめられ、思わず胸が大きく跳ね上がって気がつくのと今立っただばかりのイスにもう一度腰を下していた。

「……酔いが回るのが早いから、もうこれ飲んだら帰るね？」

ドキドキと高鳴る胸を必死に押さえ込もうとしたけれど、高校の時の、目が合ってほほ笑んでくれた安堂くんにときめいていた自分が不意に蘇って拍車をかける。

真っ直ぐに見つめてくる安堂くんから目を逸らして誤魔化すようにグラスを手にとると、一気に煽ってその場所から逃げ出そうとした。その時。

「……！？」

再び席を立つた私の手を、カウンターの向こうから安堂くんが掴んで引きとめた。

ぎゅっと掴まれた手を凝視する。

安堂くんの細くて長い指が握られて、その中に私の手がすっぽりと収まっていた。

「オレ、沙優にこうやって触ってみたいとずっと思ってた」

安堂くんは言いながら、握る手に力を込める。

「高校の時、廊下を通る沙優を見かける度に一生懸命笑いかけたのに全然素っ気なくてさ」

懐かしむように目を細め、見つめてくる安堂くんの顔に高校の時にいつも見ていたあの笑顔が浮かんだけれど、と同時に再会した時、私の名前さえ知らなかった事を不意に思い出す。

「でも、安堂くん、私の名前を知らなかったんじゃない……」

疑問をそのまま口にする。

「名前は知らなかったけど……何かダメかな？」

と、安堂くんは何でも無いというようにさらりと言って除ける。

計算なのか、無垢なのか。

判断が難しい安堂くんの笑顔を見つめ返しながら、その柔らかな眼差しにただ単に純粹なだけなのかもしれないと、思い始めた時だ

った。

矢庭に、あまり思い出したくない光景がオーバーラップして優しい笑顔を掻き消す。

「でも私見たよ、女の子と抱き合ってる安堂くんのこと」
きつと安堂くんは私をからかっているに違いない。

そう思いながらおずおずと口を開くと、安堂くんは「そうか」と少し掠れた声で言い、笑う。

「モテたから女の子には不自由しなかったでしょ？」
意地悪になっってしまうだろうかと思いつながら口にする、安堂くんは笑いながら小さく眉根を寄せる。

そうしてそのまま私を見つめ返すと、持ち上げられた口角を真横に引いていつも浮かべている笑顔を消し去った。

「人間は二人で一人つて話、聞いた事無い？」

急に真面目な顔で言う安堂くんを、ただ黙って見つめ返す。

「オレ、ずっと探してるんだ、ぴったりと繋がる、オレのもう片方」
突拍子もない話に理解が追いつかないでいる私に、安堂くんは真剣な顔で語りかける。

「中々見つからないから探し続けるしか無くて……それをタラシつて言うのなら仕方ない、かな」

言って自嘲気味に笑う安堂くんが、私の手をそつと離す。

「沙優に笑いかけながら、もしかしたらこの子がつて思ってた」

「でも、それは私だけじゃ無い、何人も女の子にそう思ってたんでしょ？」

言い返すと、安堂くんは痛いところを突かれたとばかり、目を大きく見開いて表情を固くする。

「そう言われちゃうと辛いけど……」

そう言いかけて、安堂くんは一旦言葉を切ると頬にかかる柔らかそうな髪を後ろへさらりと掻き上げる。

「……でも、今度こそ終わりになるかもしれない」

そのまま邪魔な髪を押さえてもう一方の手を伸ばし、安堂くんの温かな掌が私に頬に触れる。

すっかり回ってしまったアルコールのせいなのか、何がこれから起きるのか、分かっているのに身体は全く反応を示さない。

カウンタにーの上に身を乗り出し、目の前に迫る安堂くんの顔が少しだけ、右に傾く。

あっと思わず出そうになった声は唇から零れる事無く安堂くんに飲み込まれた。

キスの温度

『オレと付き合おう?』

そつと触れただけの、柔らかくて少しひんやりとした唇が離されると、安堂くんは掠れた声で囁いた。

驚きに思わず逃げ出そうとした私の手を、強く掴んで離してくれなかった。

『柊木は諦めた方がいいと思う』

その一言を言うために。

低い声で諭すように言う安堂くんの瞳に、動揺を隠しきれない私
が映っていた。

何も言い返せないまま、安堂くんの手を振り切って家に走って帰った。

早鐘を打つ心臓は走ってきたせいなのか、それとも安堂くんのせいなのか。

家に戻った事で急にガクガクと震えだした足を引き摺って崩れるようにベットに倒れ込むと、そのままズルズルと泥のように眠り気がつくと朝になっていた。

「おはよう」

寝過ぎたせいでぼうつと霞む頭を抱えたままデスクに座ると、斜め横の席に座る主任が挨拶をしながら緑色のファイルをぼん、と投げってくる。

見覚えのあるファイルを手に取り、主任の少々浮腫んだ顔を振り返る。

(このファイルは確か……)

主任の顔を見ながら手にしたファイルをパラパラと開くと、説明

するように主任が口を開いた。

「昨日の会議でも出た話だけど、本社でトラブルがあったの、分か
ってるよな？」

はい、と頷きながら、先週、主任が急に呼ばれて本社へ行ってい
た事を思い出す。

柘木さんと麻穂ちゃんとの事で昨日の会議はあまり集中して聞い
ていなかったけれど、とても深刻な事態だという話だった。

「もう3年も前に仕入れを約束してたワインにどうやら不純物が混
ざっているらしくて商品にならないって話」

確認するように言う主任に、何度も頷き返す。

そのワインは有名な銘柄ながら日本にはまだ入荷した事の無いワ
インで、本社のにも大いに期待していたワインだった。

「それで急ぎよ、他のワインを探すって話でしたよね？」

言って返すと、主任はそうだと頷いて自分のデスクの上に広げて
おいた資料をす、とこちらに差し出す。

「大々的に売り込んだ商品の代替え品だから早々下手な物じゃダメ
だろ？」

難しい顔をして主任が言うのを聞きながら、『回覧』と書かれた
資料に目を通す。

支社長以下、主任、営業部社員たちの認印が押された資料に私も
ハンコを捺しながら、新たなワインを急ぎよ探してくる事になった
海外出張メンバーの中に柘木くんの名前が入っている事に気がつい
た。

「あ……」

思わず小さく声に出して目を止めると、主任がすかさず説明をす
るように口を開く。

「ソムリエの資格を持つてるヤツらから選抜されたメンバーに柘木
が入ってるから、明日からの営業は野々原一人で回って貰う事にな
ると思うんだわ」

（ああ、それで……）

デスクの上に置いたファイルに再び視線を落とす。

緑色の見覚えのあるファイルは柘木くんが営業の時に持ち歩いてきたファイルだと気がついた。

「まあ、こつちのプロジェクトは残すところあと半月も無いし、大丈夫だよな？」

主任に言われ、柘木くと営業に回った一か月と少しの日々を思い出す。

とても長かったようで、けれどあつと言う間に過ぎたような気がした。

「取りあえず今日一緒に回って、最終確認だけしといて」

はい、と主任に返事をして、もう一度資料に目を通した。

新しいワインを探すのに予定された期間は約半月。

柘木くんが戻って来る頃には私はまた主任と共に本社へ戻っている頃だと思い至り、何故か少しだけホッとしている自分が居た。

「飲み代、全部払って貰ったみたいでゴメンね」

本当ならあの日の話は蒸し返したくなかったけれど、お金が絡む事だけは黙っておくわけにはいかないと、営業に出て直ぐに柘木くんに言った。

「あ、いや、迷惑をかけたのはオレなんだから気にしないで」

柘木くんも同じ気持ちなのか、それだけ言つと黙り込んでしまった。

矢張り、予想していた通り気まずい空気が漂う中、それでも何とか気を取り直して柘木くんと一緒という意味では最後の営業を回る。再会してから色々あったような気もするし、それでいて何も無かったような気もする。

もし、あの日麻穂ちゃんが来なくて二人きりで飲んでいたら、色々あったね”と思えたかもしれない。

けれど、今となつては全てが辛い思い出に思えて何も無かつた事

にしたい気持ちの方が強い気がした。

以前のように会話は無いけれどそれから夕方まで営業を普段通りに卒なく回り、最後に二人で叱られた、元々は主任が担当していた店に顔を出した。

店主は相変わらず無愛想だったけれど、何度か顔を出していた事もあってか前よりも少しだけ、言葉を返してくれるようになった気がした。

柘木くんは海外から戻ったら直ぐにまた顔を出しますと言い、私は柘木くんが不在の間は何度か一人で営業に寄ろうと思って店を出た。

「これで大体終わりかな？」

支社近くまで戻ると、仕事が一段落した事で顔を綻ばせながら柘木くんが振り返る。

気まずかった空気はまだ残っていたけれど、力を抜いた柘木くんが少しだけ白い歯を覗かせていつもの笑顔を浮かべたので、思わずどきり、と胸が高鳴る。

「う、うん」

ドキドキを悟られないように頷き、視線を逸らす。

あの笑顔には結局最後まで慣れる事は無かったと思いつつながら顔ごと柘木くんとは逆の方向を向くと、ふと、隣を歩いていた柘木くんが足を止めたことに気がついた。

「あのさ」

言われて振り返ると、数歩離れた所に柘木くんが立っており、少し吊り上がった目を更に吊り上げたような真剣な目でこちらを見ている。

「出張に出て戻ったら野々原さんはもう居ないんだよね？」

慎重に言葉を選ぶように柘木くんは言い、私の返事を待たずに続

ける。

「だからもう、後先考えないで言おうと思うんだ」

少し思いつめたような目をした柀木くんはそこで一旦言葉を切ると、一歩一歩ゆっくりと足を踏み出して私の傍まで歩み寄る。

(何だろう?)

何処か哀しげな柀木くんの目が、その奥底に強い意思を秘めて私の目を貫いていた。

「言おうか言わないか、あれからずっと考えてたんだけど」

”あれから”がいつなのか、考えようとしたけれど何も考えられないでいる。

柀木くんの目を見つめ返す事だけで精一杯で、頭の中はほぼ真っ白になっていた。

「野々原さんがどう思ってるとか、そういうの、考えないで言う事にする」

私の正面で足を止め、柀木くんは言っすぎてずっと唇を噛みしめる。 ”言う”と言った癖に固く唇を結び、目で何かを訴えるように見つめてくる柀木くんから目を逸らす事が出来ずに立ち尽くす。

まるでそこだけ時間が止まったような、息さえ止まってしまったような気がした。

「あの日、確かに朝まで麻穂ちゃんのトコに居たけど何も無かった」

少しの間があつてから、柀木くんが意を決したように口を開いて言った。

「具合が悪いから帰らないでって言われて手を離してもらえなくてどうしようかと思ううちにアルコールが入ってた事もあってか眠ってて……気がついたら朝で」

一言一言を噛みしめながら、柀木くんが話す。

「野々原さんに待っててと言ったのに戻れなかった事や、麻穂ちゃんのとこに何も無いとはいえ泊ってしまった事になるのかな、とか思っただけに焦った。しかも麻穂ちゃんはこの事を皆に自慢しちゃ

おうかな、とか言い出したんで流石に不味いから止めてくれって口止めたのに、朝、野々原さんに何か話してたよね？」

柊木くんの言葉を聞きながらあの、自信に満ちた笑顔を浮かべた麻穂ちゃんの愛らしい顔が脳裏に浮かぶ。

柊木くんが一晩傍に居てくれた事を嬉しそうに話す麻穂ちゃんを思い出していた。

「それはでも、麻穂ちゃんが柊木くんの事を好きだから黙ってられなかったってだけなんじゃ……好きな人に優しくしてもらえたら凄く嬉しいのは当然だと思っし……」

口を開くと何故か少しだけ震えてしまう声で言いかけると、

「……でも、オレの気持ちは？」

と、私の言葉を遮るように柊木くんが言う。

「オレは自ら進んで泊った覚えはないし、特別優しくしたつもりもないよ。オレは……」

そう言っただけ柊木くんはず、と更に足を踏み出して歩み寄ると、私の瞳の中をぐつと見据える。

心臓が高鳴り、緊張に身体が強張って全く動かない。

柊木くんは何を言い出すつもりだろう？

そう思つと益々心臓が大きく高鳴って胸が苦しくなった　けれど。

「あ、柊木さん！」

その緊張は、遠くから投げられた声にかき消される。

反射的に声のした方を振り返ると、エントランスから外へと麻穂ちゃんが駆けてくる所だった。

「窓から柊木さんの姿が見えたからつい、呼びにきちゃいました！」

ヒールの高いパンプスで危なげに走りながら、麻穂ちゃんが呼びかける。

「な、なに？」

どんな緊急事態なのかと思っただけ柊木くんが尋ねると、麻穂ちゃんとは私と柊木くんとの間に滑り込んで彼の正面で立ち止まる。

「海外出張の件でこれから本社に来るようになって電話があっただんで
す。だから早く伝えた方がいいと思って」

そう言っつて柊木くんの腕を掴み、麻穂ちゃんは私を全く振り返る
事無くビルの中へ戻つていく。

突然の急展開に戸惑いつつ、一人、取り残された私は暫くそのま
ま茫然と立ち尽くしながら、二人の間に何も無かったという事実を
少しずつ、理解していった。

Don't Happen Twice

「沙優！」

不意に名前を呼ばれて声の主を探す。

振り返りながら聞き覚えのあるその、少し甘い深みを持った低い声が安堂くんのものだと気付くと同時に高いビルに寄り添うように立つ、彼を見つけたのだった。

「安堂くん……」

駆け寄って来た、口尻を引き上げてほほ笑む彼と対照的に、不満そうに口を真一文字に結んだ私が向かい合う。

「どうした？元氣無いみたいだけど？」

この所のトラブル続きで疲れ切った私は彼とこうして会うのがあの、不意打ちのようにされたキス以来だと分かっているのに胸は深い淀みの中に沈んだように何も感じない。

驚いて逃げ出した自分が遠い昔のように思える。

つい、1週間ほどしか経っていないのに……。

「って言うか丁度良かった。一昨日頼んだ初注文のワイン、前の説明だと在庫があるから直ぐに納品できるって言ったのに全然届かないからどうしたのか聞こうと思ってたんだ」

言いながら小さく首を傾げた安堂くんを凝視する。

この数日で何度も聞いた台詞だった。

『あれ、野々原なんで会議に出なかったんだ？机の上に会議をするから戻り次第会議室に来てってメモを置いておいただろう？』

『急ぎで欲しいからって電話でもちゃんと言ったのに納品が無い所か連絡の一つも無いってどういう事なわけ？』

『何度も電話くれて言うてるのにムシなんだからもういいよ、う』

ちみたいな小さい店をバカにしてるんだろ、どうせ』

どの店の電話も主任のメモも、私にはどれも伝わっていなかった。最初こそ何かの連絡ミスか勘違いがあったのかもしれない、くらいにしか思わなかったが、それが1週間のうちに3度も重なって、ミスや勘違いでは済まされない、誰かの悪意がそこにあるような気がしてならなかった。もちろん。それが誰なのか、私の中では既に決まっていた。

「あれ、ほら、柊木の彼女。少し舌つ足らずの甘えた声でしゃべる、あの子が電話に出たと思うんだけど?」

安堂くんの言葉を聞きながら、ああ、やっぱりな、と思う。

主任にはそれ程怒らなかつたけれど顧客からは散々叱られて”何で私が”と、当初は誰かのミスだと思ったのでその誰かを心の中で呪ったりもしたけれど、相手が麻穂ちゃんだと分かれると不思議とそれ程怒る気にはならなかつた。

当然、かな。

そんな、諦めにも似た気持ちがあつた。

そんな事をしながら面と向かえば前と同じ笑顔で挨拶をしてくれるけど、麻穂ちゃんならやりそうだと何故か思っている。

強かで強い女だから。

酔つたふりで彼を連れ帰って朝まで離さないような女だから。

帰社を待ち伏せして割つて入るような女だから。

面と向かつて私が柊木くんを好きだと言つた覚えは無いけれど、勝手にライバルだと認識しているらしき私にどんな手を使ったって可笑しくはない、と思つた。

「って、柊木とあの子はそういう関係じゃ無いって怒らないんだね。もしかしてもしかしちやつたの、やっぱり?」

暫く黙って突っ立っていた私の顔を覗きこみながら、安堂くんが尋ねる。

うーん。

考える素振りです返事を濁していると、安堂くんはすっと顔を離して、

「な？だから柘木は止めた方がいいって言っただろ？」
と、全てを分かっているように言い切った。

それから何故か誘われるがまま、残業もせずに会社を出た私は安堂くんの店に入った。

トラブルの処理で忙しく、早く家に帰りたかったのだけれど、安堂くんはニツコリとほほ笑まれると少しだけ気持ちが慰められる気がした。

彼が同じ職場の人間じゃ無いから、なのかもしれない。

気分が切り替わって楽になるのかな、等と思いつながら、案内されるがままにまだ開店の準備をしている店内のカウンターに腰を下ろす。

この前座った席と同じだと気付いて少し胸がどきり、と跳ねたが、キスしたこと等無かったような様子の安堂くんを前に、戸惑ったり座るのを拒むのも変だと思って黙って座った。

「あ、ワインの事はゴメンね。在庫はあるから明日にでも納品に来るね」

アルコールを飲む気にはなれなかったので断ると、安堂くんはコーヒーを淹れてくれた。

ほっとする香りを吸い込み、少し苦いコーヒーを一口飲んでから言うと、

「うん、お願い。って言うか、あんな顔してやるね、やっぱり。でも、仕事に私情を挟んじゃダメだよ」

と、道すがら話した私の短い説明で何もかもわかったように安堂く

んは言い、自分もマグカップでコーヒーを啜る。

「で、柊木は何か言わないの？ 庇ったりとか、注意したり、とか？」
安堂くんの質問に、彼が今海外に出張している事を説明する。

「まあ、居ても居なくても柊木はきつと彼女に強く言う事が出来ないと思っけどね」

すると、安堂くんはそう言っただけで呆れたようにふ、と鼻で息を吐いた。

「柊木は優しいから苦労するよ？」

そして、何かを思案するように薄暗い天井を見上げた後、静かに口を開く。

「何で安堂くんはそんなに柊木くんを止めろって言うの？ 優しいならいいじゃない、女の子は優しい男が好きなんだから」

前々からの安堂くんの言動がずっと引つ掛かっていたのもあつて思わず言い返すと、

「優しいってのは本当にいい事なのかな？」

と、独り言のように呟いて手にしたマグカップをカウンターの上面にそっと置いた。

「オレの親父も凄く優しい男で、母親は結婚の切欠を”誰よりも優しいから”なんて言っただよ」

そして静かに語り出す安堂くんは、正面に座る私では無くどこか遠い所を見つめるような目をしている。

「でもそれは、母親や家族にだけじゃない、誰にでも優しい男だったんだ」

いつもほほ笑んでいるようなダークブラウンの瞳が愁いを湛えているかの様に揺れた。

「親父はこの界隈に複数の飲食店を持ってね。ある日、アルバイトに雇った女の子に泣き付かれて慰めてるうちにそういう関係になったとかで、母親と夜中に大喧嘩しているのを偶然見たんだ」

オレはまだ、小学生でね。

そう付け加えた安堂くんが、ポケットから取り出した煙草に火を点ける。

白い煙を長く吐き出しながら、ぼんやりと霞む煙の向こう側に見える何かをじつと見つめていた。

「泣いて相談してくる女の子を放っておけないっていう父親の台詞を、それから何度も聞いたな。母親はその度に甲高い声で泣き喚いて怖かった。優しくかった母親がまるで鬼みたいに怒鳴り散らして、そのうち、オレが見ているのもお構いなしに喧嘩するようになった」
安堂くんの話を聞きながら、そう言えば私の両親もまだ私が小さい頃そういう喧嘩をしていたような気がしたが、彼のように頻繁ではなく、多分、一回か二回という程度だったと思う。

「それが何回か続いて、母親はもう父親が信じられないって言うってでも父親は離婚を許さなくて」

私が中学に入ったばかりの頃、夜中に聞き慣れない悲鳴のような声が出て目が覚めた。料理が自慢の優しい母は泣いていて、業務用機材の営業で家族を養っている父は黙って責められていた。何があったのか、よく聞こえなかったけれど父が悪いと言う事だけ、分かった。これから我が家はどうなってしまうのだろうとドキドキして眠れなくなってしまうたけれど、朝起きると二人とも何も無かったかのように普段通りにしていて、ほっと胸を撫で下ろしたのを覚えている。

「美人で自慢だった母親はゲツソリとやつれて見ていられなかった」
けれど、安堂くんの家はすんなりと収まらなかったらしかった。

煙草を灰皿に押し付け、安堂くんがコーヒーを喉に流し込む。

二本目の煙草に火を付けると、安堂くんは大きく胸に吸い込んだ。
「そんな疲れ切っていた日々を送っていたある日、突然母親が元気を取り戻したんだ」

それまで遠くを見ていた安堂くんが言い、こちらを振り返って薄くほほ笑む。

力無くほほ笑む安堂くんは、少し色素の薄い白い肌も手伝ってか
儂げに見えた。

「いつも泣いて怒ってばかりの母親に父親が新しい店を任せた、そ
れが切欠だった」

ドアが開く音がして、アルバイトの男の子がスーパーの袋を下げ
て店内へ入って来る。

おはよう。

安堂くんが声をかけると、男の子は「おはようございます」と頭
を下げて厨房へと消えていった。

その子が奥へと消えたのを確認して、安堂くんが再び口を開く。
「父親は母親に店を任せたことで気分転換になったんだと思って喜
んでいたけど……元気になった母親の顔を見に学校帰りに店に寄る
度に、いつも同じ男の人が母親と楽しそうに話をしている事に気付
いたんだ」

言っで見つめてくる安堂くんが、ほほ笑んでいる筈なのに少しだ
け、泣いているように見えた。

複雑な思いが入り混じっているのか、安堂くんは時折、話す言葉
を選ぶように煙草を吸っては長々と煙を吐き出した。

「出入りの業者の営業マンで、オレにも気さくに声をかけてくれる、
いい人だった。母親はその人を昔好きだった人なんだと、オレに嬉
しそうに教えてくれたよ。聞かされたオレの胸の中は複雑だったけ
どね」

そう言っって自嘲気味な笑顔を安堂くんは浮かべ、肩でため息をひ
とつ、つく。

安堂くんの様子に、その先に何か悪い事が待っていていそうな気がし
て自ずと生唾を飲み込んだ。

「結ばれる事は無かったけど彼と一緒に居るとまるで自分が完全に
一人になる様な充実感に満たされるって言ってた。日増しに元気に
なっっていく母親を見るのは嬉しかったけど、でもその人にも家族
があっって」

やはり。

そう思いながら、そう言ったとき黙りこんでしまった安堂くんを見つめる。

言い難い話ならムリにしなくてもいいのに。

そう思ったけれど、安堂くんが話をしたいのかもしれない、と思つて黙つて耳を傾け続けた。

「今だけでいい、束の間でもいいから傍に居て欲しいと言つて泣いて縋る母親に、その人は自分には家族が居るからと拒んだらしい」

彼の母は力なくそう言つて、新しい店のオープンの前日、一人で店で泣いていた、と彼は続けた。

けれど、泣きながらも彼の母は父親の浮気に取り乱したような事は無く、静かに一頻り泣いた後、晴れ晴れとした顔で笑つたと安堂くんは言つた。

「一見冷たいようでも家族と、そして自分を大切に思つてくれた結果なんだと、母親は言つてた」

もし、彼が母親を受け入れていたら、結果、散々自分を苦しめた父親と同じ事になってしまうと言う事に、彼の母は気付いたんだと安堂くんは言つた。

「……柘木を見ると、何だか父親を思い出すんだ」

母親を裏切り続けた父親は一見、誠実で真面目な優しい男だったと安堂くんは言つた。

「現に沙優は苦しんでるじゃないか」

「でも、それは柘木くんじゃなくて麻穂ちゃんが嫌がらせをしてるからで……」

急に鋭い視線を投げってくる安堂くんから思わず目を逸らして顔を俯かせた。

彼の父親の話と柘木くんを同じに考えるのは少し違つ気がしたけれど、全く違つたと反論する自信もない。

「柘木が居たら彼女を止める事が出来るの？」

それは……。

安堂くんの問いかけに口籠る。

柀木くんが居たら麻穂ちゃんにちゃんと注意してくれるだろうか。考えたけれど答えは分からなかった。

「そうやってずっとあの子に嫌がらせを続けさせていいの？」

「そりゃあいいわけ無いけど……」

「止めて」と、言ったらどんな事を言われるか分からない。

今までは表面上笑っていたけれど、それこそあからさまに嫌がらせをされるかもしれない、と思った。

「でもあと、一週間と少しで本社に私、戻るから……」

それまでの我慢だと思い、顔を上げるとじつとこちらに目を凝らしていた安堂くんの視線とぶつかる。

一瞬、苛立つような色を見せた安堂くんが、肩で大きくため息をつくとゆっくりと口を開いた。

「そこまでされてもまだ我慢して何とか上手くやっていきたいって思う理由って何？」

鋭い指摘に返す言葉が浮かばなかった。

好きな人が出来ても誰かとトラブルになる位なら諦めてしまおう。そうやってずっと続けてきたクセだったけれど、安堂くんに言われるまでもなく、そんな自分が意気地無しで情けないのは重々承知していた。

「柀木の事が好きじゃ無いならそう言ってやれば簡単に収まるでしょ けど」

窺うように見据えてくる安堂くんを精一杯見つめ返す。

「今までも言わなかったのは少なくとも柀木が嫌いじゃないから、だよな？」

思わず涙が零れてしまいそうになるのをぐっと堪える。

自分が情けなく思えて今にも泣いてしまいそうだった。

「だったら、はっきり言うべきだと思うんだけど」

それで嫌がらせがもっとエスカレートしたら戦えばいいじゃん。

何でもない口調で安堂くんは言い、ふっと力を抜いて柔らかくほほ笑む。

「沙優にはいつも笑顔で居て欲しいから、耐え切れなくなったらおいで。オレはいつでもウエルカムだから」

手の中で冷え切ったカップを口元に運ぶと、微かなコーヒーの香りが鼻腔を撩る。

温かいの、淹れなおそうか？

同じく冷えたコーヒーを啜った安堂くんは頭を振ると、精一杯の笑顔を作ってお礼を言い、店を後にした。

その先にあるもの

『そこまでされてもまだ我慢して何とか上手くやっていきたいって思う理由って何?』

席に着くと、既にデスクの上にコーヒーのカップが置かれていた。麻穂ちゃんの姿は見えず、いつの間に配り終えたのだろうと思いつつ、安堂くんの言葉を耳に再生する。

すると、安堂くんの言葉を追うように礼奈の言葉が不意に蘇った。

『……まさか、また誰かに遠慮してたりするんじゃないよね?』

そもそも。

思いながらカップを手に取り、じわじわと内側から沁み出る熱を掌に感じる。

遠慮するも何も、そもそも、私は柊木くんを好きなのだろうかと考え、熱いコーヒーを味わうように薄く瞼を閉じた。

高校の時の想いは確かに”片思い”というものなのだと思うけれど、再会してから柊木くんに対する想いはどうなのか。

思わぬ再会に浮足立ち、彼が私を知っていて、更には私に全く関心が無いわけではないかもしれない、と期待する気持ちから落ち付かない気分させられているのは確かだけれど。

『柊木の事が好きじゃ無いならそう言ってやれば簡単に収まるでしょ?』

安堂くんの鋭い指摘に返す言葉が見つからなかった。

でも、嫌いじゃないから好き、という選択肢しか残っていないわけじゃない。

好き、の度合いも色々あって、今、自分がどのラインに居るのか、考えれば考えるだけ、深みに嵌って益々分からなくなってしまう。

コーヒーを半分ほど飲み終えてカップを机の上に置き、主の居ない柊木くんのデスクを目だけで窺う。

少し寂しい斜め前のデスクをぼんやりと眺めながら、柊木くんの笑顔が見たいと思う気持ちだけは確実だと思った。

「あれ、この回覧、野々原のハンコが無いけど見てないのか？」
そうしてぼうっと考えていた時、不意に主任の声がして振り向くと、黄色いバインダーを手にした主任がこちらを見ている。

ぼん、と投げられたバインダーに挟まれた資料には『回覧』の横に赤いスタンプで『至急』と押しであった。

「まあ、今日の午後の会議についてだから間に合ったけど、回した人はちゃんとハンコを確認して回せよ」

皆に聞こえるように主任は言って、資料に目を通せと言うように私に顎で指図する。

初めて見た資料には今日の午後、営業会議が急きよ開かれる旨が書かれていた。

「あれ、オレが最後に見て野々原さんの机の上に昨日の午後には置いておいたんだけどなあ」

隣の席で橋本さんが言い、不思議そうに眉根を寄せている。
ああ、またか。

この回覧を読まずに営業に出かけていたら、きつとまた会議をまた無断欠席する事になっていただろうと安易に想像がついた。

ハンコを押して主任にバインダーを戻し、まだコーヒーが残っているカップを持って席を立った。

恋愛はどうにしろ、仕事に支障を来たすのは矢張り、良くない事だと思った。
席を立て給湯室に向かいながら、麻穂ちゃんになんて言おうかと考える。

思いの外落ち付いて歩きながら、狭い給湯室の中に足を踏み入れた。

「ご馳走さま」

顔を俯かせて洗い物をしていた麻穂ちゃんの横に立ち、声をかける。

意を決して話をするのだから上手い事はぐらかされても面倒だと思いい、どう切り出したら自分の仕業だと認めるだろうと考えた。

「あの、私の机の上にあったメモとか回覧とかがちやんと私に届かないんだけど」

何か知らない？

言葉の途中で顔を上げた麻穂ちゃんと目が合って、思わず語尾が小さくなってしまふ。

麻穂ちゃんに何と言われようとちゃんと仕事がしたいから話をしよう。

歩きながらそう腹をくくった癖に目が合っただけで途端に尻込みし出した自分を情けなく思うのとは逆に、麻穂ちゃんは全くの無表情でいつもの笑顔を消し去っている。

少し眦の下がった愛らしい目は冷たく細まり、顎をぐつと持ち上げて私を見下すような目をしている。

ああ、待っていたんだ、と。

その、直ぐに反論して来ない、慌てる素振りを全く見せない彼女を前にそう悟った。

「野々原さんは柗木さんが好きなんですか？」

暫し私をじつと睨むように見つめた後、麻穂ちゃんが普段の甘い声を低く抑えて尋ねた。

「当然の質問が、直球で投げつけられる。

どう答えたらいいのだろう。

勝負を待ちかねていた彼女のシュミレーションの中で私は何と答えたのかと、そんな余計な事を一瞬、考えたりもする。

好き、と言うのは簡単だけれど、どの程度の好きなのか、自分でも答えが出ていないのに軽々しく言ってしまうっていいのだろうか、と思い始めると中々返事が出来なかった。

「……私は好き、です」

すると、答えに詰まった私を睨んでいた麻穂ちゃんが、小さく、呟くように言う。

今更ながらの宣戦布告かと思ったけれど、麻穂ちゃんは長い睫毛を伏せて床を見つめるように顔を俯かせ、手にした布巾をぎゅっと握りしめていた。

「好き、なんです」

そう麻穂ちゃんは言い直して、視線を上げる。

一瞬、演技かと思ったけれど、上目使いに向けられた視線は先ほどとは打って違って弱々しく、今にも涙を零してしまいそうに揺れていた。

「ずっと好きだったんです、野々原さんが来る前からずっと」

一つ一つを噛みしめるように麻穂ちゃんは言って、時折、きゅっと唇を結ぶ。

「野々原さんがどれ位柘木さんを好きなのか分かりませんが、私はきつと誰よりも彼の事が好きです、誰にも負けません」
麻穂ちゃんの少し震えるような声の、その一つ一つが胸に深く沈んで沁み込んでいく。
彼女の強さ、強かさの原因を知った気がして、結局何も言えなかった。

*

「あの夜、本当は何も無かったって沙優に知られた事で相当焦ったんだろうね」

テーブルの向こうで紅茶を啜る礼奈が、少し呆れた様子で言う。
日曜日のカフェは人気店と言う事もあってどの席も人で埋まっていて、ゆったりと寛ぐ、というイメージからは程遠い気がした。

「しかし、仕事まで邪魔しちゃダメだわ」
ため息混じりに呟いた礼奈が、隣でキャツキャとじゃれ付いているカップルを一瞥する。

今日こうして会っている理由は礼奈にあり、就職して直ぐに付き合い始めた同僚の彼氏とはそのまま一気にゴールインしてしまうのではないかと思う位の勢いがあったのに、その彼の浮気が原因で揉めている最中らしかった。

「私の話はいいの、今日は礼奈の話でしょ？」
苛立ちを隠せない様子の礼奈の視線を隣のカップルから戻し、尋ねる。

店に入って直ぐに話を始めた礼奈だったけれど、最初の頃こそ怒り心頭だった様子が話すうちに哀しくなってきたのか、徐々に口数が少なくなつて話題を私に振つたのだった。

「……いや、私はもういいや、沙優に話してたら気が済んだから」

ぼそぼそつと消え入るような声で礼奈は返し、湯気の立つ紅茶を口元へ運ぶ。

「……多分私は許せないんだって、沙優に話しながら分かった。だからもう、いい」

礼奈の話だと彼は一度きりの単なる浮気なんだと謝ったそうだけれど、礼奈はそれをどうしても許せないらしかった。

だから別れると礼奈は言い、折角気持に踏ん切りがついたのだから明日彼に別れを告げる、と淡々とした様子で続けた。

「そんな簡単に決めていいの？」

取りあえず、お決まりの台詞を投げかけて礼奈の顔を窺う。

明るく快活な印象の彼がどうして浮気をしたのかは分からないけれど、二人はとてもお似合いだと思っていたので何だか残念な気がした。

けれど、実際付き合っているのは礼奈なのだから、第三者の私があまり口を出す事でも無い気がした。

うん、と礼奈は頷いて紅茶を喉に流し込む。

熱い紅茶をごくり、と飲み込むと、あち、と小さく言ってから暗い表情を一変させるとニツと笑った。

「また、次の男を探しますか」

言ってガトーショコラにフォークを突きたてると、添えられた生クリームに一度ダイブさせてから口の中に放り込む。

「また、強がって。私と別れた後ですっごい落ち込んで知らないよ？」

一つ一つが大きい目の、カフェ自慢のケーキを食べながら礼奈に尋ねる。

礼奈は「まさか」と返して笑い、「もう、本当にいいの」と言つてケーキを食べつくした。

「で？私の話のもういいから、沙優はその後どうしたの？」

特に礼奈に相談しようと思っていなかったわけではないけれど、聞かれ

て内緒にする話でもない。

「その後は何も。普通に業務をこなして目出度く本社に戻ったよ」
素っ気なく返し、生クリームがたっぷり塗られたケーキを口に運ぶ。

生クリームもスポンジも、どちらも軽くて甘さが控えめなので大きくてもペロリと容易く食べられてしまうのがこのカフェのケーキの特徴だった。

「何も、て。仕事まで邪魔されたから直接対決したんでしょ？」

対決して何、と小さく返しながら、あの日の麻穂ちゃんの顔を思い出す。

「いつも笑ってる顔は作ってるようで本心が見えないなって思ってたんだけど、あの日の真っ直ぐで真剣な目は嘘じゃないって思った。ああ、本当に柊木くんが好きなんだなって……」

柊木くんの事を好きかと聞かれて直ぐに好きと言えない自分と違い、誰にも負けない位好きと言い切れる麻穂ちゃんに勝てるわけが無いと思った。

そして、そんな私の敗北感を悟ったのか、あの日以来、嫌がらせはびたり、と止んだのだった。

「でもちょっと待ってよ、彼の気持ちは何処に行ったの？」

私は本社へ戻っているので、明日、日本へ帰って来る予定の柊木くんとはもう会う事は無いだろう。

麻穂ちゃんの気持ちには勝てないのだからいい機会だし、このまま彼の事は諦めよう、と。

そう思っていた私の心を、礼奈の言葉が小さく揺する。

「どんなに好きだって、彼がその子を好きじゃなかったら意味無いじゃない」

礼奈の言葉に、柊木くんの声が不意に蘇る。

『それはオレの気持ちじゃない、オレは……』

窺うような視線を向ける礼奈に不器用な笑顔を返し、動揺を誤魔化すように紅茶を啜る。

麻穂ちゃんに邪魔されたその先を、聞きたかったと強く思った。

キスの後先

柘木くんが言いかけた言葉。

その先を知りたいと思う私の気持ちを知っているかのように、帰国した柘木くんから程なくして電話がかかってきた。

仕事を一緒にするうえで交わしただけの携帯の番号に、初めてかかってきた柘木くんからの電話。少し緊張した様子で言葉を選びながらも、会えないかな、と告げた後は焦った様に早口になった彼に、気がつく、「いいよ」と、返事をしていた。

電話を切って約束した時間と場所を反芻しながら、脳裏に麻穂ちゃんの顔を思い浮かべる。

柘木くんと麻穂ちゃんが付き合っているわけではないのだから何も悪い事ではない筈なのに、何故か後ろめたい気がしてならない。

柘木くんから誘われて気持ちが浮足立つのは事実で、そんな自分は彼がきつと好きなんだろうと思うのだけれど　麻穂ちゃんのように。誰にも負けない位好き、と言い切れる自信は無い気がした。

麻穂ちゃんに会ってしまうのが怖くて支社から5つ駅を挟んだ、本社近くの店で待ち合わせた。

電話で柘木くんはお土産を渡したいから、と言っていたけれど、見た所何も余計な物は持っていないように見える。

白一色で塗りつぶされた南欧風の店内の、大きな通りに面した席に案内され、向かい合って席に座った。

「お疲れさま」

仕事帰りと言う事もあってスーツのままの柘木くんに言うと、柘木くんも「お疲れ」と、少しはにかんだ様子で小さく返す。

「久しぶりだから何だか照れ臭いな」

言いながら白い歯を零して笑う柘木くんに釣られて、私も思わず

笑顔になる。

「疲れてるでしょ？」

彼が帰国してまだ三日と経っていない事を思っで尋ねると、柘木くんは「少し」と、返して肩を竦めた。

その後、ご飯を食べながら海外での買い付けの話聞き、色々な土地での出来事を聞いているうちに私に買ってくれたと言うワインの話になった。いつか話してくれた、アルパチーノのような味のあるお土産のワインは、柘木くんの自宅の小さなワインセラーに仕舞ってある、と彼は続けた。

「制服のボタンも、実家から持って来てあるんだ」

柘木くんの言葉に一瞬、梨花の顔が浮かぶ。

彼とこうして居られるのはもしかしたら梨花のお陰なのかもしれない、と思っで少し感傷的な気分になっただけれど、それも柘木くんの次の言葉で瞬く間に払拭されてしまふ。

「食べ終わったらウチに寄らない？」

一瞬、麻穂ちゃんの顔が浮かんだけれど、目の前の柘木くんの真剣な眼差しに射抜かれ、気がつくくと小さく頷いていた。

「好き、です」

ベットと小さなテーブルとに挟まれる様にして腰を下ろした。

小型のワインセラーから出されたワインを注いでもらい、そのワインについて一頻り説明を受ける。

深い味わいの中に独特の渋みがあり、私には少し飲み難いと感じたけれど、柘木くんはとても美味しそうに口元を綻ばせていた。

一杯飲んで二杯目を注いでもらい、柘木くんは相変わらず美味しそうに飲んでいたけれど、話す事が無くなっでしまふと急に表情を引き締めて黙り込んでしまった。

何か話さなければ。

沈黙に耐えかねてグラスをテーブルに置き、柊木くんの部屋の中を見回す。

以前二人で片づけたカラーボックスの棚にはまた少しだけワインのコルク栓が入っている。柊木くんは余程ワインが好きなんだな、と思って眺めていると突然、柊木くんが独り言のように呟いたのだ。

その言葉にどきり、と心臓が跳ね、けれど直ぐに彼が私を好きだと言ったわけではないと思いなおす。

柊木くんが何を見て「好き」と言ったのかと思いつながら振り返ると、小さなテーブルを囲んで左隣に座っていた柊木くんが真っ直ぐこちらを見つめていた。

え、と思わず驚きに小さく言葉を落とし、目が合つてそのまま強い視線に絡め取られる。

少し吊り上がった柊木くんの瞳の奥深くに吸い込まれていくのを感じる同時に、気がつくのと彼の肩に頭を押しつけていた。

「日本を出る前に言いたかったのに言えなくて……って、ごめん！」抱きしめられたのだと気付いた時には離されていた。

「ごめん、つい」と、慌てた様子で謝る柊木くんが浅黒い顔を真っ赤に茹で上げている。

「野々原の返事も聞かずに、ごめん」

何度も謝る柊木くんは恥ずかしそうに顔を俯かせて頭を掻きまると、恥ずかしさを誤魔化すためなのかすつと立ち上がってキッチンへと向かう。

「そ、そうだ、ボタンをまだ渡して無かったよね」

言いながらキッチンの方でゴソゴソと何かを探る音がする。

私は抱きしめられた姿勢のまま、驚きに身体が強張って動く事も、返事をする事も出来なかった。

「あ、コレだ、コレ」

カチャカチャと音がして、柊木くんが言いながら掌に何かを握り

しめて戻って来る。

上手く動かない身体で振り返ると、珍しくぎこちない笑顔を浮かべた柊木くんが握った掌を私に差し出した。

「ずっと取っておいたんだけど……要らない？」

私が手も出さずにぼうつとしていたので、柊木くんが困った様に眉根を寄せて尋ねる。

うつん。

慌てて頭を振って手を出すと、冷たくて小さなボタンがそつと掌に置かれた。

「アルバムを見た時からずっと気になって……いつから好きだったのかって聞かれたらきつと、あの時から好きだったのかもしれない」

ボタンを手放した途端、急にまた落ち着きを取り戻したように柊木くんは言い、片膝を折って私の傍らに腰を下ろす。

「野々原さんが好きです」

そこだけ几帳面にですます調で言う柊木くんは、生真面目さと嘘の無い気持ちを感じる。

間近に迫る柊木くんの強い視線に再び吸い込まれ、心臓だけが激しく脈打つだけで身体は少しも動かなくなってしまった。

「……オレと付き合って貰えないかな？」

強い視線に押される様に、気がつくや背にしたベットに身体を押しつけていた。

逃げているわけではないけれどそれ位の気迫が彼にはあって、その迫力に押されて上手く言葉を返す事が出来なかった。

「ダメ、かな……」

そうして私が黙っていると、吊り上がった瞳を曇らせて柊木くんが小さく言う。

うつん。

慌てて頭を振り、意思表示する。

そうじゃなくて。

そう言いかけてカラカラに乾いた喉を振り絞るように口を開くと、途端に柊木くんを抱すくめられてしまう。

ぎゅっと強く胸に抱かれて言いかけた言葉を飲み込んだ。

「野々原が好き、だ」

頭を振った事で同意を得たと思った柊木くんを抱きしめられ、その声が耳朶を震わす。

きゅんっと胸が締め付けられて頭の中がグルグルと回り始め、抱きしめられた身体が熱を帯びて内側から火照ると、緊張に強張った身体から徐々に力が抜けていくのが分かる。

「柊木、くん……」

大きな胸の中に身体を預けるようにしながら小さく名前を呼ぶ。

すると柊木くんは少しだけ腕の力を緩めると身体をそっと離し、俯く私の顔を下から覗きこむようにして唇を押しつけた。

「でも」

初めこそ慎重に探る様だったキスも、重ねる度に深く奥へと入り込むように荒々しいものに変わっていた。

背にしたベットに凭れていないと倒れ込んでしまいそうなほど強く唇を奪われ、上手く呼吸さえ出来ない。

頭の中は真っ白で流されるがままに柊木くんに飲み込まれそうになつて　不意に。麻穂ちゃんの顔が脳裏に浮かんだ。

「でも、麻穂ちゃんも柊木くんの事が……」

す、と顔を逸らして俯き、熱を帯びて濡れた唇をおすおすと開く。そうしてちくり、と胸を刺した原因を思ったまま口にすると、呼吸を乱した柊木くんの息が一瞬、止まった気がした。

そのまま黙り込んでしまった柊木くんの顔を、目だけでそっと窺う。

間近にある柊木くんの顔の、一番近くにあつた唇がぎゅっと強く結ばれていた。

「それがどうかしたの？」

苛立ちを隠すような低い声がして、背中に回されていた腕に力が込められるのが分かった。

あ、ごめん、そんなつもりじゃ。

柊木くんを怒らせるつもりで言ったわけではなく、ただ、自分の中で引つ掛かっていた事を口に出してしまったただけだと慌てて言い訳しようとしたけれど、不意に身体がぐらり、と揺れて思考が飛んでしまう。

はっと息を飲むのが精一杯で、何が起きたのか、考えながら目を瞬かせていると、真正面からじつと私を見つめる柊木くんの、少し怒ったような目が視界を遮っていた。

「この前も麻穂ちゃんがどうか、言ってたよね？」

いつになく冷たい声で柊木くんは言って、私の視界から消える。

押し倒されたと気がつくと同時に、首筋に顔を埋めた彼が喉をやんわりと食んだ。

ぞくり、と床に押し付けられた背筋を何かが駆け上がって行ったや、と短く声を出し、息を飲むと同時に柊木くんのがっちりとした両の肩を掴んで押し返す。

少し固い彼の髪が顎を擦り、喉元を食んだ彼の唇がすつと首筋を撫でて耳朵を舐めた。

「やっ……あの、ごめん……っ」

天井を見上げながら謝り、柊木くんのぴくりとも動かない肩を揺する。

すると、柊木くんが顔を上げ、少しだけ身体を離して私の目を覗き込んだ。

「オレが好きなのは野々原、それじゃダメなのかな」

うつん。

そう首を左右に振って柊木くんを見上げたけれど、柊木くんの目は怒ったように冷たく細められたまま、全く私の言葉を受け入れてはいないように見える。

柊木くんはそうして暫く私をじっと見下ろした後、自分の肩を掴んだ私の腕を逆に掴み返して床に押し付けた。

彼女の存在

「あの、柊木くん……っ」

身を振りながら何度か呼びかけた後、不意に柊木くんの身体が私から離れた。

「あ、その……ごめん」

罰が悪そうに柊木くんは言って、見られたくないのか、顔を大きく逸らした。

「ごめん、その……」

私の足元に座った柊木くんは節立った太い指で顔を覆い、はーっ
と肩で大きいため息をつく。

押し倒された身体を起こすと、柊木くと隣り合うように座り直した。

「誰がどうかじゃなくて、オレが野々原を好きな事を分かって貰
いたかったくて、つい……」

ごめん、と小さく続けた柊木くんが顔を覆っていた手を離すと頭
を大きく掻き毟る。

「嬉しくて逸る気持ちと伝えたくて焦る気持ちのごっちゃに混ぜっ
て何か暴走したよな、ごめん」

俯く柊木くんの顔の、乱れた前髪が覆い隠した瞳が一瞬、ちらり
と覗く。

吊り上がった臍を下げた申し訳なさそうに謝る柊木くんに、うっ
ん、と返して頭を振った。

それから私たちは付き合うようになった。

会社の帰りに待ち合わせてご飯を食べに行ったり、休みの日には
映画を観に行ったりと、ごくごく普通のお付き合いを始めた。

時々、デートの帰りに柘木くんが誘ってくれて彼の家に行った。本当なら毎回、彼の誘いに乗っても可笑しくないのだろうけれど、あの夜のように柘木くんが普段の優しい柘木くんではなくなってしまうのが怖くて、三回に一度はそれらしい理由をつけて断っていた。

付き合っている彼氏とそう言う事になって、何で怖いと感じるのだろう。

一か月が過ぎたというのに、あの時以上の行為を許せないでいる自分は変わっているのでは無いかと思い始めていた。

抱きしめられてキスをして。

そこまでは胸が張り裂けそうなくらいドキドキして甘くて切ない気分になるのに。

柘木くんの手がシャツのボタンにかかると途端に怖気づいてしまう。

「ごめんね」

そうして謝る私に柘木くんはいつも、少しだけ残念そうに眉根を下げながらも「ううん」と、返して出した手を引っ込めてくれた。それ以外は、とても普通のお付き合いだと思った。

いや。

デートの合間に時折鳴る、彼の携帯電話の事も少し、気になっている。

滅多にあるわけでは無かったけれど、コールされた携帯の画面を確認した彼の表情が冷たく固まってしまった事が何度かあった。

「出なくていいの？」

尋ねると、うん、と彼は短く返して携帯をオフにしてしまうのだ。

あれはきつと麻穂ちゃんからだ。

柘木くんが何も言わないので私も尋ねたりしなかったけれど、そ

れが何故か麻穂ちゃんからの着信だと確信していた。

私は本社に戻ったので何かを見聞きしたわけではないけれど、麻穂ちゃんはきつと、私と柘木くんが付き合い始めた事を知っているに違いない。

だからこうして、時々彼に電話をして邪魔をしているのだ、と。

そう思いながら、出もしない電話を切った柘木くんが少しだけ暗い目をして携帯をポケットに仕舞うのを、黙って見ていた。

柘木くんは私が好きだと言ってくれているのに、何かまだ、彼女に彼を奪われてしまう様な気がしてならない。

『 柘木は優しいから苦労するよ？ 』

何もかも見透かしているような安堂くんの言葉を何度も反芻する。もしかして、こういう事を言っていたのかな？

笑っているのに少しだけ、瞳を曇らせた柘木くんに笑い返しながら思っ。

でもきつと、彼が私を好きだと言って笑ってくれるのなら、それ位我慢出来る、と。

往生際の悪い麻穂ちゃんには負けない、と。

その時はまだ、これから起こる事態など何も知らない私は思っていた。

*

その日は柘木くんの仕事が急遽遅くなってしまったので、本当なら避けていた支社の近くで待ち合わせていた。

私は柘木くんの彼女なのだから麻穂ちゃんの顔を見たって何も怖い事なんて無い。

そう思いながら、何度もそう言い聞かせている自分はまだ、彼女の脅威に怯えている事を悟る。

彼女の強くて真つ直ぐな想いが、優しい柊木くんの心を大きく揺さぶっているような気がしてならない。

彼が私を好きと言ってくれているのに。

もしかしたら、安堂くんの言葉も関係しているのではないかと思いい、待ち合わせに選んだ店の窓から見える、安堂くんの店まで伸びる裏路地をぼうつと眺めた。

「ご馳走さまでした」

明らかに私よりも後から店に入ったカップルが、食事を終えて席を立つ。

時計の針が待ち合わせ時間が大幅に過ぎている事を教えていた。

電話をしようかとも思っただけで、急な残業で忙しいのに邪魔をしてはいけないと思った。

『ごめん、遅くなりそうだからオレの家で待ってて貰ってもいいんだけど』

残業で遅くなるから待ち合わせ場所を変えて欲しいと柊木くんは言った後、そう付け加えて鍵を支社まで取りに来てもらえれば、と続けた言葉に素直に頷けなかった事を後悔し始めていた。

例えエントランスまでとはいえ、麻穂ちゃんに会う確率はゼロではないのだからと断ったのだけれど、こうして人の出入りがある店で落ち付かない気持ちを抱えたまま待っている位なら、柊木くんの家で待っていた方が数倍ラクな気がした。

待ちぼうけしてるみたいで、イヤだな。

一時間もすると、他人の目が気になって仕方が無くなってくる。

もう何度目かの時計の針を確認し、携帯を取り出す。

電話が無い事を確認してメールを立ちあげ、取りあえずこの店を

出て待ち合わせ場所を変えることを伝えようと思った時、不意に電話が鳴った。

「もしもし？」

「あ、ごめん」

私が話したのと同時に柀木くんの声があった。少し慌てているような、それでいて暗い声だった。何かあったのだろうか。

たった一言で私にそう思わせる声色だった。

「……どうかした？」

ずっと待つてるんだけどとか、残業が長引いてるの、とか。言いたい事、聞きたい事は山ほどある筈なのに何一つ、出てこない。い。

ただ、胸が大きくざわついて、良くない事がこれから起こるかもしれないという不安だけで頭がいっぱいになっていた。

「あ、うん、それが……」

歯切れの悪い柀木くんの言葉に、胸がキリキリと締め付けられる。「何？」

悪い話なら早くしてしまっただけいいと焦る気持ちから尋ねると、柀木くんは一呼吸置いてから言った。

「……ごめん、今日はちょっと会えそうにない」

今にも消え入りそうな声で柀木くんはいい、最後にもう一度「ごめん」と言った。

「何かあったの？」

「残業が長引いて」と、言ってくれたらどれだけ救われるだろう。そう願いながら尋ねたが、

「あ、うん……後で話すよ」
と、柊木くんは話を濁して何も教えてはくれなかった。

「うん、分かった　また、今度、ね」
きつと悪い事が起きている。

そんな不安が一気に膨らんで押しつぶされてしまいそうなのに、それを悟られまいと精一杯明るい声で返し、柊木くんが電話を切るのをじつと耳を澄ませて待った。

何か言つて、お願い。

これきりで電話を切るのではなく、何か一言でもいいから安心させて欲しい。

そう願って耳を澄ませたけれど、聞こえてきたのは柊木くんの声では無く、「いや」という、麻穂ちゃんの声だった。

悪い男

麻穂ちゃんの声がいつまでも耳朶にこびり付いて離れなかった。

「いや」

喉の奥から振り絞る様な、麻穂ちゃんらしからぬ少し掠れた声だった。

柀木くんが何処に居て、何が起きているのかを考え、何を思うにしても悪い考えしか思い浮かばない。

待ち合わせしていた店を出てフラフラと、文字通り何を考えるでもなくフラフラと足が動くままに歩いた。

目を開けていても、瞳は薄暗い街の景色を何一つ映さない。

何処をどう歩いたのか、気がつくとか何が弾けるような派手な音がして、反射的に目を見開くと掌で頬を押さえた安堂くんが立っていた。

「あれ、沙優？」

呼ばれて何度か目を瞬かせ、今自分が何処に居るのかを把握する。帰宅するためには駅に向かわなければならなかったのに、人波を避けるようにいつの間にか安堂くんの店がある、人影も疎らな裏路地に入り込んでいた。

「なに、誰なの、この子？」

掌で頬を押さえる安堂くと目が合って立ち止ると、彼の目の前に居た、すらりと背の高い女性がこちらを振り返り、少々甲高い声で言う。

「……まさか、この子が新しい彼女とか言うんじゃないでしょうね？」

ブルーのアイシャドーが印象的な女性は忌々しげに顔を歪め、言いながら高いヒールで大股に歩き近づいてくる。

何が起きたのかさっぱり分からない私が立ち尽くしていると、安堂さんの「あ」という短い声と共に私の頬が乾いた音を立てた。

「この、泥棒女っ」

頬を叩かれたのだと気がつくと同時に、安堂さんが急いで駆け寄って来るのが見えた。

私の頬を叩いた女性はぐるりと黒くラインで囲んだ目に涙を溜めながら、尚も私を叩こうと手を振り上げる。

「え、なに、ちよつと……！」

ジワジワと熱を帯びる頬を押さえながら後づ去り、振り上げた女性の手を阻止しようとバックで頭を庇っていると、駆け寄った安堂さんが女性と私との間に身を滑り込ませた。

「その女を庇うの!？」

ヒステリックに叫び、女性が目の前に立ちはだかった安堂くんを睨みつける。

「いったい何なの?」

安堂さんの背中に隠れながら尋ねたが、安堂さんからの返事は無い。

どうやら痴話喧嘩に巻き込まれた様だと言う事だけ理解して、何とか誤解を解いた方がいいと思っいていい訳をするチャンスを探っていた、その時だった。

「あのさ、分かってるならそういの、止めたら?」

余程興奮しているのか、荒い息を刻んで頬を上気させた女性に、対峙した安堂さんは極めて落ち着いた声で言う。

静かに諭すような安堂さんの声に反応して、女性は堪えていた涙をポロポロと落とした。

「……どうせあんただった直ぐに飽きて私みたいに捨てられるんだから」

安堂さんの背中に隠れた私に、女性は込み上げる嗚咽の合間に言

つて身を翻す。

「サイテー」

帰ってくれるのかな、と安堵するのも束の間、女性は小さく吐き捨てるのと振り返り、安堂くんの頬を平手で叩くと今度こそ、通りの向こうへと歩いて行った。

「お盛んだね、安堂くん」

お詫びに、と言われて安堂くんの店に入った。

既に開店していた店内には数人の客が居て、カウンターにも何人かの人影があった。

「今日はこつちでいい？」

店の奥側に近い席に案内され、うん、と頷いて腰を下ろす。

「何でも言つて、お詫びだから」

言つていつもの笑顔を浮かべようとした安堂くんが、「いて」と小さく言つて顔を歪める。

痛むのか、叩かれた左の頬を掌で押さえると肩を竦めておどけてみせた。

「"彼女"だったの？」

すらりと背の高い、先ほどの女性を思い浮かべながら尋ねる。

「数回デートしただけで彼女って言つならそうかもしれないかな？」

「なに、それ」

相手の女性はあんなに怒って涙を流していたと言つのに、少し惚けたように言つ安堂くんの言葉に呆れる。

「もしかしてこういうの、良くあるの？」

テーブルを挟んで立っている安堂くんを見上げ、尋ねる。

安堂くんは否定も肯定もせず、頬を撫でて苦笑いを浮かべた。

「いつか刺されるよ？」

少し冗談めかして言いながら、そう言えば安堂くんは自分の父親

が女性にだらしが無かったという話をした事を不意に思い出す。

高校の時からタラシと言われる安堂くんは少なからず憎い父親に似てしまっているのではないかと思っただけれど、言ったら確実に怒るだろう思った。

「って言うか、今日は沙優はどうしたの？本社に戻ったんでしょ？」
すると、都合の悪い自分の話から話題を逸らすようにして安堂くんが言う。

今日は支社に来てたの？と、続ける安堂くんは、今度は私が返答に詰まってしまふ。

「……なに、何かあった？」

簡単に嘘をつけばいいだけなのに、柊木くんの事を思い出すと途端に胸が詰まって何も言えなかった。

そんな私を安堂くんは見逃すわけもなく、すつとイスを引くと正面に腰を下ろす。

「柊木と何かあった？」

間に挟んだテーブルに身を乗り出し、少し囁くように声を潜めて安堂くんが尋ねる。

”柊木は止めた方がいいよ”

瞳の奥から私の気持ちを見透かすような安堂くんを見つめ返しなから、何度も繰り返された安堂くんの言葉を思い出す。

「ううん、何も」

安堂くんから散々忠告を受けたはずなのに。

安堂くんの忠告を聞かずに付き合っつて、拳句に胸が張り裂けそうな事態に陥っているなんて言えないと思った。

「そう？」

胸の中を悟られないように笑顔を作つて返した私を尚もいぶかしんでいるような安堂くんの視線から逃れるようにして、大袈裟に店内を見やる。

「何か今日も忙しそうだね」

キョロキョロと店内を見回し、言つて席を立った。

「もう、いきなりあんな事になるからすっかり忘れてたけど早く帰らなきゃならなかった」

告げて肩を竦め、安堂くんを振り返る。

「沙優？」

イスに座ったままの安堂くんの、何かを探る様な視線に思わず目を逸らした。

す、と差し出された手を避けるように反射的に身を引くと、足早に店を飛び出した。

彼女の泪と彼の言葉

金曜の夜、礼奈を飲みに誘った。

飲みたいなんてどうしたの、と尋ねた礼奈に安堂くんのエピソードを話し、二人で「サイテー」などと言って笑った。

一頻り笑った後、再びどうしたの、と尋ねてきた礼奈に柊木くんの話をした。

あの後何回か着信した電話を無視し続けていると言つと、礼奈はきちんと話を聞かないとダメだと言った。

怒って無視しているわけでは無く、ただ、話をちゃんと聞くのが怖いと言つ理由なら尚更だと礼奈は言った。

浮気が原因で別れると散々騒いでいた礼奈も、結局彼氏の言い分を聞きいれて仲直りしたらしかなかった。

もちろん、浮気を許したわけではないけれど、と礼奈は前置きした後、話をちゃんと聞くうちにもう彼は二度と同じことを繰り返さないのではないかと信じる気持が生まれたから、と言った。

その辺りの心情の変化を私は理解出来ないけれど、兎に角、何が起きたのかも分からないまま、怖い怖いと逃げ続けるわけにもいかないでしょう、という礼奈の言葉を耳に刻んだ。

そして。

礼奈と別れて席を立った私を待っていたかのように鳴った着信音に、携帯を取り出すと耳に押し当てた。

「……こんな夜中にゴメン」

逃げてはいけないと言った礼奈の言葉を、心の中で何度も繰り返しながら家に戻った。

しん、と静まり返ったマンションのエントランスに、Tシャツにジーンズ姿の柊木くんが壁に寄りかかる様にして立っていた。

電話しても出てもらえなかったから。

大きな身体から小さく咳くように言つて、柗木くんが2、3歩、歩み寄る。

礼奈と別れて直ぐに鳴つた電話で柗木くんは、私の家の前で待っている、と言つた。

押し殺したように低い声で話す柗木くんは、一つ一つ言葉を選んでいるように見える。

あの夜、麻穂ちゃんとは何があつたのか。

それは私にとって良い事なのか、それとも悪い事なのか。

少し伏せ目がちな柗木くんを盗み見ながら、これからどんな話が待っているのかを思つただけで胸が苦しくて仕方が無かつた。

夜も遅いので部屋へ案内し、玄関のカギを開けながら彼を招き入れるのは初めてだと気がついた。

もしかしたらこれが最初で最後かもしれないと考え、どうせ最後ならさつさと話をして帰つて欲しいと思つた。

麻穂ちゃんとの話をどんな顔をして聞けばいいのか。

いや、でも、全てがただの考え過ぎで何も無かつたのではないかと一瞬思い、もしそうなら柗木くんが何故こんな夜中に切羽詰まつた顔で私の家を訪れる理由があるのだと自分で自分に突っ込んだ。

「狭いけど」

捲れたままの布団を直し、脱ぎっぱなしの部屋着をその下に隠す。朝飲んだままのコーヒークップを流しへ戻し、ベット脇に置かれた小さなティーテーブルの、一つしかないイスを差し出した。

「どうぞ」

あ、ごめん。

さつきからずっと謝りつ放しの柗木くんは言つて、ぎこちない動作で座る。

あまりキョロキョロと見回してはいけないと思っ
ているのか、それとも気分
のせいなのか、終始俯き加減の
柘木くんが冷蔵庫から出した
ウーロン茶を差し出す。

柘木くんの声を聞いてからす
っかり酔いは醒めていたけれ
ど、カラカラに乾いた喉を冷
えたウーロン茶で潤すと中々
話を始めようと思いきって口
を開いた。

「それで？」

この場合の「それ」はどこ
なのか。

緊張し過ぎた脳内は、イヤな
事から逃れるかのように余計
な事をすぐ考えようとする。

ううん、そんな場合じゃない。

小さく頭を振り、俯く柘木く
んの、少し日に焼けた頬を見
下ろしていた。

「……あの夜、帰ろうとしたら麻穂
ちゃんが追いかけてきたんだ」

顔を上げずに語り始めた柘木
くんの声に、以前、帰社を待
ち構えてエントランスから飛び
出してきた麻穂ちゃんの姿が
脳裏に浮かぶ。

「それじゃなくても約束の時
間を遅らせてもらってるのに、
急いだ才レを追いかけてきて……」

止まることを前提としない走
り方で飛び出してきた麻穂ち
ゃんは転がる様に柘木くんに抱
きついた。

そこに、支社に戻ったばかり
の他の社員が居た、とも柘木
くんは言った。

会社である事も忘れて目に涙
を溜め、縋り付く様にスーツ
の胸元を手で掴んだ尋常でない
麻穂ちゃんの様子に、先輩
であるその社員は声をかける
のを憚ってそそくさと足早に
エレベーターに乗り込んで
いった。

見てはいけないものを見て
しまった。

ドアが閉まる寸前に投げかけ
られた先輩の視線がそう言っ
ていた。

麻穂ちゃん、どうしたの。

そう尋ねるのが精一杯で、小さな彼女は必死にスーツを掴んで絶対に離そうとしなかった。

取りあえず落ち付いて？

仕舞いには嗚咽を漏らして泣き始めた彼女の肩に手をかけて、努めて優しく語りかけた。

それでも麻穂ちゃんは何も言わず、ただ泣くばかりで埒が明かない。

支社が入るビルは複数の会社がテナントで入っているのでエントランスへの出入りは決して少ないわけでは無く、このままでは人目も気になるので何処かの店に入ろう、と彼女を連れだした。

決して離すまいという意思の表れのように袖を掴んで泣き続ける麻穂ちゃんを連れては結局、どの店にも入れなかった。

通りを歩いているだけで、すれ違う人々が振り返るほど目立っていたからだ。

カップルの派手な痴話げんか。

そんな囁きも耳に届いた。

何処に居ても誰かの目が気になって落ち付かなかったので、取りあえず支社から近い事もあって自分の家に来てもらった。

麻穂ちゃんは泣いたまま何も話してくれないし、取りあえず他人の目が気にならない所で自分も落ち付いて話を聞こうと思った。

何で泣いているの？

テーブルの前に座らせ、冷蔵庫から缶コーヒーを出して尋ねた。

それまでの麻穂ちゃんとの経緯を思えば何となく理由は想像の範囲だったけれど、彼女がそれを口にしたのならこの際、きちんと自分の気持ちを伝えないと、とも思った。

そんなに泣いたら喉が渴いたでしょ。

俯いたまま未だ泣き続ける麻穂ちゃんに声をかけ、缶のプルトップを開けてあげた。

これ飲んで少し落ち付いて？

す、と目の前に差し出すと、やっと顔を上げた麻穂ちゃんが震える指で缶を受け取った。

泪でグチャグチャに頬を濡らした麻穂ちゃんがコーヒーを飲むのを見ながら、そうだ、「遅れる」と一言沙優に電話をしなくては、と思って携帯を取り出すと途端に、がちちゃん、と音がして麻穂ちゃんが手にしたばかりのコーヒーターブルの上に置き、傍らで突っ立っていたオレの両の足を束ねるように抱きついてきた。

「ダメッ」

言っであまりに強く抱きつかれたので、バランスを崩して思わず床に倒れそうになった。

何とか堪えたけれど、手にした携帯が滑り落ちて床に叩きつけられた。

「危ないよ」

少し咎めるように言っ、麻穂ちゃんの腕を振り解こうとしたが離してくれなかった。

もう、これ以上彼女の話待つのは無理だと考えて、抱き付かれたまま、自分の気持ちを話してしまおうと思った。

「……あのね、麻穂ちゃん」

言いながら壁に掛けられた時計を見ると、約束の時間を大幅に過ぎている。

早く話を終わらせて帰って貰おう。

気持ち焦り始めた、その時だった。

「聞きたくないっ」

泣き方も尋常で無かった麻穂ちゃんは、普段の可愛らしいおっとりとした声で無く少し甲高いヒスリックな声を上げた。

言っ、麻穂ちゃんは足に抱きついたまま大きく頭を左右に振ると、抱きしめる腕に力を込めた。

「でもね」

彼女の感情に巻き込まれてはいけないと思って冷静である事を心がけた。

腰を屈め、細くて白い腕をそつと掴んで、俯かせた顔を覗き込む。キレイに巻かれた髪で隠された顔を覗きこむと、一瞬赤い瞳と視線がぶつかって直ぐに麻穂ちゃんは顔を逸らした。

「いや」

何も話してくれない上に聞いてもくれない麻穂ちゃんに、最早お手上げ状態だった。

きつとこの状態は直ぐには解決出来ないと思い、屈めた腰を床に下ろして落ちた携帯を手に取るとアドレス帳を開いた。

それで散々待たせてしまった沙優に電話をして……けれど、なんて説明したらいいのか、その時は全く思い浮かばなくてあやふやな言い訳をしてしまったのだけれど　その時。

「いや」

足を抱きしめたままの麻穂ちゃんが言ったので、きつと沙優にも聞こえたよね？

「ごめん」

柊木くんは言っつて、そこで初めて顔を上げた。

久しぶりに柊木くんに会った、そんな気がした。

「……その、後は？」

暗い影を落としたような、浮かない表情の柊木くんを見つめ返しながら尋ねる。

本当は聞きたくないのに、と心の中で思うけれど、聞かなければきつと後悔する、とも思った。

「彼女が落ち付くのを待つて帰って貰った。結局オレの話も彼女の話も何もしないままだったけど、何か話したらきつと長くなって帰って貰えないと思ったから」

二人の間に何も無かった事に安堵するも、結局何も解決していないのでは、という疑問が胸に残る。

けれどそれも、不意に伸ばされた柊木くんの手が私の手に触れた

ことで、直ぐに消されてしまう。

「!?!」

急な事に驚く間もなく、掴んだ手を引き寄せ、突っ立っていた私の腰を柊木くんが抱きしめた。

「……沙優」

ほーっと肩で深い息を吐き、柊木くんが静かに呼びかける。

「会いたかった」

腰を抱きこんだまま頬を埋め、柊木くんが言うときつかった胸がきゅっと締め付けられる気がした。

「……私毛」

喉が詰まって上手く言えなかったけれど、それでも確実に柊木くんには届いたらしかった。

ぐっと一瞬強く抱きしめた柊木くんはイスから立ち上がると私の顔を覗きこみ、お互いを確かめるように少し見つめあった後、唇を重ねる。

高まる熱を感じるようなキスを受けとめていると、すっかり醒めたと思われていた酔いが急激に蘇った気がした。

足元が浮つくような感覚に柊木くんの胸に飛び込むと、そのまま傍らのベットに倒れ込んだ。

本来、一人しか受け止められないベットが軋んで乾いた音を立てる。

「沙優」

熱い吐息が頬を撫り、柊木くんが抱きしめる手に力を込める。

夢の中で浮遊するような高揚を感じつつ、いつもより荒々しく感じる柊木くんの唇に徐々に戸惑いを覚える。

「柊木くん？」

胸元に降りていく柊木くんに呼びかけるけれど返事は無い。

抱きしめていた柊木くんの手はいつの間にか私のシャツの裾をスカートノウエストから引つ張り出してボタンを外そうと試みていた。

「あの、柊木くん……?」

その手を掴んで阻みながら、もう一度呼びかける。
すると、顔を上げた柊木くんの、何処か少し焦っているような、
それでいて強い視線が向けられる。

有無を言わせないような、必死に何かを訴えているような視線に
戸惑う。

どうしたのだろう。

そう思うと、不意に麻穂ちゃんの顔が脳裏に浮かんで胸がちくり、
と小さく痛んだ。

彼女なら、どうする？

そんな疑問が浮かび上がったのを、まるで見透かしたように柊木
くんがゆっくりと口を押し開く。

「オレを好きなら拒まないで」

す、と顔を寄せて唇を押しつけてきた柊木くんは、自ずと瞼を閉
じた。

好きなら拒まないで。

麻穂ちゃんの顔が映し出された瞼の裏のスクリーンに、柊木くん
の言葉がいつまでも木霊していた。

一夜の出来事

無機質な玄関扉を暫く眺めていた。

向こうに消えた柊木くんの背中、少しだけ色を濃くした陰の意味を追いかけた。

『 やっぱり良くないよな、こつこつ』

触れあう肌は冷たいのに、内側から溢れだす熱のせいで茹だる様な暑さを感じた。

露わにされた肌に触れる柊木くんの吐息さえ熱いと思っていると不意に、す、と身体を離して柊木くんが独り言のように呟いたのだ。

『 オレを好きなら拒まないで』

そう囁かれて覚悟を決めた筈なのに。

どうして柊木くんは急に離れてしまったのだろう。

そう思うと自ずと浮かぶ麻穂ちゃんの陰に不安を覚えていると、顔にかかる髪を振り解く様に頭を振った柊木くんが顔を上げ、視線を合わせるように私の顔を覗きこんで、言う。

『 好きなら焦らず待たないとな。沙優、緊張でカチカチだし』

言っつて白い歯を見せて笑う柊木くんに、たちまち頬がカツと火照るのが分かった。

10代の頃ならまだしも、もういい大人なのに、と思ったけれど、

だからといって経験があるふりが出来るわけもない。

『こうしてまた沙優と会えただけでも今日はヨシとしないと』

薄暗闇に零れる柗木くんの笑顔にほほ笑み返した。

私も同じ気持ちだと、直ぐに押しつけられた唇を受けとめながら
思う けれど。

唇を離すと間近に飛び込んできた柗木くんの、伏せ目がちな目に
落ちる見えない”陰”に胸がざわめく。

とても嬉しい筈なのに、胸の中に小さな淀みが広がっているのを
感じた。

*

その、小さな淀みの主はもちろん、麻穂ちゃんです。

”そうまでして柗木くんに迫った彼女がこのまま黙っているわけが
ない”

そんな漠然とした不安は単なる思い過ごしだと払拭する間もなく、
直ぐに実態を露わにした。

それは、突然の安堂くんからの電話から始まった。

これから出て来れる？

そんな、簡単な問いかけだった。

なに、どうかしたの、と返す私に安堂くんは思わせぶりな含み笑
いで答えた。

残業をせずに帰宅したので時間はあったが、どうしようかと迷う

私の背中を押ししたのは「ムリならいいんだけど」という、少し残念そうな声色だった。

散々忠告されていたのに結局柀木くと付き合っていると云う後ろめたさもあり、直ぐ行く、と答えて家を出た。

一体どうしたのだろう。

そう思いながら彼の店、「memento」のドアに手をかけた。

「いらっしやい」とほほ笑んでくれた安堂くんの横に、愛らしい笑顔を浮かべた麻穂ちゃんが手を振っていた。

「前みたいにもたここで飲みたいから沙優を呼んでくれって言われてさ。同じ会社なのにお互いの携帯の番号、知らないんだな」

言つて麻穂ちゃんと向き合う席のイスを安堂くんが引いた。

「突然、すみません」

驚きに混乱する頭を悟られないように平静を装いながら促された席に腰を下ろす私に、麻穂ちゃんは言つて白い両の掌を顔の前で合わせた。

「で？つまむ物はもう注文貰つてるんだけど何を飲む？麻穂ちゃんはワインを飲んでるんだよね」

「はい」

安堂くんの視線を受けて、麻穂ちゃんは頷くとリップグロスで艶めく口角をキレイに引き上げた。

そうか。

麻穂ちゃんの笑顔を受けて振り返つた安堂くんを見ながら、思う。柀木くと私が付き合っている事を知らない安堂くんは、前回この店に柀木くんを交えた3人で飲んでいた事もあつて私と麻穂ちゃんが仲がいいと思つているのだ、と気がついた。

具合が悪いと仮病を使つて麻穂ちゃんが柀木くんを連れて先に帰

った事を知っていても。
柗木くんの事で麻穂ちゃんが私に嫌がらせをした事を知っていても。

麻穂ちゃんが愛らしい笑顔で私の話をし、また私と飲みたいと言えは仲直りをしたのかもしれない、と行ってしまふのは仕方が無いだろう、と思った。

そして麻穂ちゃんは、自分から呼び出したら私が素直に出てこないのではないかと思って安堂くんを利用したのだ。

驚かせたいから誰が待っているのかを言わないで下さい、と頼まれたからあんな電話だったのだと、今さらながら気がついた。

「……じゃあ、私も同じものを」

麻穂ちゃんがどんなつもりで私を呼んだのかを考えながら、取りあえず注文を待っている安堂くんに伝える。

作った笑顔がぎこちなかったのか、安堂くんが少しだけ目を丸く見開いたけれど、気のせいだと思ったのかすぐに優しげに目を細めると店の奥へと入っていった。

「すみません、突然」

安堂くんが向こうに行つた事で二人きりになると、麻穂ちゃんは言つて小さく頭を下げた。

会社の給湯室で見せた、柗木くんを好きだとはつきりと言いつた麻穂ちゃんとは違い、随分と弱々しい印象を受ける。

何があつたのだろうか？

まるで掌を返したような彼女に益々混乱しつつ、今日、自分がここへ呼ばれた意味を考える。

彼女の目的は何だろうか？

長い睫毛を伏せ、間接照明が照らすテーブルに視線を落とす彼女を正面に見ながら必死に考えたが、何一つ答えなど浮かばず彼女の言葉を待つ事しか出来なかつた。

「噂になってるんですよ、二人は付き合ってるって」

安堂くんが私のワインを持ってきたのを待っていたかのように、それまでずっと押し黙っていた麻穂ちゃんが口を開いた。

その言葉に、ある程度は予想していたものの、思わずどきりと心臓が跳ねて背筋が強張る。

「この前支社に顔を出した島崎主任も言っていました、オレの読み通り、二人は運命だったんだなって」

伏せた視線を上げ、麻穂ちゃんは驚いて手を止めた安堂くんを見上げた。

「安堂さんも知らなかったんですか？」

言って小さくほほ笑んだ麻穂ちゃんに、幾分目を見開いて突っ立っていた安堂くんが「うん」と、返して頷く。

「野々原さん、柊木さんの事をどう思ってるのかわかって聞いた時何も言わなかったからってつきり何とも思ってた無いかと思ってたんですけど」

言いながら麻穂ちゃんがテーブルの上のグラスに視線を移す。

麻穂ちゃんの見線が逸れたことで安堂くんが私を振り返る。

驚いているように見えた目を二、三度瞬かせると、安堂くんは小さく目を細めてにつこりとほほ笑んだ。

「何か、裏切られた気分です」

飲みかけのワインを口に運び、少し語句を強めて麻穂ちゃんが言った。

安堂くんと見つめあったままの私の耳には彼の言葉の様に聞こえたが、安堂くんは優しくほほ笑んだままで少しも棘が感じられない。

「……そうかな？」

「……と呟ったグラスをテーブルに置いた麻穂ちゃんが大袈裟な様子で溜息をつくのとは対照的に、安堂くんは低く落ち付いた声で言った。」

「付き合ってるなんて知らなかったけどでも、オレはなるようにしてなったと思うな」

じつと私の目を見つめたまま、安堂くんは言った。

「そうなるんじゃないかとずっと思ってた」

だから散々忠告してくれたんだと思うと胸がちく、と痛んだ。

「ごめんね」

思わず謝罪の言葉が口を突いて出た私に、安堂くんは優しくほほ笑んだまま、

「何で謝るの？」

と、返して笑った。

「って言うか」

そして、安堂くんはじつとテーブルの上を凝視している麻穂ちゃんを振り返る。

「これから何をしようとしてる？」

少しだけ声のトーンを落とし、麻穂ちゃんを鋭く見下ろしながら安堂くんが言う。

これから、何を？

少し焦ったような安堂くんの様子に不安を覚えていると、テーブルを見つめる麻穂ちゃんが一瞬きゅつと固く唇を結んだあと、意を決したように顔を上げると私を正面から睨みつけた。

「私、柊木さんの家に泊ったんです」

先ほどまでの弱々しい印象とは違い、真っ直ぐに向けられた視線は突き刺さる様に鋭く攻撃的に見える。円らな瞳はその形を変え下がった目が大きく吊り上がっていた。

「……え？」

突然豹変した麻穂ちゃんの態度と思わぬ言葉に、間の抜けた声しか出て来なかった。

彼女は何を言ってるのだろう？

理解しているのに否定したい気持ちがあるその言葉の意味を拒否しているせいで頭が混乱していた。

「前は泊っても何も無かったですけれど、今度は違います」

冷たく私を見据えた麻穂ちゃんが続けるのを、傍らに立ち尽くした安堂くんが慌てて止めようとオロオロしていた。

聞かなくていいよ、どうせ嘘なんだから。

何処か遠い所から、安堂くんの声がしている。

嘘じゃないです、柊木さん、一晩中私を抱きしめてくれて……。

小さなテーブルを挟んで向こうに座る麻穂ちゃんの声も、次第に遠退いていくような気がした。その時だった。

「違うっ」

不意に耳元で大きな声がして、反射的に振り返ると柊木くんが私の横に立っていた。

「柊木くん」

私が呼ぶのと同時に安堂くんも彼の名前を呼んだ。

「違うんだ、沙優」

腰を屈め、私の顔を覗き込みながら柊木くんが言う。

困った様に濃い眉根を寄せ、瞳には焦りの色が見える気がした。

「何が違うって言うんですか」

すると、それまで落ち付いて見えた麻穂ちゃんが急に声を高くして声を張り上げる。

「私嘘なんてついてないですよ？違わないですよ？」

少し興奮しているのか、麻穂ちゃんはイスから立ち上がるとテーブルに手をついて身を乗り出す。

「でもあれは、そうしないと帰らないって言うから……！」

耳元で聞こえた柊木くんの言葉を聞きながら、つい、数日前に聞いた彼の言葉を思い出ししていた。

『彼女が落ち付くのを待つて帰って貰った』

あの言葉は嘘だったのだろうか。

そう思うと頭が急にグラグラと回り始めて足元から地面に崩れていくような感覚を覚えた。

柊木さん、酷いですっ。

遠くで麻穂ちゃんが叫び、派手にイスを倒して店を駆け出ていった。

麻穂ちゃんっ。

名前を呼んだのは多分安堂くん、柊木くんは固まったまま、動かない。

ぼんやりと痺れる頭で何を見るでもなく瞬きも忘れて目を見開いたままの私も多分、時間を止めてしまったかのように動く事が出来ず。

「……沙優、大丈夫？」

ぼん、と肩に置かれた安堂くんの掌から伝わる温かな熱に、少しずつ時間を取り戻す。

その、安堂くんの掌を柊木くんが払い除ける。

つい、と顔を近づけてきた柊木くんから視線を逸らした。

「……麻穂ちゃんを早く追いかけて」

痺れていた思考回路が止まっていた時間を巻き戻す中に、走り去る麻穂ちゃんが零した泪があった。

「……なんで追いかけてくちやいけない？」

少しだけ震えるような声で聞き返す柊木くんから大きく顔を逸らすと、テーブルの上にはぼつ、と小さな水滴が落ちていた。

「いいから行って！」

身体の内側から溢れだす何かを吐き出すように言うと、柊木くん背中を向けた。

落下する夜

「前みたいに飲みたいてってあの子に言われて、沙優と柁木に電話したんだ……今思えば迂闊だったな」

「ごめん、と続けて安堂くんは眉根を寄せ、唇を噛みしめた。安堂くんが謝る事じゃないよ。」

そう返したかったけれど、早鐘の様に打ち続ける鼓動と身体の内側からじつとりと滲む熱のせいで身体が震え、何も言えなかった。何も無かったと言った柁木くんの言葉はウソだったのだろうか。麻穂ちゃんに散々ウソをつかれてきたけれど、今度ばかりは本当なのかもしれない、と思わざるを得ない。

少し強引に迫ってきたのに突然手を止めて帰ってしまった、金曜の夜の柁木くんと。

今まさに目の前で、麻穂ちゃんの言葉を受けて顔色を変えた彼とそれぞれを思い返して考えれば考えるだけ、彼に不利な答えばかりが導き出されてしまう。

「大丈夫か、沙優？」

瞬きも忘れてテーブルを凝視している私の耳に、安堂くんの声が低く静かに届く。

うん。

振り返る気力もなかった、テーブルを見下ろしたまま力なく頷いた。

『オレを好きなら拒まないで』

そう言った柁木くんの、有無を言わせないような、必死に何かを訴えているような視線の裏に。

『 やっぱり良くないよな、こつこつ』

意味が分からずに受け流した言葉の裏に、経緯はどうあれ、麻穂ちゃんと過ごした夜があるのだと思った。

「……ごめんね、せっかく作ってくれたもの、食べられそうにない」
カタン、とイスを引いて立ち上がる。

傍らで静かに見守ってくれている安堂くんをちらり、と目で振り返り言つと、お金は後でいいかな、と続けて狭い店内を足早に急ぐ。

泣きながら店を飛び出して行った女の子と、それを追うようにと声を荒げた私に促されて店を出ていった男の子。

テーブルを囲んだ客たちが興味を示さない筈は無く、不躰に向けられた視線から逃れるように顔を俯かせて店を後にした。

何を考えるでもなく家路を急いだ。

頭の中は真っ白で 多分意識的に、傷つくのを恐れて何も考えないようにしていたのかもしれない。

往來の真中で前後不覚に泣いたり仕舞わないように。人目も憚らずに嗚咽を漏らして泣き喚かないように。

ただ、ロボットのようにはマンションまで戻り、バックから鍵を出して部屋の中へと入った その時初めて。

「沙優を、放っておけないよ」

背後に安堂くんが立っている事に気がついた。

「大丈夫？」

そう言つて安堂くんが腰を屈め、顔を覗きこんでくる。

一瞬戸惑つたけれど、困つた様に眉根を寄せつつも何処か温かな安堂くんの眼差しが、張りつめた胸の奥にするり、と入り込んで馴染む。

一人きりになりたいようで、けれど実際に一人きりになるのは辛すぎた。

「お店は？」

背中を向けると後を追うようについてくる安堂くんが部屋へ入るのを見届けてドアを閉めた。

「バイトの子に頼んだから大丈夫」

安堂くんが言うのを聞きながら鍵をかけた。

「ごめん、な」

何度も謝罪する安堂くんは、麻穂ちゃんの策略に嵌つた事で責任を感じているらしかった。

「安堂くんは悪くないよ」

そう繰り返しながら、ならいつたい誰が悪いのだろう、とふと思つ。

私と付き合い合つていながら麻穂ちゃんと一夜を共にした柊木くん？

それとも、私と付き合い合っている事を知っていてそれでも彼を諦めきれなかった麻穂ちゃん？

「ううん、悪いのは私……？」

彼は悪いと思う。

もちろん、麻穂ちゃんも悪いと思う。

けれど、グルグルと回る頭の中で、なら私は何も悪くないのかという疑問が浮かび上がる。

「安堂くんは散々忠告されてたのに」

肩に下げたバックを床に投げ出し、ベットを前にして立ちつくす。

『柊木は止めた方がいいと思うよ』

その忠告をきちんと受け止めていればこんな事にはならなかったかもしれない。

そう思いながらぼうつと見つめるベットの上に、あの夜重ねられた温もりが見えた気がした。

「安堂くんにはこうなる事が分かってたんだよね？」

いつもよりも少し強引な気がした柊木くんは麻穂ちゃんと一夜を共にした後で。

何を思っただんな行動に出たのかと考えたら途端に目頭がカツと熱を帯びた。

「いや、でも、柊木は真面目だからまさかあの子と現実にそんな事になるなんてトコまでは……って、ゴメンッ」

急に声を荒げた安堂くんがどうしたのかと思う間もなく、抱きしめられていた。

「 やつと泣いた、ね」

ぎゅっと頭を抱えられ、頬を薄いブルーのシャツに押しつけられると少しだけ、煙草の匂いがした。

シャツの下には固い筋肉が感じられ、耳元でジャラリ、とシルバ―のネックレスが音を立てる。

「 私ね、柊木くんとしてないんだ」

込み上げる嗚咽の合間に、喘ぐように言葉を繋ぐ。

どうしてそんな話しをしたのか、自分でもよく分からなかったけれど、安堂くんの温もりを感じながら気がつくそう告げていた。

「何度もそういう事になりそうだったのにいつも逃げてて……だから

ら、かな？」

だから、の先の、「飽きられてしまったのかな」というニュアンスを、口にしなかつたけれど安堂くんは受け取ってくれただろうか。「だから麻穂ちゃんに取られちゃったのかな？」

男の人ってやっぱり、そういうものなの？

温かな温もりに包まれながら瞼を閉じると、何処か夢の中に浸かっているような気分になった。

現実ではない、夢の中の安堂くんに見ると、抱えた私の髪をそっと撫でている手を止めて安堂くんが答える。

「そんな事で他の女に行くような男はクズだよ。柊木はクズじゃないよ。優しい」んだ」

涙で濡れた頬に、温かくて大きな掌が触れる。

顔を上げると、安堂くんのシャツが私の涙を吸ってグズグズに濡れていた。

『柊木は優しいからダメだよ』

その、濡れたシャツをぼうつと眺めながら安堂くんの言葉をふ、
と思いついていた。

「濡れちゃったね……ごめん」

言って頬を寄せると、濡れて冷えたシャツが同じように濡れた私の頬に貼り付く。

その向こうにある温かな体温と、耳を寄せる事で届く規則正しい鼓動が泣いたことで興奮を極めた頭を徐々に冷やして行く。

「いいよ、いっぱい泣いて」

そう言いながら背中に戻された腕の、強くもなく、かと言って離れてしまいたいほど遠くもない力加減が心地いい。

「安堂くんって優しいんだね」

夢の中に落ちていくような、心地いい脱力感に抗う事無く瞼を閉じて、言う。

「オレは”優しく”ないよ」

告げて一瞬、安堂くんの腕に力が込められるのが分かった。
ふ、と身体が軽くなり、安堂くんと共に夢の中に落ちたのだと思
った。

ぐ、と押し掛かる重さと温もりは誰だって同じな筈なのに、何故
かとても温かく、気持ちが安らぐような気さえする。

「このまま寝ちゃいな」

閉じた瞼の向こうで声がする。

頬に柔らかな何かが触れる間際、仄かに煙草の匂いがした。

「柊木くんを抱きしめられると胸がぎゅっと苦しくなって、いくら
慣れようと頑張っても身体が強張って仕方が無くて」

額に、頬に、温かくて柔らかな安堂くんの唇が優しく触れる。

閉じたままの瞼の裏に、優しくほほ笑む安堂くんを見ていた。

「怖いって言うのとは少し違う気がするけどでも、逃げ出したくな
るくらい緊張して」

寄り添うように重ねられた身体から伝わる体温が、心の中の深い
ところまで温めてくれる気がした。

「そういう事に慣れてないからだと思ってただけ……」

鼻に、耳に、そしてまた、額に。

次々と優しく唇を落とす安堂くんが、合間に私の言葉に相槌を打
つてくれる。

「こんな風に温かな気持ちになる事も……あるんだね」

告げて濡れた瞼を開いた。

間近に迫る安堂くんの、優しげに伏せられた瞳が一瞬、ほんの僅
かに揺れた気がした。

「沙優……」

名前を呼んだ唇が迫り、瞼を閉じるとその上にそっと触れる。

右に、そして左に。

温かな温もりはそうして、名前を呼ぼうとした私の唇を塞いだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2605r/>

スマイル

2011年5月26日21時55分発行